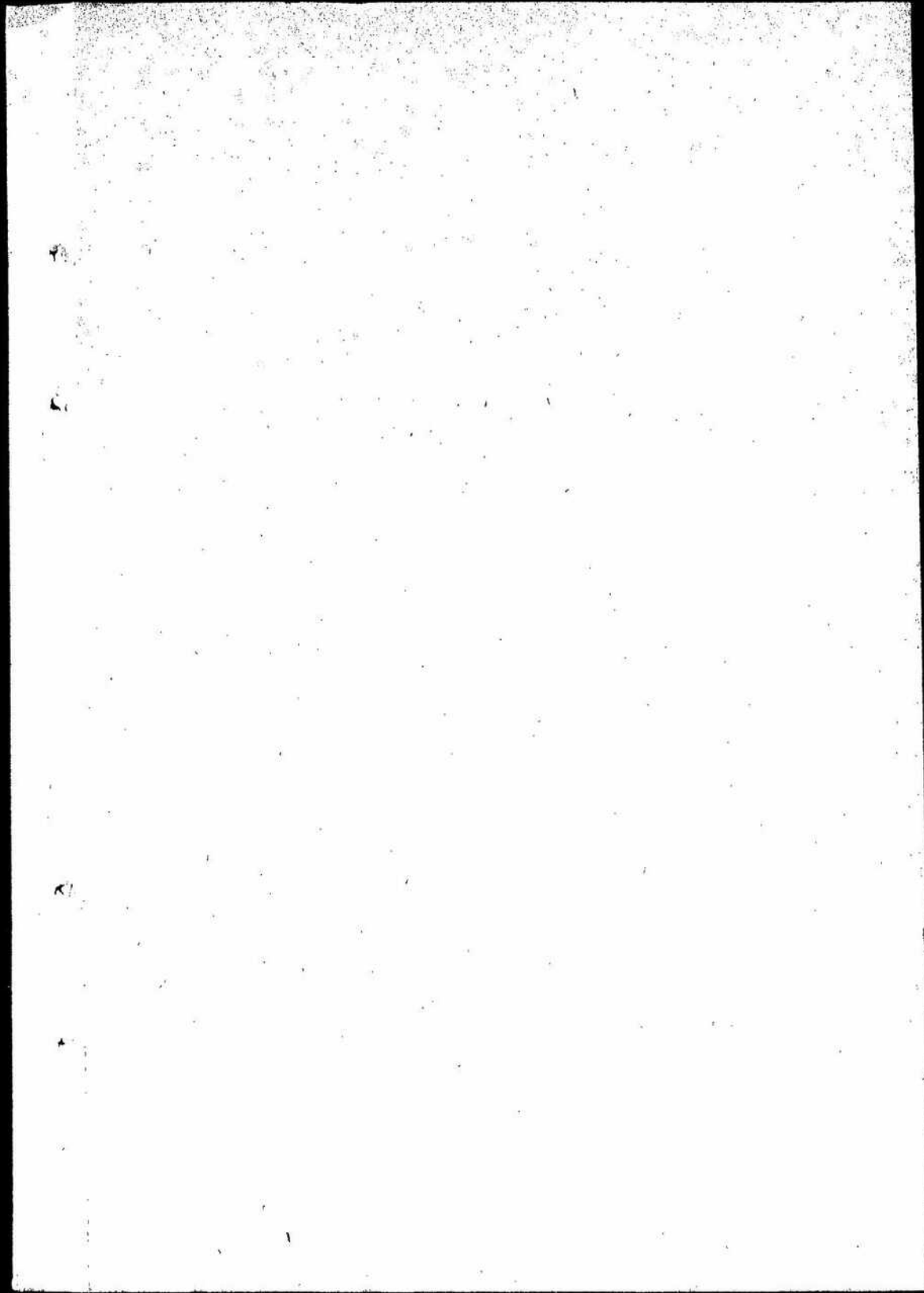




| | |
|--------|-------|
| 国立公文書館 | |
| 分類 | ③ ④ |
| | 3 A |
| 排架番号 | 15 |
| | 66-21 |



極秘

大東亞建設審議會第五部會第四回會議配布資料

一 資源礦下共榮團

南方開發下科學技術

粉礦ノ利用

二 纖維部門答申資料

三 大東亞共榮團石炭開發ニ關スル意見

四 石油部門ニ對スル意見書

五 大東亞經濟建設下北支ノ鐵工業及電力ノ開發ニ就

六 大東亞鑛業建設方策私案

七 大東亞電力方策案

八 大東亞共榮團非鐵金屬開發計畫案

WDC 22-3551

二七六一

66-21

大河内委員

津田委員

松本委員

橋本委員

津島委員

伊藤委員

池尾專門委員

久保由專門委員

川島專門委員

手記 川島

裏面白紙

裏面白紙

九大東亜共榮圈内ニ於ケル非鐵金屬生産擴充目標

小村專門委員

一〇纖維部パルプ及紙關係

高嶋專門委員

一一大東亜共榮圈内輕金屬事業建設ニ關スル意見

大屋專門委員

大東亜共榮圈内化學工業建設ニ關スル意見

極秘

一、資源戰、共榮圈
二、南方開發、科學技術
三、紛争ノ利用

委員

大河内正敏

裏面白紙

4/2

一、資源戰と共榮圈

大東亞戰爭ハ、米、英ヲ打倒シテ彼等ノ虐政カラ苛ゲラレテキタ民族ノ開放ニアルト同時ニ、國防上ニ必要ナ資源ヲ獲得スル戰デアル。國防物資ヲ生産スルタメノ資源ガ得ラレナケレバ、自給自足ノ高度國防國家ハ建設出來ナイカラダ。日本民族ノ生存ガ脅カサレルカラ、生存ニ必要ナ物資ヲ得ルタメノ生存圈ガ共榮圈デアル。圈内ノ民族ヲ米、英、蘭等ノ暴政ヤ搾取カラ開放シテ、互ヒニ物資ノ交流ヲ圖リ、以ツテ日本ノ國防ヲ完全ニスルト同時ニ、彼等ノ生存安住ヲ確保シテヤツテ、始メテ共榮圈ガ建設出來ルデアル。ダカラ、從來不合理ナ關稅ヤ其他ノ手段ヲ以ツテ日本品ノ輸入ヲ拒止シ、反對ニ自國ノ製品ヲ日本品ヨリモ遙カニ高價ニ共榮圈内ノ民衆ニ押シツケテキタ米、英等ノ猶太主義ハ、今度ノ聖戰ニヨリ完全ニ打破サレタガ、同時ニコレラノ物資ハ日本カラ供給シテヤラナケレバ、彼等幾億ノ民衆ハコレヲ得ル途ガナイ。日本ハ資源戰デ資源ヲ獲得シタガ、同時ニ加工品ヲ共榮

一、資源戰と共榮圈

大東亞戰爭ハ、米、英ヲ打倒シテ彼等ノ虐政カラ苛ゲラレテキタ民族ノ開放ニアルト同時ニ、國防上ニ必要ナ資源ヲ獲得スル戰デアル。國防物資ヲ生産スルタメノ資源ガ得ラレナケレバ、自給自足ノ高度國防國家ハ建設出來ナイカラダ。日本民族ノ生存ガ脅カサレルカラ、生存ニ必要ナ物資ヲ得ルタメノ生存圈ガ共榮圈デアル。圈内ノ民族ヲ米、英、蘭等ノ暴政ヤ搾取カラ開放シテ、互ヒニ物資ノ交流ヲ圖リ、以ツテ日本ノ國防ヲ完全ニスルト同時ニ、彼等ノ生存安住ヲ確保シテヤツテ、始メテ共榮圈ガ建設出來ルノデアル。ダカラ、從來不合理ナ關稅ヤ其ノ他ノ手段ヲ以ツテ日本品ノ輸入ヲ拒止シ、反對ニ自國ノ製品ヲ日本品ヨリモ遙カニ高價ニ共榮圈内ノ民衆ニ押シツケテキタ米、英等ノ猶太主義ハ、今度ノ聖戰ニヨリ完全ニ打破サレタガ、同時ニコレラノ物資ハ日本カラ供給シテヤラナケレバ、彼等幾億ノ民衆ハコレヲ得ル途ガナイ。日本ハ資源戰デ資源ヲ獲得シタガ、同時ニ加工品ヲ共榮

圈内ノ民衆ニ供給スル義務ヲ持ツベシナル。

米、英ノ權益獲得政策ハ國家本位デモナケレバ、無論、人道主義デモナイ。猶太思想ヲ現レトシテ彼等ノ利益追及主義デアルカラ、此處ニ必ラス搾取ガ起ル。サウシテ日本品ノ輸入ヲ拒否シテ、利益ノ壟斷ヲ圖ルタメニ日貨排斥ヲ煽動シテキタノデアアル。ダカラ今後日本ガ共
共榮圈内ノ物資ノ交流ヲ受持タナケレバ、何人モ其ノ任ニ當ル者ガナイ。
共榮圈内ノ民族ハ資源ノ上ニ住ミナガラ、ソレヲ物資化スル近代工業ヲ持タナイタメニ、十分ノ生産ガナイノデアアル。此ノ點ハ滿洲、支那等ト比ベテ大イニ異ル處デアツテ、英、米多年ノ磨政ハ工業發展ヲ阻止シテ自國商品ノ賣附ケ主義ヲ採ツテキタカラ、原始産業ノ外ミルベキモノガナイ。偶々アレバソレハ、米、英人カ革嚮ノ經營スルモノデア
アル。

大東亞資源戰ハ世界無比ノ電撃戰デ、何人モ豫想シ得ザル戰果ヲ收メタガ、同時ニ後方ノ資源開發經營等ガ非常ニムスカシイコトヲ覺悟

(三)



シヤケレバナラヌ。例へば、英獨ノ北歐作戦ハ主トシテ鐵鑛獲得ノ資源戰ダト云ハレテキル。サウシテ此ノ良好ナ鐵鑛石ハ平素ヨリ盛ニ開發サレ、稼行サレ、且ツ埋藏量等モ明ラカニナツテキタモノデアラカラ、資源戰ニ勝ツタ者ハソノママ資源ガ利用出來ル。然ルニ、大東亞共榮圈内ノ資源ハ、一、三ノモノヲ除イテハ殆ンド凡テガ未開發ノモノデアリ而モ埋藏量等ノ未知ノモノデアル。サウシテ彼等ガスデニ開發利用シテキタ資源ハ、現地ニ於テ加工セズニ、材料ノ儘、本國ニ運バレ、或ヒハ全世界ニ向ツテ輸出サレツツタ。例へば、ゴム、錫、麻等ノ如キ、共榮圈内ノ消費ハ生産ノ何分ノ一ニモ當ラナイ。現地ノ民衆カラ見レバ、生活必需品ノ資源ハアツテモ、ソレハ全部、英米ニ持チ行カレ、ソノ僅カノモノガ加工サレテ非常ナ高價ヲ賣リ附ケラレテキタノデアル。

資源戰ノ後方經營ハ、是等ノ不合理ヲ是正スルト同時ニ、共榮圈内ヲ使用シ切レナイ過剩物資ノ生産、例へば、錫、ゴム、砂糖等ノ生産

ヲ如何ニ處理シテ行クカ、ノ問題デアル。此ノ點ハ從來ノ産業立地トハ全く反對ニ考ヘラレナケレバナラヌ。從來ハ、例ヘバ農業立地ニ就イテ考察スレバ、下ノ地方ニハ如何ナル農業ガ適スルカ、牧畜業ヲ營ムニハ何處ガ宜シイカ、ソレニ應ズル立地條件ノ檢討ヲシ、種々比較研究スルモノガ農業立地論ノ分野デアツタ。或ヒハ製鐵業ヲ營ムニハ、本シナ地方ガ適スルカ、自動車製造工場ヲ新シク設置スルニハ何處ガ宜シイカ、ヲ檢討シ、研究スルノガ今迄ノ工業立地論ヲ取り扱フ範圍デアル。

然ルニ、共榮圈内ノ過剩物資對策ニ關スル立地論ハサウデハナイ。物資ノ數量ガ先ヅ與ヘラレテキテ、ソレヲ適當ニ處理スルタメノ工業立地論ヲ吾人ハ檢討シナケレバナラヌ。一言ニシテ云ヘバ、物資ノ數量ヲ已知トシテ、ソレヲ合理的ニ出來ルダケ多量ニ消費シ加工スルタメノ工業立地ノ研究デアルカラ、立地ハ一箇所ニ限ラナイ。數多キ立地ノ選定モ考ヘラレナケレバナラヌ。サウシテ、如何ニシテモ已知數量ノ物資ガ消費シ切レナイ場合ハ、ソノ物資ノ生産制限ヲヤラナケレ

裏面白紙

バナラヌ。シカシ、コレハ非常手段デアツテ、現地民衆ノ失業問題等
モ伴フカラ、萬策盡キテ産業政策ガ失敗シナイ限り、飽ク迄避ケナケ
レバナラヌ。資源戦ニ成功シテ後方經營ニ失敗シタコトニナルカ
シ、若シ資源戦ガ更ニ進展シテ、樞軸側トノ連絡、物資ノ交流ガ出来
レバ、過剰物資問題ハ全ク霧散シ去ルノデアル。

今後、資源戦ガ何處マデ發展スルカハ別問題トシテ、大東亞共榮圈
ノ建設ハ日本ノ自給自足ノ國防經濟ヲ確立スルト同時ニ、ソノ中ニ包
含サレ、而モ日本ノ協力スル多數ノ民族、幾億ノ民衆ヲシテ米、英ノ
暴政ト搾取トカラ脱却セシメ、無限ノ皇恩ニ浴セシメテ、彼等ニ安住
ノ地ヲ與ヘ、生ヲ樂シマセルノハ日本國民ノ義務デナケレバナラヌ。
吾人ノ生存圈ハ又、彼等ノ生存圈デアツテ互ヒニ同ジ生存圈内ニア
ツテ物資ノ交流、國防ノ共通ヲ圖ルコトガ大東亞共榮圈ノ建設ニ外ナ
ラヌ。故ニソノ理念ハ個人主義、自由主義、割據主義ヲ排斥シ、猶太
思想カラ脱却シテ、眞ニ大東亞共榮圈全體ノ上ニ立ツタ全體主義デナ
ケレバナラヌ。

二、南方開發と科學技術

日本ハ共榮圈ノ建設ニ對シ、已ニ相當ノ經營ヲ持ツテキル。滿洲國ノ建設ハ日本ノ大區ニ於ケル共榮圈ノ建設ニ外ナラナイ。ソレハ英米等ノ勢力カラザル防害壓迫ヲ受ケタコトハ、尙ホ吾人ノ記憶ニ新々ナトゴロデアル。シカシ自露戰役後ニ於テ已ニ日本ハ南滿ノ開發ニ富リ、國防物資ノ獲得ニ乗り出シテキル。シカシ今日カラミレバ、産業立地ノ機軸ノ如キハ殆んど顧ミラレナカッタト云ツテモヨイ位ニ輕視サレテキタ。ノミナラス、富強ハ已ムヲ得ナカッタト云へ、資源開發ト云ヒ交通問題ト云ヒ、日本ノ科學、日本ノ技術ヲ共榮圈ハ建設サレタノデハナクテ、歐米直輸入ノモノノミデアツタ。

石炭ノ開發、鋼鐵ノ設備、鐵道ノ機關車、車廂ニ至ル迄殆んど凡テガ歐米ニ注文サレテキタカラ、日本ノ大區共榮圈ノ建設ハ、日本ノ科學、日本ノ技術ニ依ル處ハイクラモナクテ、大部分ガ歐米ノ科學ト技術トニ



依存シテキタノデアル。コレハ當時トシテハ已ムヲ得ナカツタデアラウ
 ガ、ソレガドレダケ民衆ノ侮蔑ヲ招イタカ。共榮國ノ建設ガ歐米ノ科學
 ト技術トテナケレバ出來ナイノナテ、日本人ニ建設ヲ委セナクテモ、金
 サヘ出セバ誰ニデモ出來ル。金力ナラバ日本ヲ輾ルコトハ要ラナイ。吾
 ヲ方方上ダ、トノ猶太思想ハ、先ヅ第一ニ日本ヲ輕視スルニ至ツタト
 思フ。ソコヘ金力ヲ唯一ノ武器トスル米、英ガツケ込ムノハ當然ダ。日
 露戰爭ソノモノモ、日本ガ猶太金力ノ術ニ勝ツ屈シテ實資金ヲ調達シタ
 コトハ彼等能ク承知シテキル。戰爭ニ勝ツタメトハ云ヘ、何故涙ヲ吞ン
 デ猶太金力ノ前ニ叩頭シナケレバナラナカツタカ。國防物資ノ自給が出
 來ナイカラ、輸入ニ頼ルタメデアル。當時、若シ露西亞ガ日本ヲ經濟封
 鎖シ得たら、國防物資ノ輸入モ出來ナクナリ、如何ナル結果ニ立到ツタ
 カハ計リ知レナイ。否、日本ハ決シテ露西亞ヲ敵トシテハ立ち得ナカツ
 タデアラウ。

大東亞戰ノ特徵ハ日本ガ米英、勢力ヲ擊滅シテ行クト同時ニ着々トシ



裏面白紙

テ、切實ノ獲得ニ成功シ、自給自足ノ國防時ヲ豫立シテ行ク事トス
今ヨソ、並力高麗主權ノ猶太思慮ヲ排撃スル絶好ノ機會デアルト同時ニ
大東亞ノ建設ハ、日本ノ裨益、日本ノ技術ニ頼ル以外ニ何物モナイコト
ヲ知ラナケレバナラヌサウシテ、産業立地ノ豫計ニ當ツテハ、裨益ト技
術ト多分ニ取り入レテ資源賦ノ賦果ヲ無駄ニシナイヤウニ心掛ケナケ
レバナラヌ。

産業立地豫計ノ一例トシテ、豊後立地ヲ選ガテミヨウト悉フル有史以
前カラ吾々ノ祖先ハ木ヲ伐ツテ木炭ニ焼キ、ソレヲ鐵鑛ヲ精煉シテキタ
カフ、鐵鑛石ノ産地ニ近イ大森林ガ製鐵立地トシテ採掘サレタ。鐵一屯
當リ十數倍モノ木炭ヲ使用シタカラ、木炭ノ一モ得易キ處テ、シカモ、
鐵鑛石産地ニ近イ處ガ製鐵立地條件ヲ具備シテキタ。當時、火鑪ヲ上昇
サセルハメニ、人力ニヨル吹鼓（ブイ）ガ使ハレテキタガ、水車ヲ利
用シテ送風シタカスコトガ發明サレテカラハ、大森林ニ近ク且ツ水力
ノ利便シ得ベキ川ノ邊リガ立地條件トナツタ。木炭ノ代リニ鐵炭が使ハ

レルヤウニナツタト同時ニ、蒸氣機關ノ發明ハ從來ノ森林ヲ捨テ川岸ヲ捨テ、石炭ノ廉價ノ地方ニ製鐵所ヲ建設サレルヤウニナツタ。サウシテ製鐵業ハ益々大規模トナツタカラ、石炭、鑛石等ヲ數箇所カラ運搬シテ來ル關係上、工業港ヲ擁スル大規模ノ工業地域デナケレバ製鐵立地條件ヲ満足シ得ナクラツタ。或ヒハ副産物ノ處理ヲ有利ナラシメルタメニハ大都市ノ附近ガ製鐵立地條件ヲ具備スル場合モ出來テ來タ。港灣ニ恵マレザル北支、滿洲ノ製鐵立地ハ此ノ點カラミテ、一箇所ニ建設サレル製鐵所ノ生産規模ハアツタリ大ヲ望マレナイ。シカシ、今日ノ製鐵業ハ著シキ技術ノ進歩カラ、石炭所要量ガ尠クナツタト同時ニ、鑛石ノ品位ハ落チテ鐵一屯當リ三屯四屯ノ鑛石ヲ消費スル關係カラ、石炭ノ得易イ地點ヨリモ鑛石産地ニ近イ處ニ立地ヲ求ムルヤウニ、マダ變ツテ來タ。ソノ最モ好イ例ハ、獨逸ノ四ヶ年計畫デ撰定シタザルツキツターノ歐洲第一ノ製鐵所デアアル。人口僅カ五千内外ノ鑛泉町ガ一躍シテ二十萬人ノ人口ヲ擁シ、年産一十萬屯ノ大製鐵所所在地トナツタノハ、同地ニハ貧鑛デアアルガ數百億屯ニ上ル大鑛鑛床ガアルコトヲ、古生物學ノ上カラモ立

證サレタカラデアアル。コノ如ク科學ト技術ノ進歩ハ昔カラ今日マデ幾度カ埋藏立地ヲ變換サセタ。

南方開發ニ當リ、製鐵所立地デスグ問題トナルノハ、骸炭トナル良質ノ石炭ノ産地ガ南方ニ尠ク且ツ埋藏量モ未知デアアル點デアアル。シカシ、鐵鑛石ハ非常ニ多量デアルカラ、檢討ニヨリ適當ナ立地條件ハ必ス見出サレルト思フ。シカシ在來ノ製鐵法ニヨル立地條件カラ見テハ、南方ガ今ノ處適當デナイト云フ場合ニハ、科學ト技術トハマタ他ノ新シキ製鐵法ヲ見出シテ來ル。例ヘバ、南方ノ鑛石ト南方ノ燃料トニ適スル直接製鋼法ノ如キノ一例デアアル。即チ燃料トシテ普通炭或ヒハ重油ヲ使用シテ、粉鐵鑛石カラ鑛材ヲ直接ニ造ルコトハスデニ日本ノ技術デ可能トナツテキル。イヅレニシテモ製鐵ニ限ラズ共榮圈内ノ凡テノ産業ハ從來ノ自由主義ヲ捨テテ國防經濟ヲ基調トシ、且ツ舊來ノ生産方法ニ拘泥セズ眞ニ共榮圈内全体ヲ高處カラミテソノ産業立地ハ檢討セラルベキデアアル。

(一七三一九)

(一〇)

三、粉鐵ノ利用

大東亞共榮圈ノ建設ガ日本ノ國防上絕對的ノモノデアルコトハ事新
 シク云フ迄モナイ。サウシテソレニハ鐵鑛ノ大増産ガ何ヨリノ急務デ
 アルコトモ議論ノ餘地ガナイ。併シ屑鐵ニ依存セズシテ鐵鋼ノ大増産
 タ企圖スル場合ニハ、前述ノ如ク貧鑛處理ノ必要ニ迫ラレテ來ルノデ
 アルガ、若シ貧鑛ヲ塊鑛ノモマ英國式ニ熔鑛爐ニ投入スレバ多量ノ製
 鐵用コークスガ要ル。處ガ支那大陸ヲ除イテハ此種ノコークス用石炭
 ノ大埋藏地ガ未ダ發見サレテキナイ。大體ノ見當デハ佛印ニ二百億屯、
 蘭印ニ十三、四億屯アルトイハレテキルガ、此内製鐵用コークスヲ製
 造シ得ル石炭ガドレダケアルカハ適確ノ數字ガ判ラナイ。但シ即檢ニ
 七百九十億屯、濠洲ニ一千六百五十億屯ト報セラレテ、ココニハ既ニ
 製鐵所ガ出來テキル。併シ何レニシテモ南方ノ石炭資源ヲ目當トシテ
 製鐵立地ヲ考慮スルコトハ尙早デアルトノ議論モ成立スル。

該炭用ノ石炭埋藏量ハ未確定デアルガ、鐵鑛石ハ相當大量ニ發見サ



レテキル。サウシテ大東亞戰以前カラ年々ビルマ半島、南印等カラ鐵
 礦石ヲ輸入シテキタ。海上運輸ガ陸上ノ汽車運送ト比ベテ比較ニナラ
 ナイ程容易且廉價デアラフカラデアルセ併シ今日ハ船底ノ關係ヲテ、
 南方ノ鐵石ヲ大量ニ運ブコトハ困難デアル。マシテハ貧鐵ハ到底電機
 ガ出來ナイカラ現地テ處理スルコトヲ考ヘナケレバナラス。ソレニハ
 前述シタヤウニ貧鐵ヲ選礦セズ塊鐵ノマ、コトクヌヲ用ヒテ精煉スル
 トスレバコトクヌ用ノ石炭ガ問題トナウテ來ルカラ、南方現地テ製鐵
 ハ貧鐵ヲ選礦シテ粉鐵トナツタモノヲ、コトクヌヲ使用セズシテ精煉
 スル別途ノ製鐵方法ガ採用サレバナケレバナラスト思フ。

南方ニアル良好ノ鐵礦石ハ從來ノヤウニ内地迄運搬スルカ或ハ現
 地テコトクヌヲ用ヒル在來ノ製鐵法ヲ精煉スルノモ宜シイ。何レニシ
 テモ富鐵ダケテハ足りナイカラ、コレト並行シテ粉鐵ノ精煉ヲ行ハテ
 ケレバナラス。南方ノ製鐵ハ到底採算ニ自信ガオイト云フノハ且國ノ
 無イ猶太恩德ニ墮シテキルカラダ。ソレヲ平時デモ採算可能スベク突



裏面白紙

進スルモノハ、國防經濟下ノ科學ノ挺身隊デナクテナンデアラウ。
南方ニコトクス用石炭ガ多量ニ埋藏サレテキルカ否カハ未確定ダ。併
重油ハ十分ニアル。ダカラ私ハ南方製鐵用燃料トシテ重油ヲ利用ス
コトヲ提唱シタイ。已ニ戰前層鐵ニ極少量ノ銑鐵ヲ混ジテ平爐デ製
鋼スル中小製鋼業者ハ、重油ヲ用ヒテキタノデアアル。層鐵ノ代リニ粉
頤ヲ用ユルコトヲ考ヘレバソレデヨイ譯ダ。コレニハ種々ノ方法ガ日
本ニ於テモ歐米ニ於テモ發見サレテキテ、已ニ實施サレテキルモノモ
アルカラ、ココデ詳述スル必要ハナイ。

次ギハ粉鐵精煉ノ電氣輿鐵ガ南方ニ於テ有望デアルト思フ。ソレハ
永開發デアルガ水力電氣ガ豐富デアルカラダ。特ニ蘭印ハ千五百萬
以上ノ發電能力ガアルトイフコトデアアル。ソノ他ヒルマ、佛印等デ
モ二、三百萬キロノ發電可能ト云フコトデアルカラ、粉鐵ヲ用ヒテ直
接電氣製鋼ヲヤルカ、或ハ重油精煉ト電氣精煉トノ組ミ合セニヨルカ、
何レニシテモコトクスヲ用ヒズシテ粉鐵ヨリノ直接製鋼法デアアル。

裏面白紙

日本ハ今如何ナル犠牲ヲ拂ツテモ高度國防國家ノ完成ヲ期シテキル。
萬難ヲ排シテ一屯ノ鐵鑛デモ増産シナケレバナラヌ。鐵一屯當リ幾ラ
ノ利潤ガ出ルトイフ算盤ノ問題デハナイ。一屯ノ鐵デモ何個ノ爆彈ガ
出来ルカトイフ問題デアル。一萬屯ノ貨物船ニハ何千屯ノ鋼材ガ要ル
カトイフ問題ダ。猶太主義デハ使ヘナイ鐵鑛カラ、科學技術ノ動員ニ
ヨル國防主義デ使ヒコナシテ鐵鑛ヲ生産スルノガ吾人ノ責務ダ。高度
國防國家ヲ排撃スルモノハ、利潤第一主義ノ祖國ヲ持タナイ猶太主義
アナケレバナラヌ。

(四)



極秘

織 維 部 門 答 申 資 料
（ 第 五 部 第 六 部 兼 用 ）

委 員 津 田 信 吾

裏 面 白 紙

目次

- 一、根本方策
- 二、纖維部門ノ生産力
- 三、綿糸布
- 四、生絲、絹紡、袖糸、絹布
- 五、人絹、スワ、化學纖維
- 六、紡毛、梳毛、毛織物
- 七、麻糸布
- 八、纖維資源ノ開拓ト其重點

裏面白紙

一、根本方策

(4) 纖維資源ノ大方ハ農村ノ所産ナリ、實需ヲ超過シテ多收穫トナレバ相場下落シ所勞ニ關ユルコト薄ク其ノ利益ハ必シモ工業又ハ商業ト一致スルモノニアラズ。茲ニ農工商ノ社會問題ヲ胚胎ス、依ツテ農工商各階ハ何レモ自家ノ得分ガ相互依存ノ關係ニアルコトヲ自覺セシメ利潤交流ノ途ヲ開ジ以テ家族主義的ノ日本經濟ヲ確立スルコト肝要ナリ。戰時下ニアリテハ税法ノ改正ニヨリ利潤ハ概ネ直接又ハ間接ニ國庫ニ還流スルヲ以テ論議ノ餘地ナキモ戰後ニ於テ各業間ニ利潤ノ交流ヲ圖ル新組織ヲ必要トス、一例ヲ擧グレバ各業者利潤ノ何割カラ天引釀出セシメ、此ル計算法ニヨリ分配ノ公平ヲ期スルガ如シ。計劃經濟ノ根本方策ハ日本の性格ニヨラシムベシ、戰後大東亞國內諸國ニ對スル方策モ亦此種ノ工夫アルヲ要ス。

(四) 纖維部門ハ遠キ以前ヨリ組織化サレ統制機能ヲ有スルコト他ノ業界ノ比ニアラズ、戰變以後ハ棉花、羊毛輸入制限ノ爲メ逸早ク政府當局ノ監督下ニ置カレ國家ノ要請ニ應ジ屢々其機構ヲ變更シ國策ニ順應シツツアリ。只問題トナルハ纖維部門ハ複雜多岐且ツ關係範圍極メテ廣ク整理統合ハ慎重ヲ期スベク短兵急ナルヲ得ザル點ニアリ。殊ニ棉花、羊毛ノ不足ハ代用原料ガ各業界ニ交流スルニ至リタル爲メ外見上混戦状態ヲ惹起セリト雖モ内面的ニハ各種原料ニ對スル化學的研究旺盛トナリ各界ヲ通ジテ空前ノ進歩發達ヲ遂ゲツツアルハ斯界ノ爲メ慶賀スベキ現象ナリ。從ツテ業界ハ次第ニ多角形的統合ニ進路ヲ向ケツツ東洋獨得ノ纖維ヲ創造スル機運ヲ養成シツツアルヲ以テ國民動員計畫ニ大ナル支障ヲ與ヘザル限り生産量ニ於テハ現在ヲ以テ最低ノ水準ト認メ各業交流ノ風潮ハ抑止スベキモノニアラズト認ム。

裏面白紙

(ハ) 織維部門ノ最大問題ハ原料資源ナリ、原料ヲ確保セザル工業ハ
砂上ノ樓閣ナリ大東亞範圍内ニ原料ノ供給自足ヲ圖ルヲ根本方
策トス、其實料織維ニ後述ブルガ如シ

一、織維部門ノ生産力

織維部門ノ生産ハ華僑前(昭和十一年)ト現在ヲ比較スル時大變
左ノ如シ但シ其設備ヲ此生産ニ應ジ壓縮シ得ザルハ勞務動員計劃
一ヨリ工員募集ノ速ヲ失ヒ夜勤ヲ廢シ晝夜專門ニ轉向セル爲メ生
産量以上ノ設備ヲ要スル等事情極メテ複雑ニシテ速達ヲ期サズ



| 部門 | 對學變前 生産量 | 軍需 民需 | 軍需上民需ノ割合 | 摘 要 |
|-----|-------------|----------|----------|----------------|
| 綿糸布 | 三割弱 | 五〇 | 五〇 | |
| 生糸 | 六割強 | 微量 | 大部分 | |
| 絹紡 | 七割強 | 微量 | 大部分 | |
| 紬糸 | 九割五分 | 三〇 | 七〇 | |
| 絹布 | 十割 | 一〇 | 九〇 | |
| 絹 | 四割 | 一〇 | 九〇 | 十二年ニ比スレバ二割ニ過ギズ |
| 絹。以 | 十二年ニ比シ十割 | 一五 | 八五 | 十三年ニ比スレバ五割ニ過ギズ |
| 紡毛 | 九割 | 七〇 | 三〇 | |
| 混毛 | 三割弱 | 一〇 | 九〇 | |
| 毛織物 | 七割 | 六〇 | 四〇 | |
| 源布 | 十割 | 一〇〇 | 〇 | |

裏面白紙

綿糸布

(1) 立地ノ關係

綿糸布部門ハ昭和八年以來英國ヲ凌駕シ斷然世界ノ市場ヲ壓シタルモ事變以來順次原棉ノ輸入、勞力、動力ノ制限ヲ受ケテ退却シ現在ハ其最少限度ノ三割ヲ割ルニ到レリ、事變前ハ四割ヲ以テ内需トシ六割ヲ輸出スルヲ普通トセリ、而シテ戰前ニ有セシ日、滿、支紡績ノ合計設備ヲ以テスルモ戰後大東亞國內ノ需用ヲ充タシ得ルヤ否ヤハ疑ヲ存スルトコロニシテ眼前ノ餘裕ヲ見テ直チニ其設備ヲ遊休ナリト斷ズルヲ得ズ、戰後ハ勿論ノコト現在ニ於テモ南洋經營上必懸ナル軍票ノ裏付トシテ綿糸布ノ需用ヲ考慮セバ綿糸布増産ノ必要アルコトヲ言フ俟タズ、然レドモ立地問題トシテ内外ノ配置ヲ如何ニスベキヤノ問題ハ極メテ重大ナリ、現ニ行ハレツ、アル勤員計劃ハ知ルニ由ナキモ他ノ重工業化學方面ノ大増産ニ想到スレバ戰後ニ於テモ綿糸布部門ヲ戰

前ニ復歸スルコト困難ナルベシ。從ツテ豫メ戰後ノ立地計畫ヲ
建テ善處スルヲ可トス。一例ヲ舉グレバ戰前ヲ一〇〇トシ現在
實行中ノ廢機二〇ヲ除キ六〇ヲ内地ニ止メ二〇ヲ外地主トシテ
北支、中支ノ輿地綿作地ニ移スガ如シ。但シ此場合三〇運輸ノ
現状ニ對シ六〇ヲ内地ニ保有セントスルハ

(1) 南方國內工作ニ利用

(2) 高級品技術保全

(3) 濠洲羊毛ヲ綿紡機ニヨリ消化スル場合ニ備ヘントスルモノ
ナリ

又二〇ヲ北支、中支ノ輿地ニ移サントスルハ日支經濟合作ヲ海
岸線ニ集中スルヨリモ輿地廣範圍ノ綿作ヲ分散シ以テ日支全
面的合作ニ資セントスルモノナリ。爾万諸島万ハ棉花増産ノ實
績ガリタル後考慮スルヲ可トス
開發方式、資金其他



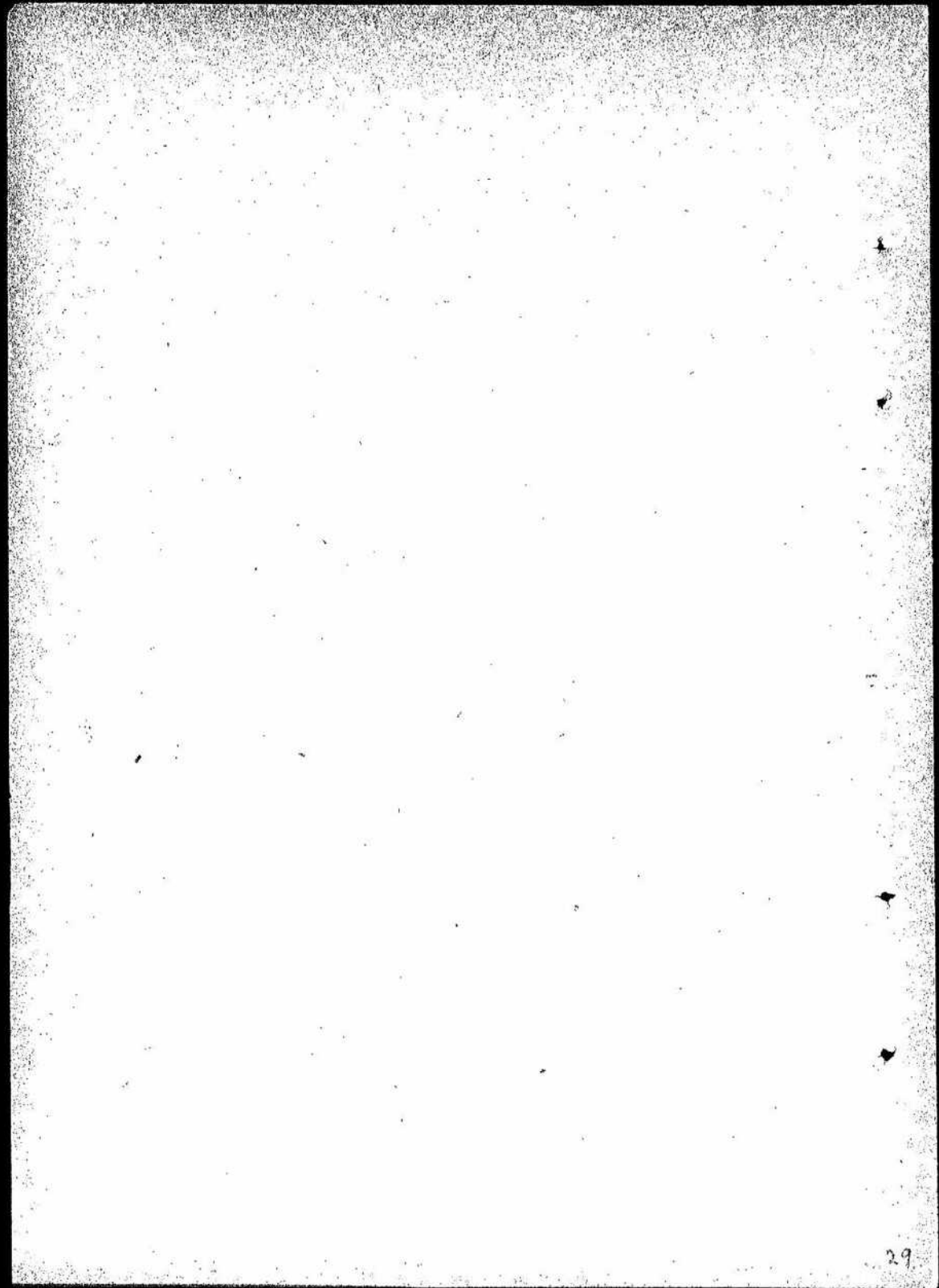
印度紡績ハ華變以來日本綿糸布ノ後退ト低賃銀ヲ利用シテ近年
長足ノ伸力ヲ示シ獨英戰以來其勢ヲ増進セリ、今後ノコトハ豫
測シ得ザルモ強敵タルハ論ナシ。

内地ハ戰後ト雖モ勳員計劃上復舊困難ト認ムルヲ以テ綿糸布設
備ノ一部ヲ大陸ニ移行シ其勞力ヲ利用シテ外地ニ進出セシムル
モ其利益ヲ内地ニ遡流セシムル事アルヲ以テ内地ニヨリ移設ス
ル工場ハ專ラ内地資本ニヨルヲ原則トシ此ヲ第一順位ニ處キ
此内先行スベキハ敵ニヨリ破壊サレタル青島ノ邦人紡績ノ復舊一
次ニ將來大陸ニ新規増設スルモノハ成ルベク日支合作ニ誘致シ
資本ノ割合重役ノ選任等ハ主トシテ支那側ノ希望ニ重點ヲ置ク
ヲ可トスルモ支那人ノ經營振リハ邦人ニ放バサルヲ以テ爾富期
間ニ直リ合作經營ノ責任ハ邦人ノ手ニ委ヌルヲ以テ條件トスル
事アリ

生糸、絹紡、絹布

(1) 絹業ハ國産品ニシテ纖維資源ノ最後ノ生命線ナレバ其重要性ハ寧ロ棉花、羊毛ノ上ニアリ、殊ニ養蠶ハ農村保全ノ眼目ナレバ重用ノ要アリ、然レドモ戰前ノ如ク一ニ其用途ヲ米國婦人ノ靴下ニ限ラレ、多年少數米人ニ翻弄サレタルガ如キハ此機會ニ改メザルヲ待ズ。生産ハ專横以來漸減シ戰前ノ六割ニ過ギザルモ食料問題ニ關聯シ桑園整理ノ犠牲トナリシハ寧ロ蠶業政策轉換ノ好機アリ、農村勞力ノ輕減ヲ圖ル爲メ養蠶ハ糸質ヨリモ糸量多クシテ飼育容易ナル品種ニ改メテ一部ハ短纖維トシテ利用スベク又同時ニ桑園ニヨラズ荒地地ヲ利用シ得ル等諸其ヲ以テ簡易ニ飼育シ得ル野蠶類ヲ奨励シ多收穫ヲ自給トセバ同時ニ絹紡、毛紡ノ原料資源トシテ重要ナリ。

(2) 立地問題トシテハ既ニ米國依頼ヲ離脱シ長纖維及短纖維トシテ利用シ内地及大東亞國內ニ進出スル以上北京、中支ノ蠶業モ亦



裏面白紙

此レト併行シテ可ナリ、必ズシテ競争者トシテ制限スルノ要ナシ、米棉ヲ退治スル爲メニハ多量ヲ要ス滿洲、北支ノ榨蠶亦大ニ獎勵シ羊毛代用ノ資源タラシムベシ、絹紡設備ニ付テハ食料動員ノ關係ヨリ更ラニ減産スル場合ハ其一部ヲ朝鮮、滿洲、北支ニ移設スルヲ可トスベキモ既ニ廢機ヲ決定セラレタレバ其餘力ハ僅少ナルベシ

五、人絹、スワ、化學纖維

(4) 棉花ノ代用トシテノスワハ一時品質ニ付テ非難ヲ受ケタルモ化學ノ進歩ニヨリ既ニ強力人絹ノ出現アリ何等憂フルニ足ラズ棉花問題解決ヲ見ルマデ少ナクトモ現状維持ハ絶對必要ニシテ寧ロ原資材ノ確保ニ協力シ増産スルヲ要ス、然ラザレバ南方ノ代用資源モ活用スルヲ得ザルベシ、スワハスワニアラズシテ凡ユル雜纖維ニ混用スル必緊ノ資材ナリ、又人絹糸布ハ南洋ニ於ケル軍票代用品トシテ有望ナルノミナラズ強力人絹及ビ化學纖維

ノ出限ハ「イヤコ」ド其他軍需資材トシテ有望ナリ、現状ノ四割ハ行過ナリ、緊縮スフニ至リテハ優ニ羊毛ニ代用シ得ル前途ヲ有ス。

立地問題トシテ人絹、スワ、化學纖維ハ多量ノ軟水ヲ要ス。軟水ハ大陸廣シト雖モ此レヲ求メ難シ、又多クノ藥物ヲ要スル化學纖維ハ内地ヲ以テ最適地トスベシ、内地ノ水ハ殆ンド軟水ニシテ天恵無限ナリト雖モ多クハ此偉大ナル天恵ニ氣付カザルコト空氣ノ如シ、日本ノ將來ハ化學ニ托セザルヲ得ズ。

大東亞ハ纖維資源豊富ナルヲ以テ人絹ハ其必要ナシトスルモノアレドモ化學纖維ノ前途ハ洋々タルコト恰モ天然石油ニ對スル人造石油ノ如ク衣料以外ニ特殊ノ用途着々トシテ生マレツツアリ抑制スベキニアラズ、更ラニ伸張セシムルヲ可トス、現在ノ如ク消極策ニ甘ンズル時ハ遂ニ死滅セザルヲ得ザルベシ。



滿洲ニ在リテハ亞麻、練麻ヲ主力ト認ムルモ北滿ノ大豆ハ現地
處理ヲナシ其蛋白ヲ以テ纖維資源トスルコト必要ナリ、葦、豆
桿、麥桿其他ノ現地資源ノ活用ニ重點ヲ置クベシ、又更ラニ石
炭資源ニ富ム朝鮮、滿洲、北支ニ於テ化學纖維ハ將來重要性ヲ
持ツベキヲ以テ豫メ備ヘアルヲ要ス

六、紡毛、梳毛、毛織物

羊毛資源ハ極メテ貧弱ナリト雖モ羊毛ハ廢品回收ニヨリ優ニ十數
回繰返シ利用シ得ルノミナラズ代用纖維ノ混紡ニヨリ其效果大ナ
リ、紡毛部門ハ十割ノ還轉ヲナシ得ルモ新羊毛ヲケレバ久シキニ
ハ耐ヘズ之ニ代シ梳毛ハ現在羊毛ノ缺乏ト爲スルノ廢ニヨリ
三割ニ過ギザルハ已ムナキ次第ナルモ濠洲羊毛入荷ノ上、梳毛ニ
重點アリ輕視スルヲ得ズ現ニ行ハレツツアル廢機ニヨリ尙ホ貯存
スル設備ハ整備スルヲ完成ニヨリ或ハ雜纖維ノ利用ニ、濠洲羊
毛渡來ヲ待ツ外ナク濠洲占領ノ上ハ彼地ニ移設スルヲ下トス



七、麻 布

(イ) 麻糸布ハ軍需ノ饑ナルモノナリ但シ戰時中ハ需要旺盛ナルモ平和時ニ於テ閑散ナリトハ常識ナルモ近來棉花不足ノ爲メ考察セラレタル亞麻、大麻ノ棉花化ハ特別ノ分野ヲ創設スルニ至ルベク、黄麻其他ノ麻類ニ對スル新用途ハ永續スルモノト考ヘラレ、ヲ以テ現在設備ハ戰後ヲ考慮スルモ尙過小ナリ増設ヲ要ス。

(ロ) 立地問題ハ内地ハ現状ニ止メ朝鮮、滿洲、北支、南洋ニ於ケル原料地帯ニ分散増設ヲ可トスルモ前述ノ如ク麻ハ麻業者ニト云フカ如キ見解ヲ捨テ在剩ナル麻ヲ棉花化シテ棉糸布、毛織、絹紡等ニ利用セシムベシ、濠洲羊毛モ此レヲ二回剪ニヨリ短纖維トナストキ棉糸紡機ヲ以テ容易ニ消化シ得ル等原料ノ分野ハ戰前ト一變セリ、此レ大體亞麻ニヨリ捲キ起サレシ纖維業界ノ革命ニシテ一大進歩ナレバ後退セシム可ラズ、相互依存以テ大成セシムベシ。



八、纖維資源ノ開拓ト其重點

(イ) 衣料ハ食糧ト共ニ生活上必緊ノ重要問題ナルモ吾國ノ纖維工業ハ既ニ長足ノ進歩ヲ遂ゲ自給自足ノ域ヲ遙カニ超ヘテ輸出産業ノ大宗タリ、然レドモ其原料ニ至リテハ生糸及ビ化學纖維ヲ自給シ得ルノミニテ棉花羊毛ノ大部分ガ英米依存ノ外ナキハ其一大缺點ナリ依テ速カニ大東亞圈内ニ於テ棉花、羊毛其他ノ原料資源ノ開發ヲ圖リ或ハ代用纖維ノ育成ヲ圖ルコト目下ノ急務ナリ。

東亞圈内所要棉花ハ平時二千萬擔最少限千二百萬擔ヲ要ス現在自給シ得ルモノ僅カニ六百萬擔ナリ。

(ロ) 棉花栽培ノ主要地ハ北支、中支ヲ最適地トスルモ北支ノ開發ハ第一滿洲ト食糧問題ノ緊密化ヲ必要トシ、第二瀾水造林ガ先決要件ナリ、中支ニ於テハ鹽鹼地區ノ利用ト沿澤地ノ開墾ハ米作ト相俟ツテ最モ望ヲ囑スベキモ是亦治安維持ニ一步ヲ進メザルヲ得ズ、又南方新占領地ニ對スル棉花ノ新規開發ハ既ニ方策定マ



リタレバ多言ヲ要セザルモ其大成ハ五年、十年ノ長期ヲ要スル
考以テ其間極力代用纖維ノ育成ト利用ヲ圖ルベシ、幸ニシテ近
年纖維工業ハ化學ノ進歩ト相俟ツテ廣範圍ニ亘ル植物ヲ利用シ
得ルニ到リシヲ以テ當業者ノ創意ト熱意ヲ汲ミ取り以テ不足資
源ノ填補ニ資セシムルコト肝要ナリ。

ハ滿蒙、北支ニ於テハ線麻亞麻ノ栽培ヲ國策纖維トシテ取上ゲ
テ大増産ヲナサシメ其棉化ニヨリテ棉花ニ代用セシメヌフト混
紡セシムレバ夫丈ケニテモ棉花不足ノ問題ハ大半解決シ得ルコ
ト獨逸ノ實例ニ徴シテ明カナリ、況ンヤ南洋ニハラミ、イ
ルヲ初メントシ無數ノ雜纖維アリ、マニラ麻ノ如キモ亦混紡
ニヨリ衣料ニ供シ得ルコト確實ナリ

此ノ如ク共榮園内外ノ纖維資源ハ極メテ豐富ナルヲ以テ慈觀ノ
要ナキモ豫メ對策ヲ講セザレバ大患ヲ生ズベシ遼カニ朝鮮、滿
洲、蒙古、北支ニ於ケル亞麻、線麻、柞蠶ノ大増産ヲ圖リ北支、中



支、南方諸國デハ棉花ノ増産ニ重點ヲ置クコト又南洋ニ於テハ
ラミール、セイザル、黄麻ノ増産ヲ圖リ棉花代用ノ資源トスルコ
ト

(二)パルプ資源ノ如キハ其目標ニヨリ所説ヲ異ニスルモ天與ノ地物
ニ無用ノモノナシ、夫々現地現物ニ望ミ化學ヲ通ジテ別段ノ工
夫大切ニシテ過去ノ習慣ニ悞マス新天地ノ開拓ヲ獎勵スレバ昨
否今是ノ妙光ヲ放ツベシ。木材ヲ紛碎シテパルプトナスハ天理
ニ反ス、原則トシテ其資源ヲ雜草、灌木類ニ求ムベシ

(三)羊毛資源ハ濠洲ノ合併ニヨラザレバ解決困難ナリト雖、最少限
度ヲ北方ニ確保スルコト無用ニアラズ、重點ヲ北滿、蒙古、山
西省ニ置キ綿羊飼育ヲ獎勵シテ有事ニ備フベシ、羊毛ハ少量ノ
混紡ニヨリ克ク雜織織ヲ毛化スル威力ヲ有ス、少量ノ羊毛資源
ハ濠洲ニ關係ナク確保スル必要アリ。此目的ヲ達スル爲メ第一
蒙古地域ニ越冬設備ヲ完備スルカ旗盟ノ境界ヲ復舊撤廢スルコト、



第二ハ滿蒙ニ幽營ノ畜疫研究所ヲ設ケ病疫驅除ノ徹底ヲ期セザル可ラズ、山西地域ハ其風土最モ綿羊ニ適スルヲ以テ種畜所ヲ此地ニ設ケルヲ要ス。

(二) 東洋ハ家蠶、野蠶ノ天賦ナリ極論スレバ纖維資源ハ絹業一本ニテモ窮場ヲ凌キ得ベキ天恵ヲ有スルモ桑園ハ食糧資源ト重複スル場合多キヲ以テ今後ハ野蠶ノ飼育ニ需點ヲ重キ野蠶ノ新利用法ヲ考究シテ東洋獨得ノ新纖維ヲ創造シ世界ヲ光被シ得ル様煥勵スベシ

裏面白紙



極秘

昭和十七年六月

大東亞共榮圈石炭開發ニ關スル意見

大東亞建設審議會
委員 松本健次郎

裏面白紙

昭和十七年六月一日

大東亞建設審議會委員

松本健次郎

大東亞共榮圈石炭開發ニ關スル意見。

一、緊急對策ト恒久對策

緊急對策ハ大東亞共榮圈内各地域ニ於ケル現有開發計畫ヲ基礎トシ、コレニ炭質、採炭能率、輸送等ノ見地ヨリ檢討ヲ加ヘ、勞務、資材、資金ヲ重點的ニ配置シテ、戰爭遂行上必要ナル急需ニ應ゼントス。

恒久對策ハ印度、濠洲ヲ包含セル全地域ニ亘リ、我國ガ開發又ハ開發指導ノ任ニ當リテ、大東亞建設ニ必要ナル石炭ノ生産ヲ戦局ノ進展ニ應ジ、他産業立地計畫ノ進捗ニ伴ヒ實現セントスルニ在リ。從ツテ、コレガ計畫ニ方リテハ前項緊急對策ニ於テ決定セル計畫ヲ或ハ改訂變更ノ必要ヲ生ズ可ク、要ハ緊急對策ヲ恒久對策ニ織リ入レ

テ其ノ間調整宜シキヲ得ルヲ要ス。

二、緊急對策ノ計畫設定

前項緊急對策ノ要旨ニ基キ各地域別増産計畫ヲ設定スルニ當リ、

方針ヲ次ノ如ク定ム。(第一表参照)

- イ、内地ノ開發ニ付テハ内地ニ於ケル國防産業乃至精密工業ニ對シ適當量ノ供給ヲ確實ニ維持スルコトニ重點ヲ置クコト
- ロ、滿支ニ於ケル増産計畫ヲ以テ本緊急對策ノ根幹トナスコト
- ハ、南方地域ニ於テハ可及的速カニ當該地方ノ自給自足ノ確立ヲ目標トスルコト

三、増産計畫ノ目標

緊急對策實行ノ第一期ヲ昭和十七年乃至二十一年ノ五ヶ年トシ、コレヲ第二期、第三期ニ延長シテ各期末年度ニ於ケル出炭計畫ヲ見ルニ次ノ如シ。



裏面白紙

所要條件

前項ノ如ク緊急對策ノ計畫目標ヲ

第一期目標 昭和二十一年度出炭 一億九千五百萬噸

第二期目標 昭和二十六年出炭 二億五千九百八十萬噸

第三期目標 昭和三十一年度出炭 三億二千五十萬噸

設定スルニ當リ、コレガ實現ニ必要ナル條件ヲ檢討スルハ次ノ如

所要技術者

昭和十六年度實數 〇〇一九八

十七年度 〇七三一八

十八年度 三、八八九

十九年度 一、七九八

二十年度 二、六二九

即チ昭和十六年度ニ比シ廿一年度ニ於テハ三、八七〇人、廿一年度ニ於テハ一、六一〇人ノ増員ヲ要ス。

裏面白紙

所要勞力

昭和十六年度實數

九六七五〇〇人

十七年度

一〇八五五〇〇人

廿一年度

一五九一八〇〇人

廿六年度

二二六七四〇〇人

卅一年度

二八九八一〇〇人

昭和十六年度ニ比シ廿一年度ニ於テハ六三三〇〇〇人、昭和十七年度ニ於テハ一九三〇六〇〇人ノ増員ヲ必要トス。

所要固定資産

昭和十六年度出炭實績

一、二六八二五千噸

廿一年度

一九一五〇〇千噸

差引増産

六四六七五千噸

右ニ要スル固定資金

一、八〇〇、〇〇〇千圓

昭和十六年度出炭實績

一、二六八二五千噸

卅一年度

三、二〇五〇〇千噸



裏面白紙

差引 増産 一九三、六七五千應
 右ニ要スル固定資金 六六三五〇〇千圓
 ニ、所、要、資、材

前述ノ如ク五ヶ年一億九千萬應計置竝ニ十五ヶ年三億九千萬應計
 置ヲ遂行スルタメ炭礦ニ注入スベキ主要資材總額ハ左ノ如シ

| 品名 | 五ヶ年計置ノ場合 | | 十五ヶ年計置ノ場合 | |
|----|----------|-------------|------------|-------------|
| | 總量 | 出炭一應當 平均 | 總量 | 出炭一應當 平均 |
| 鐵鋼 | 二九六八千應 | 三七應 | 一四二五 千應 | 四二應 |
| 銅 | 四八千應 | 六一瓦 | 二 千應 | 七三瓦 |
| 坑木 | 一一九五〇千石 | 〇一五石 | 六七四九〇千石 | 〇二〇石 |

石ニ揚ゲタル主要條件ノミニウキ、コレヲ以テルモ、石炭開發計畫ニ
 併行シテ立案實施ヲ要スル諸計畫次ノ如シ



イ 技術者ノ養成

機械化ニヨル能率増進、勞務者ノ訓練及供出トコレガ食糧確保

ハ 鐵鋼増産

ニ銅ノ代用品研究

赤坑木供給ノタメノ殖林計畫

電力計畫

ト燃焼及利用方法研究

五 輸送條件

前項諸條件以上ニ石炭開發計畫ニ緊切ノ關係ヲ有スルモノハ云

フ迄モナク輸送條件ニシテ、就中

汽船々腹ノ増加

鐵道施設ノ擴充

港灣並荷役設備ノ擴充

ハ相列ンデ緊急ニ解決ヲナサザル可ラズ。勿論其ノ適確ナル計畫



ハ産業立地ノ問題ト其ノ解決ヲ不可分ニスルモ、石炭開發ニ際シ此等條件ノ充足ハ特ニ急速ナル措置ヲ爲スヲ要ス。

イ、汽船船腹ノ増加

次ニ汽船々腹ニツキ第一期末年ニ於ケル所要量ヲ推定セン、但シ汽船々腹ノ場合ハ前項諸條件ノ如ク石炭計量ニノミコレヲ限定シテ推算スルハ妥當ナラザルヲ以テ全輸送量ノ上ヨリ觀察ヲ下スコトトス。

第一期末年（昭和廿一年）ニ於ケル國內汽船製輸送量ハ次ノ如ク想定セラレ

| | |
|-------------|-----------|
| A、地域間汽船製輸送量 | 四一五、五五、千噸 |
| B、地域内汽船製輸送量 | 三一六、千噸 |
| 支那地域内 | 三一六、千噸 |
| 内地地域内 | 一八三、二〇、千噸 |
| 計 | 六〇一、九一、千噸 |

右年度ニ於ケル國內全貨物ノ總汽船製輸送量ガ石炭ノ二倍ナリト



假定スレバ一億二千萬噸トナル。之ニ要スル船腹ハ月一・三回（年一五・六回）廻ルモノトシテ約七百七十萬噸（重量噸）ナリ。昭和十六年度末本邦汽船船腹ヲ六百四十萬噸（重量噸）トシ此ノ内産業部門ニ使用シ居ルモノ三百二十萬噸ト推測スレバ五ケ年間ニ累計四百五十萬噸、年平均九十萬噸（總噸數ニテ六十三萬噸）ノ船腹純増加ヲ必要トス。

ロ、鐵道施設

既敘ノ如ク増産ノ主軸ハ滿支ニ存スルヲ以テ、之レガ輸送ニ當リテハ長距離ニ亘ル鐵道ノ建設ヲ必要トスルコト言ヲ俟タズ、殊ニ支那炭田開發ニ際シテハ先ヅ鐵道建設計畫ヲ樹立シ一ガ急速ナル實施ヲ期スルノ要アリ。

ハ、港灣並荷役設備ノ擴充

更ニ各地ニ於ケル港灣及荷役設備ノ擴充ハ海陸交通連絡ヲ圓滑ニスル上ニ於テ必要ナリ。又樺太ニ於ケル冬期積出ヲ容易ナラシムル爲メノ港灣建設計畫ノ如キモ急速實施ヲ必要トス。



六、産業立地計畫

石灰ハ大量貨物タルノ特性ニ鑑ミ、其ノ開發計畫ハ輸送力ニ制約セラル、處甚ダ多シ。

從ツテ之ヲ地理的ニ云ヘバ石灰生産現地ニ近ク需要ガ起ル場合ニ最モ増産ヲ容易ニス可キヤ云フ迄モナシ。故ニ産業立地計畫ヲ樹立スルニ當リテハ、石灰開發計畫ヲ寫ト考察シ決定スルヲ要ス。

乍併、石灰開發計畫目標モ他産業立地配分竝ニ輸送問題ニ鑑ミ開發ノ重要所在ヲ考慮スルノ要アルコト勿論ナル可ク、尙ハ南方地域ニ於ケル非粘結炭、佛印及山西ニ於ケル無煙炭ノ如キモ之ガ炭質ヲ考慮シ開發又ハ開發指導ニ當ルヲ必要トス。

此ノ點ニ鑑ミ政府ニ於テハ此ノ際至急産業立地ノ全般計畫ヲ參考資料トシテ内示アラシムコトヲ切望ス。

七、企業方式

本開發計畫ノ完遂ヲ期スル爲メニハ大東亞全域ニ亘リ官民一体トナリテ長期ニ亘リ實施計畫ヲ整然ト確立シ計畫實現ニ要スル諸條件並ニ產業立地計畫ニツキ具體的考慮ヲ加ヘ俾ルガ如キ變遷ヲ考察スルヲ要ス。之ガ爲メニハ政府ニ於テハ關係各省、現地軍、滿州國政府、中華民國政府其他ノ外國政府ノ全幅的協力ヲ期待シ俾ル豫特別ノ措置ヲ講ゼラレ履ク、民間ニ於テハ内地ニ於テハ石炭統制會、其他ノ地域ニ於テハ之ニ對應スル強力ナル統制機關ヲ以テ連絡機關ヲ設ケ關係各廳指導ノ下ニ實施計畫ノ實現ニ邁進スルヲ要ス、政府ハ新カル目的ノ爲メニ一ツノ組織ヲ考慮中ノ趣承リ處レルガ可及的速カナル實現ヲ切望ス。

次ギニ各地域ニ於テ現實ニ開發ニ當ルベキ企業ノ形態ハ各地域ノ實情ニ應ジ必ズシモ同一ニハ律シ難カルベキモ其意義トシテハ國家的統制ノ下ニ企業擔當者ヲシテ最高能率ヲ發揮セシムル豫算制意ヲ活用スルト同時ニ綜合的ナル開發實施計畫ニ對シ充分責任ヲ負ハシムル

ガ如キ方式ヲ採用スルヲ要ス

八、石炭開發計畫ト鐵鋼計畫

鐵鋼計畫第一期五ヶ年後ノ生産目標ヲ鋼一千萬噸トシ此年次ニ於ケル圈內原料粉炭ノ需給ヲ豫想スルニ下ノ如シ

| | |
|------------------------|--------------|
| 鋼一千萬噸生産ニ要スル原料粉炭 | 二三五〇〇千噸 |
| 瓦斯、コークス所要原料粉炭 | 七三〇〇千噸 |
| 原料炭ノ最少限度需要計 | 三〇八〇〇千噸 |
| 石炭一億九千萬噸中ニ豫想セラルル原料粉炭 | 四四七〇〇千噸 |
| 差引原料粉炭過剩 | 一三九〇〇千噸 |
| 依テ石炭一億九千萬噸中ニ豫想セラルル原料粉炭 | 四四七〇〇千噸ノ |
| 割合ニヨリ逆ニ原料粉炭最少限度所要量 | 三千八十萬噸ヲ產出スル母 |
| 數ヲ計算スルニ | |

$$190000千噸 \times 30.8000千噸 = 131,000千噸$$

$$44700$$

原料粉炭最少限度所要量ヲ點ヨリ觀テ、鋼一千萬噸ニ相當
 石炭ハ一億三千萬噸見當ニテ可ナリトノ推定ヲ下シ得ベシ
 次ギニ鋼一千万噸ヲ生産スル時代ノ石炭全消費量一鋼生産ニ要ス
 石炭ヲ含ム全産業用一々豫想スルニ、一九三八年ニ於ケル獨乙ノ
 實狀ハ

| | |
|---------------|-----------|
| 石炭 (瀝青炭) | 二、三〇〇〇千噸 |
| (褐炭) | 一、九〇〇〇千噸 |
| 効率五割トシ テ推算 | 一、八〇〇〇千噸 |
| 計 | 九〇〇〇千噸 |
| 消費割合 | 二、八〇〇〇千噸 |
| 鋼一ニ對シ石炭ハ二 | 鋼一ニ對シ石炭ハ二 |

シテ商工省調査資料ニヨレバ米國ニ於テハ鋼一ニ對シ石炭一二。八
 リ。
 右ニヨリ假リニ、一二。八倍ナル消費率ヲ採用スレバ、鋼一千万噸



ニ對シ石炭一億二千八百萬噸ト云フ數字トナル。

續ツテ昭和十七年度ニ於ケル國內鑛材生産豫定量六五〇〇千噸ニ對シ石炭總生産豫想量ハ一三八〇〇〇千噸ニシテ約二一。二倍ニ相富スルモ鑛材三〇。〇〇千噸生産ノ場合ニ於テ其他ノ需要ガ同一ノ比率ヲ以テ増加スルヤ否ヤハ充分檢討ヲ要スルノミナラズ今後ノ増産炭ガ從來ノモノニ比シ品質優良ナル可キ點モ考慮ニ加ヘ得ベク、從ツテ現在ノ鑛業對石炭總消費量ノ割合ヲ以テ將來ヲトセントスルハ妥當ナラザル可シ。

要ハ先ツ前述セル緊急計畫目標ノ實現ニ全力ヲ傾倒スル一萬國內全域ニ互ル産業立地計畫ノ確立ニ伴ヒ石炭開發恒久計畫ヲ樹立シ、且ノ生産額目標ヲ適正ニ決定スルニ在リ。

以上



極秘

右派部門ニ對スル意見書

著者
徳本 三三郎

裏面白紙

石油部門ニ對スル意見書

第一基本方針ニ就テ

(一)石油部門ニ於テハ茲一、二年ノ對策ガ最モ緊要ニシテ、若シ五年計
畫ヲ續テ當初ノ二年位ガ其ノ準備行程ニ終ル如キコトアランカ戦争
遂行力ノ確保トイフ見地ヨリ極メテ重大事ナルヲ以テ、第一期計畫
(五年計畫)ヲ與ニ二年後ヲ目標トスル前期ト五年後ヲ目標トスル
後期トニ分テ計畫ヲ獨立スルコトヲ與ス

(二)假令南方ニ於テ電力油田ヲ開發スルモ數的尙懸ヨリ見、特ニ質的問
題ヨリ考ヘ、人造石油事業(瀾脂合成ヲ含ム)ノ進捗ニ俟ツトコロ
多大ナルヲ以テ、天然石油及人造石油共進ノ方針ヲ確立セザル可カ
ラス

(三)今後南方ノ油田ノ開發ニ主力ヲ傾注セザル可カラザルコト勿論ナル
モ、内地及北緯太ノ油田開發ヲ忽視ニ附スルガ如キコトアル可カラ
ス

(四) 南方ニ於ケル現有精油所ヲ復舊シ尙ホ之ガ進展ヲ計ラザル可カラザルモ、企業立地ノ原則トシテハ朝鮮、滿洲及北支ヲ含ム内地ニ重點ヲ置カザル可カラズ。特ニ時勢ノ推移ニ伴ヒ必要ナル高級品ノ精製ニ就テ之ヲ痛感スルモノナリ

(五) 東亞共榮圈各地ニ亘ル石油ノ適切ナル配分及運輸等ニ就キ綜合的計畫ヲ樹立シ遺憾ナキヲ期セザル可カラズ

第三 設備ノ整備ニ就テ

(一) 産井、精溜及配分ノ全般ニ亘リ、且ツ人洋石油ヲモ統べ、官、民ヲ一貫シタル綜合的計畫ヲ樹立スル爲メ石油院トモ稱スベキ強力ナル一元的機關ヲ設置スベキナリ

(二) 南方ノ精油ハ競争遂行力確保ノ見地ヨリ重點的ニ力集中主義ヲ採ルノ要アルヲ以テ之レガ企業方式ハ綜合的ノ運営ニ適スルモノナラザル可カラズ



(三) 東亞共榮圈内ニ於ケル原油及製品ノ運輸配分ヲ遺憾ナカラシムル爲メ之ガ機構ヲ整備スルコト急務ナリ

(四) 天然石油及人造石油ノ兩種類ニ對スル綜合的統制指導ヲ目的トスル機關ヲ設立(帝燃ヲ併合)シ、今後必興トスル尨大ナル資金ノ供給及ビ綜合的指導ノ任ニ當ラシムベキナリ

第三附隨要項

(一) 天然石油ニシテ人造石油ノ設備ニ依リ之ヲ精製シ又人石「グー」ル」ヲ天然石油ノ設備ニ依リ之ヲ精製スル必要緊切ナルモノアルヲ以テ法蘭上及設備上ニ改善ヲ加ヘ合理的整備ヲ計ラサル可カラズ

(二) 天然石油及人造石油ハ價格「ブ」ル」ノ方針ニ依リ負擔ノ均衡ヲ計リ、特に人石ノ育成培養ニ資セザル可カラズ

(三) 整備セラレタル配分機關ハ貯溜及酒槽船ノ施設ニ遺憾ナキヲ期セザル可カラザルコト勿論ナルガ、特に油槽船ノ建造ニ就テハ徒ラニ他ニ



依存スル能ハズ。自ラ船腹ノ増強ニ努力セザル可カラズ
将来著シキ規模トナルベキ本企業ニ對シ技術員ノ養成ニ最善ノ努
力ヲササザル可カラズ

以上

裏面白紙

秘

(昭和一七六八)

第五部會 津島 葵 園

「大東亞經濟建設ノ北京ノ鑛工業及電力ノ開發ニ就テ」

裏面白紙

| | | | |
|----|-----------------|-------|---|
| 總 | 說 | | 三 |
| 第一 | 石炭 | | 五 |
| 第二 | 製鐵業 | | 八 |
| 第三 | 鑛産ノ化學工業 | | 〇 |
| | (一) 變土頁岩ノ其ノ利用工業 | | 〇 |
| | (二) 人造石油工業 | | 二 |
| | (三) 其ノ他ノ鑛業利用工業 | | 四 |
| 第四 | 鹽及鹽利用工業 | | 五 |
| | (一) 鹽 | | 五 |
| | (二) 鹽利用工業 | | 六 |
| | (イ) 管造工業 | | 六 |
| | (ロ) 苦汁工業 | | 七 |

(目次)

裏面白紙

| | | |
|----|---------|----|
| 第五 | 棉花及紡績工業 | 一八 |
| 第六 | 電力 | 一九 |

(以上)

大東亞經濟建設ト北支ノ礦工業及電力ノ開發ニ就テ

(昭和一七・六・八)

津島委員

總說

曩ニ決定ヲ見タル「大東亞經濟建設基本方策」ニ即應シ、礦工業及電力ニ關スル綜合計畫ヲ樹立スルニ當リ、各般ノ産業立地條件ヲ考慮シ適地適業ノ趣旨ニ則リ最高能率ヲ發揮スル爲茲ニ北支經濟ノ地位並其ノ分擔スヘキ役割ヲ檢討シ今後ノ施策ニ付テ極メテ概略ヲ提示ス。

(註、本意見書ニ於テハ差當リ具體的計畫又ハ計數等ヲ掲クルコトヲ差控ヘタリ)

之ヲ大東亞全域ノ經濟計畫ニ統合調整スルコトニヨリ初メテ大東亞戰爭遂行力ノ急速ナル増強ト劫久の大建設ノ基礎確立ヲ完シ得ルモノト確信ス。

先ツ概括的ニ見テ、大東亞經濟建設ニ於ケル北支經濟ノ地位ハ種々ノ

恵マレタル條件ヲ具有ス。即チ

第一ニ北支ニ於ケル資源ノ賦存状態ハ石炭ヲ初メトシテ鐵礦石、鹽、棉花其ノ他天然資源極メテ豊富ニシテ、而モ大部分南方圈資源ト重複競合セサルノミナラス南方圈資源ノ開發導入ニヨリ北支資源ノ活用度ハ愈擴大セラルヘシ。

第二ニ北支ニ對スル既往ニ於ケル資金、資材ノ投下ハ未タ充分ナラスト雖、而モ有效適切ナル開發ノ實ヲ擧ケ來レリ、依テ今後適量ノ資金、資材ヲ投下スルニ於テハ容易且有效ニ大規模ナル開發計畫ヲ實施シ得ヘキ好條件ヲ具備ス。

第三ニ經濟開發ニ必要ナル勞務ニ付テモ其ノ供給餘力大ナリ。又若干ノ訓練ヲ施サハ優秀ナル技術的能力ヲ發揮シ得ヘキコト疑ナシ。

第四ニ産業開發上必要ナル動力ニ關シテモ、豊富ナル石炭ニ依存シ得ル外將來治水計畫ト相俟チ大規模ナル水力發電ノ實施ニ依リ充分ナル供給ヲ確保シ得ヘシ。

第五ニ經濟交通上ノ觀點ヨリスルモ、北支ハ亞細亞大陸ノ中核ヲ爲シ、日滿兩國ニ隣接スルヲ以テ、其ノ重要物資輸出上好適ナルノミナラス、南方圈トノ折衝ニ於テモ地理的利便尠カラズ、輸送力節減ニ資スルコト大ナルヘシ。

以上概觀的考察ヲ基礎トシ、重點主義ニ則リ、大東亞建設ノ爲北支ノ擔當スヘキ主要礦工業及電力部門ニ就キ所要ノ施策ヲ概述スヘシ。
(註 北支ニハ蒙疆ヲ含ム、以下同之)

第一 石 炭

大東亞經濟建設上ノ基礎資源タル石炭ニ關シテハ主トシテ之ヲ北支ニ依存スルノ方針ヲ確立シ、各般ノ方策ヲ講スルコトヲ適當トス。蓋シ、北支ニ於ケル石炭ノ埋藏量ハ約一千七百億噸ト稱セラレ、日本及滿洲等ニ對シ洵ニ冠絶セル優位ニ有リ、而モ北支炭ハ其ノ炭質ニ於テ粘結性炭四〇%、非粘結性炭三〇%、無煙炭三〇%ノ割合ト推定セラレ其ノ利用範圍ハ一般燃料用ハ素ヨリ、骸炭用、特殊燃料用、化學工業用、

自動車代燃用、人石原料用等廣汎ニ亘リ、其ノ效用眞ニ絶大ナルヲ知リ得ヘシ。

加之、北支ニ於ケル炭礦ハ其ノ賦存狀況ヨリ見テ、採炭上種々ノ有利ナル自然的條件ヲ具備スルヲ以テ急速ナル増産ニ期待シ得ヘク、北支カ將來共榮圈ニ於ケル石炭供給基地トシテノ使命ヲ擔フヘキハ必然ナリ。

特ニ南方鐵礦資源ノ確保セラレタル今日、北支ニ於ケル製鐵用原料炭ノ開發ハ一層緊要性ヲ加ヘタルモノト謂フヘシ。更ニ獨リ共榮圈各地域ヘノ供給ノミナラス、後述ノ如ク北支自體ニ於ケル各種産業ノ勃興發展ニ伴フ需要増加ニ對シテ、之カ供給ニ支障ナカラシムカ爲ニモ北支炭ノ飛躍的増産ヲ期セサルヘカラス。

斯カル要求ニ對處スヘキ對策トシテハ

一、炭質試驗機關ノ緊急設置

二、採炭ノ機械化ニ依ル能率的大量生産

三、適性炭ノ合理的利用並配給

四、選炭設備ノ充實ニ依ル炭質改善

五、各種産業ノ現地生産擴充ニ伴フ石炭ノ利用化ニ關スル諸施策
等ヲ舉ケ待ヘシ。

尙右諸對策ト相俟キ勞務對策、資材調整、動力補給並輸送力擴充ヲ併
セ考慮スルノ要アルハ勿論ナリトス。

以上諸施策ノ實施ニ完璧ヲ期スルニ於テハ生産擴充目標ノ達成期シテ
待ツヘキモアルヘシ。

第二 製 鐵 業

東亞ノ自給力ヲ以テ列強ニ對峙シ、強靱ナル高度國防國家ヲ建設セムカ爲ニハ、其ノ基礎タル製鐵事業ノ飛躍的發展ヲ企圖セサルヘカラス而シテ製鐵増産所期ノ目標額ヲ確保セムトスルニ當リ共榮圈内ニ於ケル製鐵立地條件ヲ勘察スルニ、南方圏ハ優秀ナル鐵鑛石多量ニ賦存スト雖、原料炭ノ供給極度ニ困難ヲ豫想サレ、且輸送ノ距離ニ於テモ多大ノ不利ヲ免レス、日本ハ鐵鑛石並原料炭ヲ殆ト輸移入ニ俟ツ現狀ヨリシテ、之ニ要スル船腹ノ問題ニ關シ甚シク不利ナル状態ニアリ、滿洲亦鐵鑛石並原料炭乃至勞働力ノ供給ニ限度アリ。

然ルニ北支ハ原料炭タル強粘結性炭ノ賦存前記ノ如ク極メテ豊富ニシテ之カ産出亦多量且容易ナルノミナラス（昭和十六年一、二八四萬噸）今後ノ増産ニモ期待サレル處多ク、將來假リニ四五百萬噸程度ノ現地製鐵實現サルルトモ、原料炭ノ現地需要ヲ完全ニ充足シ得テ、尙多量

ノ輸移出餘力ヲ有スル状態ナリ、鐵鑛石ニ於テモ其ノ埋藏量ハ、稍調査ノ完全ナル龍烟鐵鑛ノミニテ既ニ三億噸ト稱セラレ、之ニ金嶺鎮、其ノ他山西ノ諸鑛山ヲ加フレハ、將來ノ需要ニ備ヘテ不安ナキモノト謂ヒ得ヘク尙必要ニ應シ南洋鑛石ヲ利用スルモ、輸送力ニ不利ナル影響ナカルヘシ。

又原料炭並鐵鑛石ノ外製鐵ノ原料タル石灰石、耐火粘土、硅石、滿俺石膏、磷灰石等モ殆ト悉ク之ヲ現地ニテ賄ヒ得ヘキ状態ニシテ、北支ノ製鐵業ハ原料的ニ極メテ好適ノ立地條件ヲ有スルモノト謂フヘシ。以上ノ諸點ヲ考慮スルトキ共榮圈ニ於ケル新興製鐵基地トシテ北支ハ極メテ適地ナリト謂ヒ得ヘク製鐵綜合計畫ノ樹立ニ當リ之ニ重點的考慮ヲ加フルノ要アリト認ム。

第三 鑛産ト化學工業

鑛産資源ノ大宗タル石炭並鐵鑛石以外ニ北支ニハ非鐵金屬、非金屬鑛物モ亦多種多樣ニ賦存セリ。即チ其ノ量及質ニ於テ共榮圈ニ冠タル礬土頁岩及石膏ヲ始メトシテ、重石、雲母、螢石等有用ナル資源賦存シ何レモ高度國防國家完成ノ爲ノ基礎資源ノ一翼トシテ緊要ナル地位ヲ占ムルモノナリ。

而シテ之等資源ヲ利用スル工業、主トシテ化學工業ハ其ノ資源立地ヨリ極メテ有望視セララルモノ尠シトセス。

而シテ之カ實現ニ必要ナル電力ハ後述ノ如ク大規模ナル發電事業ノ勃興ニ依リ其ノ供給ヲ確保シ得ヘシ、今鑛産及之カ利用工業トシテ北支ヲ適地トスルモ主ナルモノヲ見ルニ

(一) 礬土頁岩ト其ノ利用工業

北支ニ於ケル礬土頁岩ハ滿洲、支那ニ廣ク賦存スルニ疊石炭紀層中ニ發達セルアルミナ分極メテ多キ岩石ニシテ、北支ニ於テハ山東省

淄博地方ニ七億噸、冀東開灤、石門寨地方ニ三億噸、其ノ他井陘、中興、山西省各地ニモ多量ニ賦存シ、之カ用途ハ耐火材料並研磨材料トシテ好適ナルノミナラス、更ニ日、滿、支ヲ通シテ最モ價値アルアルミナ原料トシテ重要ナリ。

惟フニアルミニヨリ増産目標ヲ達成セムトセハアルミ工業ハ南洋ノ家ノサイトヲ原料トスルモノノ外ニ、輸送問題解決ノ一助ヲラシメムカ爲ニモ今後礬土頁岩ヲ原料トスルソノイム法ヲ併用シ、二本建ヲ以テ進ムコト絶対必要ナリト謂フヲ得ヘシ。

而シテ此ノソノイム法ヲ採用スル場合、北支ハ前述セル如ク其ノ原料タル礬土頁岩ヲ多量ニ埋藏シ、而モ其ノ他ノ原料タル石灰石、石炭、曹達灰等ヲモ相近接シテ賦存スルヲ以テ、甚タ恰好ナルアルミ工業ノ立地條件ヲ具備スルモノト謂フヘシ。

斯ノ如キ有利ナル立地條件ニ基キ將來實施サルヘキ對策ヲ按スルニ
マ從來試験的斷片的ニ操業セラレタルソノイム法ニ據ルアル

ミニユーム製造設備ノ綜合ニ依ル一貫的操業可能經濟單位工場ノ建設

ニ右經濟單位工場ノ實績ニ基ク、將來ノアルミニウム需給計畫ノ樹立

等ヲ舉ケ得ヘシ

(二) 人造石油工業

大東亞南方圈ニ於ケル石油資源ノ確保セラレタル今日ト雖、北方圈ニ於ケル人造石油工業ハ量的、質的ニ飛躍的發展ヲ要ス。

而シテ北支炭ノ炭質ハ何レノ液化方法ニモ適スルカ、就中瓦斯化ニ適スルモノハ無盡藏ニシテ、フイツシヤ一法ニ依ル人造石油工業ハ極メテ有望ナリ、更ニ技術的、資材的關係ヨリ日本ニ於テ發展シツツアル低溫乾溜法ニモ適スルモノナリ。

今人造石油生産擴充目標ヲ達成セムカ爲ニハ、日、滿、人造石油工業現狀ニ膨大ナル擴張ヲ施ササルヘカラス。



之ニ對シ北支カ原料炭ヲ供給スルカ或ハ現地企業ニ依リテ製品ヲ輸送スルカニ依リテ、其ノ輸送力ハ六乃至八分ノ一ニ蠲減セララルヘク此ノ見地ヨリスルモ、又他方石油ノ供給基地カ分散配置セララルコトヲ有利トスル見地ヨリスルモ、北支ノ人造石油工業ハ共榮圈内ニ於テ極メテ重要視サルヘキモノナリ。

而シテ之カ爲ニスル施策トシテハ

- 一、炭質試験所ノ設置ト石炭ノ適性研究
- 二、新製鐵所ニ附隨スヘキフイツシヤ一法人造石油工業ノ計畫
- 三、低溫乾溜法人造石油工業ニ關スル調査並計畫
- 四、南方石油ノ燈中油分ノ水添計畫並立地條件調査
- 五、本格的フイツシヤ一法ノ調査並計畫
- 六、工場建設ノ具體的方法ト企業體系ノ研究等ヲ舉ゲ得ヘシ。

(三) 其ノ他ノ鑛業利用工業
前記以外石炭及石膏、石灰石等ヲ利用スル硫安、カーバイト工業用
等北支ニ於ケル立地條件頗ル有利ナルモノアレトモ、之カ記述ヲ省
略ス。



第四 鹽及鹽利用工業

(一) 鹽

北支ノ鹽ハ石炭ト共ニ大東亞經濟建設上特ニ重要視サルヘキモノニシテ、食糧鹽竝工業鹽自給自足ヲ確保セムカ爲ニハ北支鹽ノ増産ニ俟ツヘキモノ極メテ大ナリ。

現在既ニ北支鹽ハ大東亞圈内生産額中約三分ノ一ヲ生産シ對日供給量亦多大ニ上リ其ノ地位最モ重要ナリ、而モ北支ノ代表的鹽場タル長蘆、山東ノ兩鹽田ハ製法ニ於テ天日製鹽ノ可能ナルホカ、其ノ面積ノ大ナルコト、氣象ノ良好ナルコト、地形、地質ノ好適ナルコト或ハ又勞力ノ點ニ於テ惠マレタルコト等種々ノ有利ナル立地條件ヲ有シ、今後猶相當多量ノ増産可能ナル状態ニアリ。

一方大東亞圈内ノ需要ヲ見ルニ、現状ニ於テ略々自給自足可能ナリト雖、今後ニ於ケル曹達類ノ需要増加ヲ考慮シ、其ノ供給ニ支障ナカラシメムカ爲ニハ多大ノ増産ヲ必要トスヘク、之カ増産ノ對象ト

シテハ、日本及滿洲ハ既ニ一定ノ限度アリ、一方南方國ニ對スル期
待モ少キ現狀ヨリシテ諸種ノ立地條件ニ惠マレタル北支鹽ヲ擧ケサ
ルヘカラス。

而シテ其ノ増産對策トシテハ

一、鹽田ノ擴張

二、揚水、運搬設備等ノ機械化ニ依ル製鹽能率ノ増進

三、製鹽ノ副産物タル苦汁ノ利用ニヨル間接的ナル價格ノ引下

四、製鹽法ノ改良

等ヲ考慮セサルヘカラス

(二) 鹽利用工業

(1) 鹽工業

舊達ハ凡ユル化學工業ノ基礎原料ニシテ、共榮圈建設上不可缺ナ
ルモノナリ、而シテ北支ハ之カ製造ニ必要ナル鹽ヲ前述セル如ク
多量ニ産スル外、其ノ他ノ原料タル石灰石、石炭ヲモ近接シテ多

量ニ運搬スルヲ以テ、新幹確立上甚々恵マレタル立地條件ヲ有ス
ルモノト謂フヘク北支舊達工務ノ補充乃至新設ハ隘隘力節約ノ見
地ヨリスルモ必要缺クヘカラサルモノト謂フヘシ。

之カ爲ニハ徒ニ日本舊達工務ノ現状ニ捉ハルル事ナク、可能ナル
範圍ニ於テ設備ノ北支移駐乃至新設ヲモ考慮スヘキナリ。

(ロ) 苦汁工業

北支ノ廣大ナル鹽田ヲ背景トシテ苦汁工業ヲ擴大新設シ臭素、加
畢、ワタシユニム等ノ有用ナル資源ヲ確保スルハ其ノ立地條件
頗ル有利ニシテ大東亞經濟建設上其ノ意義極メテ甚大ナリ。
其ノ詳細ハ之ヲ省略ス。



裏面白紙

第五 棉花及紡績工業
（本項ニ付テハ必要ニ應シ口頭又ハ文書ニテ意見ヲ開陳スルコトト致
シ度）

第六 電力

電力ハ産業開發ノ原動力ニシテ、北支ニ於テハ上述ノ如キ各種産業ノ進展ニ伴ヒ、電力需要ノ飛躍的増大豫見ニ難カラサレハ、豫メ豊富低廉ナル電力ノ確實ナル供給ヲ準備セサルヘカラス、而モ此ノ點ニ於テ北支ハ極メテ有利ナル條件ニ恵マレツツアリ。即チ

一、火力發電ノ原料タル石炭ノ埋藏量ハ無盡藏ト稱セラレ、而モ此ノ原料炭ハ市場價值少キ粗悪炭乃至雜炭ニテ足ルヲ以テ、發電原價ヲ極メテ低廉ナラシメ得ルコト明カナリ。

二、水力ニ就テ見ルモ北支ノ河川ハ水量些シテ少カラス、之ヲ適當ニ調節シ得レハ、治水、利水ニ多大ノ效果ヲ期待シ得ルノミナラス、同時ニ水力發電ヲモ件ヒ得ル特殊性ヲ有シ、之ニ依リ豊富低廉ナル電力ヲ供給シ得ルコト明カナシテ、水力發電資源ハ約一千万瓩に達スルトニ上ル見込ナリ。

而シテ水力開發事業トシテ著手セルモノニ一、三アレット、大東亞建

設ノ大業完遂上政治的、經濟的意義ヲ最モ多分ニ有スルモノトシテ
黄河ノ治水及電力開發ノ緊要性ヲ強調セサルヲ得ス。即チ黄河ノ開
發ハ

一、治水ニ因リテ四千年來ノ禍根ヲ芟除シ、住民及土地ノ莫大ナル損
失ヲ防止シ更ニ農作物ヲ確保シ得ルコトハ、單ナル經濟問題ニ止
ラス、住民ノ死活問題ニシテ延テハ治安ノ確立、北支建設ノ基調
ヲ爲ス重大ナル政策的意義ヲ有ス

二、利水ニ於テ廣域ナル耕地ノ灌溉ニ因リ積極的ニ農產物ノ増産ヲ期
シ得ルト共ニ、農民ニ生活ノ安定向上ヲ與ヘ、生産力ヲ増大シ得
テ食糧、棉花對策ノ成果ヲ期待シ得ヘク、物資輸送ノ確立、工業
用水ノ供給等其ノ利益枚舉ニ遑ナシ

三、右ト同時ニ豐富低廉ナル電力ヲ確保シ、重要國防産業ノ生産力ヲ
飛躍的ニ擴充ス

以上ノ如ク北支ノ水力開發ハ日本、滿洲ト異リ、政治的意義ヲ多分ニ

有シ、之カ影響スル感甚大ナリ。徒ニ調査研究ニ時日ヲ空費スルコト
ナク、早急實現ニ著手シ、一刻モ早ク其ノ效果ヲ享受スヘキモノニシ
テ、之カ爲差當リ計畫遂行ニ必要ナル資金、資料ノ一部ハ本年度ニ計
上シ以テ本事業ノ促進ヲ企圖セムコトヲ切望ス

裏面白紙



極秘

昭和十七年六月八日

大東亞鑛業建設方策私案

大東亞建設審議會
委員 男爵 伊藤 文吉

裏面白紙

大東亞鐵業建設方策私案

一、鐵業建設ノ順位

(イ) 大東亞戰爭遂行力ノ確保並ニ大東亞共榮圈ノ國防經濟力增強ノ爲メ必要ナル重要鐵產物ノ生産ニ重點ヲ置クヲ要ス

(ロ) 重要鐵產物ノ生産並ニ重要鐵產資源ノ開發ニ付キテハ鐵種別ニ先後ノ順位ヲ付スルコトヲ得ズ。相共ニ併行シテ行ハルベキモノナリ。然レドモ今後ノ生産目標ニ對シ鐵種ノ資源ノミヲ以テ

シテハ生産量ノ不足ヲ豫想セラルル鐵產物ニ對シテハ特ニ重點ヲ置キ十分ナル工夫ヲ施シ目標達成ヲ可能ナラシムベキ根本的

ナ對策ヲ樹立スルヲ要ス

不_レニ豫想セラルル金屬鐵物ノ種類ハ多ク、ルモ之等一々ニ付キ記述スルコトハ煩雜ナルヲ以テ、茲ニハ之等各種鐵產物中生産量ノ大ナルモノ即チ銅、鉛、亜鉛、ニ_テアル等ヲ例示スルニ止ム

(ハ) 又重要礦産物中今後ノ生産目標ニ對シ豊富ナル資源ヲ有スルモノ例ヘバ錫ノ如キ礦産物、或ハ金ノ如ク特殊ノ立場ニアルモノニ付キテハ、其ノ大東亞共榮圈内ノ經濟ニ及ボスベキ重要性並ニ將來ノ世界經濟上ニ占ムベキ地位ヲ考慮シ夫々特異ノ對策ヲ確立スルコトヲ要ス

(ニ) 大東亞共榮圈各地域ノ既開發鑛山ノ増産、殊ニ本邦ニ於ケル各鑛山ノ増産ニ先ヅ主力ヲ傾注スルコト必要ナルモ、之ト同時ニ南方諸地域ノ未開發鑛産資源ノ調査、探ニ不足ヲ豫想セラレベキ鑛産物ノ資源ノ探求ヲ急速有效ニ實施スルコト肝要ナリ

(ホ) 大東亞共榮圈ノ生産目標達成ノ爲メ鑛業技術ノ就ニ生産量ノ不足ヲ豫想セラル、鑛産資源ニ關スル低品位鑛ノ處ニ方法ニ付キテハ急速ナル技術ノ研究ヲ必要トス。技術ノ研究ハ夫々ノ企業体ニ之ヲ適當セシムルト共ニ各個ノ研究ノ連絡調査ヲ圖ル目的ヲ以テ技術統制機關ヲ設定スルヲ要ス

三 鑛業ノ産地配分

(イ) 鑛産物ハ天然ニ賦存スル資源ナレバ其ノ開發ニ付キテハ、錫ノ如ク各地域ニ亘リ豊富ニ資源ノ存スルモノ並ホ金ノ如ク特殊ノ事情ニ在ルモノヲ除キテハ、人爲的ニ立地配分方策ヲ決定シ難シ

(ロ) 製鍊ニ關シテハ原則トシテ本邦ニ於ケル現有設備ハ最高度ニ其ノ能力ヲ發揮セシムルコトトシ、新規増設ハ現地ニ於テ之ヲ行フコトトスルモ、技術、勞務、動力、燃料、輸送及ビ國防ノ諸要素ヲ考慮シ、現地製鍊ノ不可能ナルモノハ之ヲ本邦ニ於テ行フコトトス

更ニ具體的ニ言ヘバ、銅ノ如キハ本邦現有設備ニハ外國輸入銅石ヲ目標トシテ建設セラレタル餘剩能力ヲ存スルヲ以テ大東亞共榮圈内既知銅資源ノ開發ニ對シテハ製鍊設備ノ増設ヲ必要トセザルモ、比島ニ於テ低品位銅鑛ノ開發ヲ行フニ當リテハ輸送條件ヲ考慮シ一部本邦現有設備ヲ比島ノ産銅地域ノ中心地ニ移

轉セシメ低品位鑛ノ開發ヲ容易ナラシムルヲ必要トスベシ。又
品ツケルニ付キテハ、今後ノ目標達成ノ爲メニハセレベス島所
在ノ品ツケル鑛ノ大量開發ヲ必要トスベク從ツテ多量ノ低品位
鑛ヲ處理スル爲メ現地ニ鑛煉所ヲ設ケ鑛ヲ生産セシムルコトヲ
要スベシ。又、鉛、亞鉛ニ付キテハ、鉛ハ主トシテ現地ニ於テ地
金ニ製鍊スル方策ヲトリ、亞鉛ハ精鍊トシテ送付シ本邦ニ製鍊
所ヲ増設スルヲ可トスベシ。

裏面白紙

三、鐵業建設ノ基礎條件

- (イ) 大東亞共榮圈建設ノ使命ハ戰果ニ依リ收メタル地域ヲ經濟的ニ確保シ絕對不敗ノ體制ヲ確立スルニ在リ
- (ロ) 鐵業建設ノ使命ハ大東亞ニ於ケル重要鐵產物ノ飛躍的ナル生産目標ヲ最短期間ニ達成スルニ在リ
- (ハ) 大東亞ノ鐵業建設ハ本邦ノ鐵業ガ中核トナリ遂行スベキモノトス
- (ニ) 本邦鐵業ハ之ヲ再編成シ鞏固ナル企業形態ヲシテムルコトヲ要ス

鋼鐵業再編成

(1) 鋼鐵業ハ資源ニ制約セラルルモノナレバ資源ニ乏シカリシ本邦ノ
鋼鐵業ハ規模小ニシテ、全體ヲ合スルモノノ規模ハ外國ノ一鐵山
會社ニ及バザリシ程ナリ

此小規模ナル母體ヲ以テ短期間ニ大東亞ノ鋼鐵ヲ建設セントセ
バ先ヅ本邦鋼鐵業ノ再編成ヲ敢行シ他ノ經濟圈ニ對抗シ、進ンデ
國外ニ雄飛シ得ル如キ世界の規模ノ企業形態ヲ確立シ得ル緊地
ヲ整備スルコトヲ必要トス

(2) 技術、勞務、資材、輸送等大東亞戰爭遂行上ニ於ケル凡ユル困
難ナル條件ヲ克服シ短期間ニ鋼鐵建設ヲ遂成センガ爲メニハ、
本邦鐵山經營ノ徹底的合理化ヲ必要不可缺トス。之ガ爲メニハ
本邦鋼鐵業ノ強力ナル再編成ヲ必要トス

(3) 現在ノ生産量ニ數倍スル飛躍的ナル生産目標ヲ達成スルガ爲メ

ニハ巨額ナル資金ヲ必妥トシ、然モ之ヲ短期間ニ調達スル要アリ。新ル資金ノ調達ヲ可能ナラシメ然モ之ガ投資ヲ最モ有效適切ナラシムル爲メニモ先ヅ以テ本部營業ノ再編成ヲ必妥ナリトス

裏面白紙



五 企業ノ形態

個人主義的自由主義的運営ニヨリ始メテ最高ノ効率ヲ發揮シ得ルガ如キ形態ニ據ラズ、國家的經營ニ敏捷且ツ適確ニ應ジ得ルガ如キ形態ニ據ルコトヲ要ス。總生産資源ノ増進ハ先ニ述べタル如ク人爲的ニ土地配分ヲ決定シ難ク從ツテ綜合的ナル計畫ノ下ニ有效ナル開發ヲ行フヲ要シ、然モ今後期待セララルガ如キ飛躍的ナル増進ヲ遂行センガ爲メニハ低品位礦ノ大量處分ヲ必要トスベク、斯ノ如キ狀勢ノ下ニ於テハ五ノ要請一層大ナルベシ。總生産ハ其ノ性質上總生産資源ノ發見ヲ前提トシ、殊ニ今後ノ生産目標達成ノ爲メニハ異常ニ活潑ナル資源ノ發見ヲ必トス。資源ノ發見ヲ奨励センガ爲メニハ各地域ニ亘リ新企業ノ創設ヲ促スノ要アリ。而シテ之等企業ノ成立ニヨリ支障ヲ與ラズ、且ツ國外ノ企業ニ對シテモ十分對抗シ得ル大規模ノ企業形態タルヲ要ス。



(ハ) 激刺タル經營ヲ遂行セシムル爲メ經營ノ自主性ヲ保持シ得ルガ如キ形態タルヲ要ス

(ニ) 國家資本ヲ參加セシムルニ當リテハ直接ノ事業監督ハ之ヲ統制機關ヲシテ行ハシメ得ルガ如キ形態タルヲ要ス

(四) 金、錫ハ特異ノ性質ヲ有スルヲ以テ之ヲ別ニ記述スルモ、銅、鉛、亜鉛、ニツケル等ニ付キテハ其ノ自然的條件、技術的條件並ニ生産ノ規模等ニ應ジ、條件ノ許ス限りニ於テ綜合的ナル企業形態ヲ確立スルヲ要ス

六 統制機構

(一) 鑛産資源ハ其ノ性質上單一ノ鑛種ノ賦存スル場合ヨリモ數種ノモノノ賦存スル場合多ク、且ツ資源ノ發見ニハ先述ノ如ク新設企業ノ設立ヲ奨励スル如アリ。從ツテ鑛業ノ再編成ニヨル大規模企業ノ確立ト相俟ツテ開發並ニ生産ヲ大東亞鑛業建設計畫ニ應ジテ統一的計畫的ニ遂行セシムル爲メニハ統制機構ノ整備ヲ



必要トス

(4) 企業相互間並ニ大東亞各地域相互間ニ於テ技術、勞務、資材、輸送等ノ調整ヲ圖リ各企業ヲシテ有效ナル經營ヲ行ハシムル爲メニハ統制機構ノ整備ヲ要ス

(5) 統制機構ノ整備ニ應ジ行政機構ノ再編成ヲ行ヒ經濟參謀本部ノ如キ統制機關ヲ設置スルト共ニ、統制機構ノ中核体タル統制機關ヲ之ニ參加セシメ以テ大東亞經濟ノ計画的運営ノ效果ヲ十分ニ發揮セシムルヲ要ス

(6) 如キ統制機構成立ニ際シテハ製鐵用原料鑛物(鐵鑛、瀝青鑛等)、アルミニウム原料鑛物(ボクサイト、鹽土頁岩等、肥料用原料鑛物(燐鑛)等ノ如キモノニ付キテハ、大東亞經濟建設ニトリテ最も有效適切ナル統制方式ヲ確立スルヲ適當トス



七 銅

- (1) 銅ハ金及錫ノ如キ特異ノ立場ニハアラザルモ大東亞建設ノ生産目標ニ對シ既知ノ資源ノミヲ以テシテハ最モ生産ノ不足ヲ豫想セラルルモノナルニヨリ特ニ増産對策ニ付キ特記ス
- (2) 大東亞共榮圈內ニ於テ最大ノ銅ノ生産地ハ内地ナレバ差當リ銅ノ増産ハ内地ニ期待セザルヲ得ズ。之ガ爲メニハ技術上經濟上劃期的ノ工夫ヲ要スルト共ニ銅増産ニ對スル適切ナル奨勵助長方策ヲ施ス要アルベシ
- (3) 内地ニ次グ銅ノ産地タル比島ニ付キテハ既知資源ノ積極的開發ニ努力スルト共ニ低品位鐵處理ノ爲メ中央製鍊所ノ設置等ヲ考慮スル要アルベシ
- (4) 比島、ニユーギニア、ピルマ、泰北部ノ各地ニ亘リ銅資源ノ調査ニ全カヲ注グラ要スベシ
- (5) 銅ハ他種礦物ト共ニ産出スルコト多キヲ以テ銅ノ増産ニ付キテ

裏面白紙

ハ之等他種鑛物トノ關聯ニ於テ方策ヲ決スルヲ要ス
右ノ如キ諸方策ヲ以テシテモ猶不足ヲ豫想セラシム、ヲ以テ鋼ノ
消費規正、代用品ノ研究並ニ代用品ノ強制使用ヲ強行スルヲ要
ス

八金

(イ) 今日金ガ有スル特異ノ地位ハ其ノ將來ノ重要性ニ關シ確定的ナ
 ル斷定ヲ爲シ得ザル所ニ在リ。將來金ガ國際通貨トシテノ地位
 ラ確保シ得ルヤ或ハ單ニ裝飾品タルニ終ルヤハ豫斷シ得ザル所
 ナリ。從ツテ金ノ生産ヲ全ク停止スルコトモ不可能ナルト同時
 ニ之ガ生産ヲ今日ノ如キ狀態ヲ以テ繼續スルコトモ困難ナリ
 (ロ) 金ガ上記ノ如キ不確定ナル立場ニアルニ拘ラス、本邦産金事業
 ノ投資額ハ金屬鑛業總投資額ニ對シ三分ノ一ヲ超ユル額ヲ占メ
 本邦金屬鑛業構成上重大ナル意義ヲ有ス

(ハ) 然ルニ大東亞鑛業ノ爲メ銅、鉛、亜鉛、ニツケル等ハ飛躍的増
 産ヲ必要トスル事態ニアリ。産金事業ヲ不確定ノ態ニ放置シ新
 カル生産目標ヲ達成セントスルコトハ不可能ニ近ク、從ツテ産
 金事業ノ再編成ハ大東亞鑛業發展ノ爲メ不可缺ノ前提タリ

(三) 産金事業ノ再編成ニ當リテハ今ノ將來ガ不確定ナル特異性ニ鑑
ミ、本邦並ビニ大東亞各地域ノ産金事業ヲ特殊ナル企業体ニ統
一シ、起リ得ベキ各般ノ事態ニ對應シ得ル態勢ヲ整ヘシムルヲ
要ス。斯カル企業体ヲ以テスレバ必要ナル場合ニハ生産費低廉
ナル比島、ニウーギニア等ノ金礦ヲ有效ニ利用スルコトモ可能
ナルベシ

(四) 以上ノ如キ産金事業ノ再編成ニ依リ本邦金屬鑛業ハ重要鑛産物
ノ増産ニ邁進シ得ル聲面ナル基礎ヲ得ルノミナラス、技術、資
材等ニ付キテモ之等ヲ他ノ重要鑛産物ノ生産ニ轉換シ得ベク、
以テ大東亞鑛業建設ニ寄與シ得ル所尠カラザルベシ

九 錫

(イ) 大東亞共榮圈內ノ錫生産額ハ世界總生産額ノ約七〇%ヲ占ムルノ實情ニアリタルモ、錫ハ其ノ用途上半貴雜品トシテ使用セラレタル部分多量ニ上リ、若シ錫ヲ必需品ノミニ使用シタリトセバ從來ノ生産額ノ半分ヲ以テ充足シ得タルモノト推定セラル

(ロ) 從ツテ過去ニ於テ錫ノ價格ノ上騰セルハ半貴雜品トシテノ錫ノ使用ノ増加ガ主要ナル原因ヲナセルモノニシテ、又價格ノ下落セルハ生産統制ノ缺如ニヨル生産過剰ニ原因セルモノナリ

(ハ) 和蘭政府ハ蘭印ノ錫ヲ國家ノ財源トスル爲メ之ヲ國營トシ有效ナル經營ヲ續ケ來レルモ、錫最大ノ產地タル馬來ニ於テハ之ヲ統一スル組織ナク永年ニ亘リ生産過剰ト錫價格ノ混亂ヲ反覆セシ後漸ク近年ニ至リ英國資本ニヨル統一ヲ略々完了シ畢業ノ安定ヲ見ルニ至レリ

(ニ) 尙大東亞以外ニ錫ノ產地トシテハ南米及ピアワリ等ノ主要産



地アリ。殊ニアフリカハ錫產地トシテ將來有望ニシテ大東亞ノ錫ニトリ有力ナル將來ノ競爭對手ト考ヘラル

(四) 又大東亞内ノ錫ノ生産量ニ付キテ見ルモ地域ニヨリ相異シ、更ニ馬來ノ如ク同一地域内ニ於テ見ルモ北部ト南部トニ於テハ甚シク生産量ニ高低アルヲ知ル

(六) 以上ノ如キ錫ニ關スル諸條件ヲ考慮ニ入レ大東亞ノ錫ヲ有效ニ開發經營シ之ヲ世界經濟上有利ニ活用セントセバ、第一ニ大東亞ニ於ケル錫ノ生産ヲ世界市場トノ關係ニ於テ常ニ敏感ニ調整シ得ルコトヲ必要トス、次ニ大東亞各地方ノ錫生産ヲ生産費其他ノ生産條件ニ應ジ相互間ニ圓滑ニ調節シ得ルコトヲ必要トス、
(七) 更ニ錫ノ市場ヲ大東亞内ニ局限スルトハ錫ノ需要ハ現在生産能力ノ一小部分ヲ以テ十分ニ充足シ得ズ、又之ヲ世界市場ニ供給センガ爲メ全生産能力ヲ發揮セシムルトセバ其ノ規模洵ニ大ナクベク、從ツテ錫ノ開發經營ハ甚大ニ敏感ニシテ然モ伸縮自在ニ動キ得ラレ然モ各產地ニ亘リ強力ナル統制力ノ

及ビ得ル企業形態タルコトヲ必照トス

(イ) 依テ錫ハ採掘製錬販賣共ニ大東亞ヲ通ジ一企業體ニ統括スルコトヲ最適切ト認ム

六 鑛業法並ニ鑛業權

(ウ) 兩方ニ於ケル鑛山ノ開鑿ニハ鑛業法規ガ至大ノ關係ヲ有スルモノナレバ兩方各地ノ鑛業法ノ融和ニ當リテハ、資源ノ發見ヲ發掘スルト共ニ、徒ラニ鑛業權ヲ守保スルコトニヨリ重要鑛産發掘ノ困難ヲ遲延セシメザルノ工夫ヲ講ジ、與テ避ケ爾ニ就キ、以テ急遽ナル鑛業權ノ開發ヲ行ハシムルコト肝要ナリトス。

(ロ) 大東亞各地域ヲ通ジ自下重管理下ニアル該國人又ハ第三國人ノ所有ニカカル既開鑛山ノ鑛業權ハ地域ニヨリ權利ノ内容ヲ異ニスルト共ニ、鑛業權ノ所有ノ形態モ區々ナルヲ以テ、早急ニ之ガ屬地ヲ決定スルハ面目カラズ。蓋シ鑛業權ノ斷斷ノ如何ハ大東亞鑛業建設ノ將來ニ重大ナル影響ヲ及ボスベケレバナリ。依ツテ該國人又ハ第三國人ノ既開鑛山ノ鑛業權ハ之ヲ全部大



東亞鑛業ノ中樞統制機關ニ保管セシムルコトトシ、然ル後ニ皇
國ヲ中核トスル鑛業建設ヲ迅速且強力ニ遂行シ得ルヤウ、開發
ノ段階ニ應ジ、最善ノ解決ヲ計ルヲ適當ト認ム

以
上

裏面白紙



大東亞電力方策案

(昭和一七・六・八)

| | |
|------|------|
| 專門委員 | 池尾芳藏 |
| 專門委員 | 久保田 |
| | 豐 |

裏面白紙

(昭和十七年六月八日)

大東亞電力方策案

大東亞ニ於ケル電力方策ハ電力ガ大東亞戰爭完遂ヲ自途トスル綜合國防經濟力充實強化ノ重要ナル要素タルニ鑑ミ、大東亞ニ於ケル賦存動力資源ノ自然的特長ヲ暢達シ以テ各種國防產業ノ急速ナル進展ニ伴フ老朽ナル需要ニ即應スベキ電力生産力ノ劃期的擴充ヲ期セザルベカラズ、之ガ爲メニハ左記ノ要領ニヨリ措置ス

(一) 開發ノ方針

- 一、電力ノ開發ハ其ノ建設ノ長期性ニ徴シ各種産業計畫ニ即應スル爲メ之等計畫ノ完遂ニ遺憾ナカラシムル如ク先行シテ實施ス
- 二、電力ノ開發ハ水力發電ヲ主トシ、火力發電ハ石炭地帯ニ於ケル粗悪炭ノ消化、石炭ノ複合的利用、低級燃料ノ活用、重要地帯ニ於

(一)

ケル電力需給ノ調節上特ニ必要トスルモノノ開發ニ止ム

三、開發ノ第一、次目標ハ電力需給ノ均衡關係ニ鑑ミ電力ノ急速ナル増強ヲ圖ルタメ工事ノ施設ヲ速カニ完成セシムルト共ニ資材、勞力所要量比較的少ク工事期間ノ短少ナル水力地點ノ開發ヲ優先セシム

四、速カニ大東亞全地域ニ亘ル動力資源ノ大規模且ツ徹底的ナル調査ヲ進メ逐次之ガ開發ノ計畫ヲ樹立ス

(二) 開發ノ立地的配分

一、大東亞ノ中核タル内地ハ國防上ノ絶對的要請ニ基ク産業竝ニ電力ヲ主トシテ動力的ニ使用スル高次産業ヲ對象トシテ電力ヲ集約的ニ開發シ以テ賦存動力資源ノ最有效利用ヲ期ス

二、朝鮮、臺灣、滿洲及ビ北支ニ於テハ主トシテ電力ヲ原料的ニ使用スル産業ヲ對象トシテ賦存動力資源ノ大規模開發ニ依ル利點ヲ活用ス

(2)

三、中南支及シ南方諸地域ニ於テハ重要資源ノ開發又ハ其ノ原料的加
工ヲ目的トスル産業ヲ對象トシ之ニ必要ナル限度ニ於テ電力ノ開
發ヲ行フ
尙動力資源ノ實狀ニ即シ其ノ大規模開發ニ依ル利點ヲモ考慮シ特
ニ第二次擴充目標ニ於テ之ヲ重視ス

(三) 企業並ニ運營

一、電力ノ開發及ビ運營ハ諸地域間ノ緊密ナル聯繫ヲ圖リ皇國ノ強力
ナル中央行政機構ノ下ニ一元的統制ヲ行ヒ就中國防上特ニ重要ナ
ルモノハ皇國ニ於テ之ガ運營ヲ把握スル如ク措置ス
二、電力動員ノ圓滑強化ヲ圖リ動力資源ノ綜合利用ヲ完カラシムルタ
メ電力ノ開發及ビ運營ハ電力事業トシテ獨立シテ之ヲ行ハシムル
ヲ原則トス

三、皇國ヲ中心トシテ大東亞ニ於ケル電力施策ノ統整ヲ圖リ電力事業
相互間ニ於ケル技術及ビ機材ノ融通交流並ニ電力技術ニ關スル方

(3)



式ノ統一及び電力用機器ノ標準化等ノ實施ニ依ル動員力ノ強化ヲ期ス

(四) 資材、勞力、資金對策

一、大東亞ガ要請スル尨大ナル電力ノ開發目標ニ即應シテ之ニ要スル建設諸資材（鐵鋼、銅、其他金屬類、火藥等特ニセメント）、機器類（電氣機械器具及び工專用諸機械）ニツキテハ充分ナル供給力ヲ確保シ必要ニヨリテハ其ノ擴充ヲ期ス

二、同ジク勞務者、技術員ニツキテモ大量ヲ必要トスルヲ以テ之等ノ供給ヲ確保シ其ノ擴充ノ對策トシテハ勞務者ニツキテハ共榮圈内ノ豐富ナル勞働力ヲ能率的ニ向上セシメテ之ガ動員ニ遺憾ナカラシメ、所要技術員ニツキテハ養成施設ヲ飛躍的ニ擴充シテ其ノ育成ニ務ム

三、同ジク資金ニツキテハ所要額巨額ニ上ルベキヲ以テ之ガ調達ニツキテハ遺憾ナキヲ期ス

裏面白紙

(五) 科學技術ノ振興

大東亞ニ於ケル中核國家タル皇國ハ世界技術ニ對スル大東亞技術ノ優位確立ヲタメ電力科學技術ノ劃期的振興ヲ期ス

以上

(5)

極秘

大東亞共榮圈非鐵金屬開發計畫案

專問委員

川島三郎

裏面白紙

第一 開發方針

(一) 第一期五ヶ年ニ於テハ日滿支ヲ中心トスル大東亞共榮圈ノ自給自足の國防經濟ノ確立ヲ目的トシ而テ南方ニ對シテハ大東亞戰爭完遂ニ不可缺ナル重要資源ニ付既存設備ノ復舊及ビ増産ヲ重點的ニ行ヒ併セテ未開發資源ノ調査ヲ行フベキモノトス。但シ

(イ) 第一期中ニ於ケル未開發資源ト雖モ戰爭遂行上必要ナル不足資源ニ付テハ資材、運輸其他ノ關係上困難ナル場合ニ於テモ之ヲ開發スルト同時ニ

(ロ) 未開發資源中比較的容易ニ開發シ得ルモノハ第一期中ト雖モ開發スベキモノトス

(二) 第二期十ヶ年ニ於テハ大東亞經濟建設ヲ目標トシ雄大ナル構想ニ基キ本格的開發ニ移行スベキモノトス。尙未開發資源ノ調査ニハ第一期中ヨリモ更ニ力ヲ注グベキモノトス。

(三) 第一期中ト雖モ情勢如何ニ依リテハ全体的ニ又ハ部分的ニ第二期計
畫ニ移行スベキモノトス。

(四) 既存設備ハ國防上又ハ産業立地上特ニ支障ナキ限り之ヲ有效ニ利用
シ二重投資ヲ行ハザルヤウ注意スベシ。

(五) 本邦ノ鑛業ハ國防及ビ優秀技術培養ノ爲今後南方鑛業ト調整ヲ行フ
場合必要限度ニ於テ之ヲ保持スベキモノトス。

(六) 輸送船應ノ節約ヲ圖ル爲現地ニ於ケル選礦、製鍊設備ヲ復舊セシメ
精鑛、マツト又ハ地金ニテ移入スルコトヲスベシ。尙産業立地、統
治關係、資材、燃料、動力、勞力、輸送等ヲ考慮シ將來國內適當ナ
ル地域ニ之等設備ノ新設又ハ増設ヲ行フベキモノトス。

一、本案ニ於ケル大東亞共榮圈ノ範圍ハ日、韓、支、佛印、泰、ビル
マ、馬來、比島、東印度諸島(スマトラ、ジャバ、ボルネオ、セ
レベス等)、ヒュースニア及ビニューカレドニアヲ合ム地域ト假
之

定ス。

三、濠洲及ビ印度ハ共榮圈ニ包含セザルモ吾國ノ政治的經濟的壓力ヲ加フヤコトニ依リテ容易ニ吾國ノ欲スル資源の要求ニ協力セシムル勢力圈ヲ形成スルモノト假定ス。

三、本生産計畫完遂ニ要スル

資 金
勞 力
電 力
資 材
輸 送 量

等ニ關シテハ調査ニ長時日ヲ要スルヲ以テ別途ニ研究スルコトトス。

裏面白紙

第一期(五ヶ年)目標
第二開發計畫

| 資源名 | 五ヶ年計畫數量 | 備考 |
|----------|---------|--------------|
| 一、銅 | 二〇〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 二、鉛 | 一五〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 三、亜鉛 | 一五〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 四、錫 | 六〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 五、アンチモン | 六〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 六、ニッケル | 一五〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 七、コバルト | 一〇〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 八、タンクステン | 一〇〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 九、クロム | 一五〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |
| 一〇、マンガン | 六〇〇〇〇〇〇 | マンガン四〇%鑛トシテ |
| 一一、モリブデン | 三〇〇〇〇〇〇 | モリブデン八〇%鑛トシテ |
| 一二、水銀 | 三〇〇〇〇〇 | 金屬トシテ |



銅

戰前國內銅產額八、〇〇〇噸及國內其他地域產額一七、〇〇〇噸合計九八、〇〇〇噸ハ第一期目標二〇、〇〇〇噸ニ比シ擴充所要量八一〇、〇〇〇噸ナルガ之ニ對シ國內生産ヲ從來ノ一。四倍一一三、〇〇〇噸比律資產出約三倍三三、〇〇〇噸ニ増産ヲ豫定スルモ第一期目標ニ對シ尙三七、〇〇〇噸不足ス

本不足分ニ對シアルミニミニム及ビ亞鉛等ニヨル代用策ヲ講ズベキモノトス

| 比律資 | 南洋 | 朝鮮 | 內地 | 產地 |
|----------|---------|--------|--------|------|
| 一一 | 三 | 八一 | 八一 | 戰前產額 |
| 二一 | 三 | 三二 | 三二 | 增配分額 |
| 三三 | 六 | 一一三 | 一一三 | 合計 |
| 粗銅 | 電氣銅 | 精鑛 | 電氣銅 | 主生産品 |
| 又熔地ハ眞吹製銅 | 製銅電爐製精鍊 | 內地電送精鍊 | 銅轉電製吹製 | 處理法 |
| 一 | 三 | 八一 | 八一 | 現力鑛 |
| 二 | 三 | 三二 | 三二 | 擴充規要 |
| 一 | 四 | 一〇〇 | 一〇〇 | 現力鑛 |
| 二 | 六 | 一三二 | 一三二 | 擴充規要 |
| 六 | 六 | 一五五 | 一五五 | 現力鑛 |
| 一六 | 不要 | 不要 | 不要 | 擴充規要 |

裏面白紙



裏面白紙

| 計 | 其他 | 佛印 | ビルマ |
|-----|------|------|------|
| 九八 | | | 三 |
| 六五 | 二 | 三 | 四 |
| 一六三 | 二 | 三 | 七 |
| | 精 | 精 | 粗 |
| | 鑽 | 鑽 | 鑽 |
| | 内地へ賣 | 内地へ賣 | 内地へ賣 |
| 九八 | 〇 | 〇 | 三 |
| 六五 | 二 | 三 | 四 |
| 一八 | 〇 | 〇 | 三 |
| 四五 | 二 | 三 | 四 |
| 一七〇 | 〇 | 〇 | 三 |
| 二〇〇 | 不要 | 不要 | 四 |

註 濠洲銅年産額二、〇〇〇噸ハ必要ニ應ジ獲得ノ方策ヲ購ズベシ

二鉛

國內鉛産額ハ二萬二千噸ニシテ不足量ハビルマ及内地増産ヲヨリ計費
遂行ヲ期ス (單位一、〇〇〇噸)

| 支那 | 滿洲 | 内地 | 産地 | 戰前 産額 | 戰時 配分 額 | 合計 主生産 品 | 處理 法 | 現 能 力 | 新 規 要 求 能 力 | 現 能 力 | 新 規 要 求 能 力 | 現 能 力 | 新 規 要 求 能 力 |
|------|------|------|----|----------|---------------|----------------|---------|-------------|----------------------------|-------------|----------------------------|-------------|----------------------------|
| 四 | 三 | 三 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 二 | 二 | 五 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 六 | 五 | 二七 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 精 | 電氣 | 電氣 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 鑽 | 鑽 | 鑽 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 内地へ賣 | 内地へ賣 | 内地へ賣 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 四 | 三 | 三 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 二 | 二 | 五 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 六 | 五 | 二五 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 不 | 不 | 二 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 要 | 要 | 五七 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 〇 | 一〇 | 五七 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 不 | 不 | 八三 | 産地 | | | | | | | | | | |
| 要 | 要 | 八三 | 産地 | | | | | | | | | | |

| 支那 | 滿洲 | 朝鮮 | 內地 | 產地 |
|-------|------|-------|-------|------|
| | 三 | 五八 | | 戰前產額 |
| 五 | 二 | 二三 | | 增配分額 |
| 五 | 五 | 八一 | | 合計 |
| 精鑛 | 蒸溜亞鉛 | 其電氣製鍊 | 蒸溜亞鉛 | 主生産品 |
| 內地へ賣鑛 | 蒸溜法 | 電氣製鍊 | 蒸溜法又ハ | 處理法 |
| | 三 | 五八 | | 現力鑛 |
| 五 | 二 | 二三 | | 新充規要 |
| | 五 | 五八 | | 現力鑛 |
| 五 | 不要 | 二三 | | 新充規要 |
| 〇 | 五 | 一五〇 | | 現力鑛 |
| 不要 | 不要 | 不要 | | 新充規要 |

三、亞鉛
 増=國內産達内順シ位第一内五萬八千二百五十三トスベシ
 (單位一〇〇〇噸)
 増産ヲ必要トスレバ約十萬噸

| 計 | 佛印 | ビルマ | 比律賓 |
|-----|-------|-------|-------|
| 一一一 | 五 | 七六 | 一 |
| 三九 | 三 | 二六 | 一 |
| 一五〇 | 八 | 一三〇 | 二 |
| | 精鑛 | 鉛地金鑛 | 精鑛 |
| | 內地へ賣鑛 | 内地へ賣鑛 | 内地へ賣鑛 |
| 一一一 | 五 | 七六 | 一 |
| 三九 | 三 | 二六 | 一 |
| 三三二 | 八 | 七六 | 二 |
| 二八 | 不要 | 二六 | 不要 |
| 六七 | 〇 | 七〇 | 七〇 |
| 四三 | 不要 | 不要 | 不要 |
| 八三 | 不要 | 不要 | 不要 |

裏面白紙

裏面白紙

| | | |
|-----|-------|-------|
| 計 | 佛印 | ビルマ |
| 九九 | 五 | 三三 |
| 五一 | | 三一 |
| 一五〇 | 五 | 五四 |
| | 精鑛 | 精鑛 |
| | 内地へ賣鑛 | 内地へ賣鑛 |
| 九九 | 五 | 三三 |
| 五 | 〇 | 三一 |
| 一〇一 | 五 | 三三 |
| 四九 | 不要 | 三一 |
| 一五五 | 〇 | 〇 |
| 不要 | 不要 | 不要 |

四錫

本資源ハ將來世界の需給ヲ支配スベキモノニシテ之ニ備ヘ現生産設備ノ保全、労働者ノ生活保障並敵性國ヘノ流出防止ヲ期スト共ニ泰、佛印經濟協定ニ基キ必ズナル最低生産量ヲ維持セシム

(單位1,000噸)

| 産地 | 戰前 | 増産 | 合計 | 主生産品 | 處理法 | 現採鑛能力 | 新規鑛能力 | 現採鑛能力 | 新規鑛能力 |
|-----|----|----|----|------|-----------|-------|-------|-------|-------|
| 内地 | 二 | 〇 | 二 | 電解錫 | 反射爐又ハ電解製錬 | 五 | 不要 | 五 | 不要 |
| 支那 | 十 | △七 | 〇 | | | 不要 | 不要 | 〇 | 不要 |
| ビルマ | 五 | 〇 | 五 | 精鑛 | ベナン(賣鑛) | 五 | 不要 | 〇 | 不要 |

裏面白紙

| 計 | 印 | 馬來 | 泰 | 仰 |
|------|--------------|--------------|-------|-------|
| 1100 | 33 | 61 | 13 | 1 |
| △600 | △27 | △31 | △5 | 0 |
| 60 | 13 | 30 | 7 | 1 |
| | 精鑛ヨリ 金屬屬錫 | 精鑛ヨリ 金屬屬錫 | 精鑛 | 精鑛 |
| | 式製鍊 | 乾式製鍊 | 內地其他へ | 内地へ賣鑛 |
| 26 | 3 | 6 | 1 | 1 |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | 不要 |
| 12 | 3 | 6 | 1 | 1 |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | 不要 |
| 100 | (ハルカニ) | (ハルカニ) | 0 | 0 |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | 不要 |

△印 減産

五ヶ年計画

錫ト同様國內特産ニテ支那ニ於ケル産地湖南兩廣地方概定進メバ
五ヶ年計畫遂行支障ナシ
(單位：1000噸)

| 計 | 那 | 地 | 戰前 | 戰時 | 合計 | 主生産品 | 處理法 | 坑探 | 新規要 | 現選 | 新規要 | 精鍊 | 新規要 |
|-----|----|---|----|----|----|------|-------|----|-----|----|-----|----|-----|
| 100 | 4 | | 産額 | 産額 | 分額 | | | 能力 | 擴充探 | 力 | 擴充探 | 力 | 擴充探 |
| 6 | 2 | | | | | 金屬 | 熔出法其他 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |
| 4 | 4 | | | | | モリ | | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |
| 2 | 2 | | | | | | | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |
| 6 | 6 | | | | | | | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |
| 10 | 10 | | | | | | | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |
| 不要 | 不要 | | | | | | | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 | 力 |

9

裏面白紙

六ニツケル

主トシテセレベス・ビルマ及ビニューカレドニアヲ對象ヤスルモノ
ニシテ各地戦前生産量確保ニヨリ計畫數量一萬五千噸遂行可能ナリ

(單位一〇〇〇噸)

| 計 | カニ アレド | ニ ス | ル ス | 精 錬 | 精 錬 | 産 地 |
|----|---|--------------------------------------|-----------|-----------|-----------|-------------------|
| 一五 | 七 | 七 | 一 | 〇 | 〇 | 戦前 産額 |
| 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 増産 配分額 |
| 一五 | 七 | 七 | 一 | 〇 | 〇 | 合計 |
| | 佳 ル ニ ツ ケ ル 及 び 鉄 | 佳 ニ ツ ケ ル 及 び 鉄 | 砒 鉍 | 精 錬 | 精 錬 | 主生産品 |
| | 内地へ賣 出 | 内地へ賣 出 | 内地へ賣 出 | 内地へ賣 出 | 内地へ賣 出 | 處 理 法 |
| 一六 | 八 | 七 | 一 | | 〇 | 現採 能力 |
| 一 | 不 要 | 不 要 | 一 | 〇 | 〇 | 新規要 擴充採 能力 |
| | (手 選) | (手 選) | 一 | | 〇 | 現選 能力 |
| 一 | 不 要 | 不 要 | 一 | 〇 | 〇 | 新規要 擴充選 設備 |
| 七 | 三 | 〇 | 一 | 〇 | 三 | 現製 能力 |
| 八 | 三 | 不 要 | 不 要 | 不 要 | 五 | 新規要 擴充製 錬能力 |

セコバルト

ビルマ及ビニューカレドニア戦前実績合計五〇〇噸ニ過ギズ計畫數量一〇〇〇噸ニ對シテ倍増產ヲ必要トス、尙朝鮮鑛ノ増產並ニ亞鉛銅鑛滓中ノコバルト回收奨勵ニヨリ増產ヲ計ルベシ(單位一〇〇〇噸)

| 計 | ビニューカレドニア | ビルマ | 内地 | 産地 | 戦前増産額配分額 | 戦前増産額合計 | 主生産品 | 處理法 | 現採鑛能力 | 新採鑛能力 | 現選鑛能力 | 新選鑛能力 | 現製鍊能力 | 新製鍊能力 |
|-----|-----------|--------------|-----|----|----------|---------|------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 〇・五 | 〇・三 | 〇・二 | | | | | | | | | | | | |
| 〇・五 | 〇・三 | 〇・二 | | | | | | | | | | | | |
| 一・〇 | 〇・六 | 〇・四 | | | | | | | | | | | | |
| | コバルト鑛 | ニツケルコバルトスパイス | | | | | | | | | | | | |
| | 内地へ送鑛 | 内地へ送鑛 | | | | | | | | | | | | |
| 〇・五 | 〇・三 | 〇・二 | | | | | | | | | | | | |
| 〇・五 | 〇・三 | 〇・二 | | | | | | | | | | | | |
| 〇・五 | 〇・三 | 〇・二 | | | | | | | | | | | | |
| 一・〇 | 〇 | 〇 | 一・〇 | | | | | | | | | | | |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | | | | | | | | | | | |

裏面白紙

ハタングステン

内地及ビ朝鮮産出四〇〇〇噸ニ過ギザルモ支那産地ノ裁定ニヨリ第一期計畫量ヲ超過スベシ

(單位 一、〇〇〇 噸)

| 産地 | 産額 | 増産配分額 | 合計 | 主生産品 | 處理法 | 現採鑛能力 | 新規要擴充採鑛能力 | 現選鑛能力 | 新規要擴充選鑛能力 | 現製鍊能力 | 新規要擴充製鍊能力 |
|-----------|-----|-------|-----|-----------|-------|-------|-----------|-------|-----------|-------|-----------|
| 内地 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇 | フエロタングステン | 電氣鍊爐 | | | | | 八 | |
| 朝鮮 | 三〇〇 | 〇 | 三〇〇 | 其ノ他 | 其ノ他 | 四〇〇 | 不要 | 四〇〇 | 不要 | | |
| 支那 | 一二〇 | △九六 | 二四 | 精鑛 | 内地へ賣鑛 | 一二〇 | 不要 | 一二〇 | 不要 | 〇 | 不要 |
| 佛印 | 〇五 | 〇 | 〇五 | 精鑛 | 内地へ賣鑛 | 〇五 | 不要 | 〇五 | 不要 | 〇 | 不要 |
| 泰 | 〇二 | 〇 | 〇二 | 精鑛 | 内地へ賣鑛 | 〇二 | 不要 | 〇二 | 不要 | 〇 | 不要 |
| 馬來 | 一〇 | 〇五 | 一五 | 精鑛 | 内地へ賣鑛 | 一〇 | 不要 | 一〇 | 不要 | 〇 | 不要 |
| ヒルマ | 四三 | 二一 | 六四 | 精鑛 | 内地へ賣鑛 | 一一〇 | 不要 | 一一〇 | 不要 | 〇 | 不要 |
| 戦前産額 | 二二〇 | △七〇 | 一五〇 | | | 二八七 | 不要 | 二八七 | 不要 | 八 | |
| 増産配分額 | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | | | | | | | | | | |
| 主生産品 | | | | | | | | | | | |
| 處理法 | | | | | | | | | | | |
| 現採鑛能力 | | | | | | | | | | | |
| 新規要擴充採鑛能力 | | | | | | | | | | | |
| 現選鑛能力 | | | | | | | | | | | |
| 新規要擴充選鑛能力 | | | | | | | | | | | |
| 現製鍊能力 | | | | | | | | | | | |
| 新規要擴充製鍊能力 | | | | | | | | | | | |

裏面白紙

△印 非占領地帶產出量減少

ルクローム

比律賓ニ於クルクローム產出狀況ハ近年極メテ良好ニシテ同島產ノミ
ニテモ充分本計畫實行可能ナルベシ。

(單位 一、〇〇〇噸)

| 計 | レドニア | 比律賓 | 内地 | 產地 |
|------|------|-----|--------------|-----------|
| 二二〇 | 四〇 | 一二〇 | 六〇 | 戰前產額 |
| △二二〇 | △二〇 | 〇 | 〇 | 增產配分額 |
| 三三〇 | 二〇 | 一二〇 | 六〇 | 合計 |
| | 鐵石 | 鐵石 | フエロクロム 其他 | 主生產品 |
| | | | 電氣煉 其他 | 處理法 |
| 二二〇 | 四〇 | 一二〇 | 六〇 | 現採鑛能力 |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | 新規要擴充採鑛能力 |
| 二二〇 | 四〇 | 一二〇 | 六〇 | 現選鑛能力 |
| 不要 | 不要 | 不要 | 不要 | 新規要擴充選鑛能力 |
| 六〇 | 〇 | 〇 | 六〇 | 現製鐵能力 |
| 二四〇 | 不要 | 八〇 | 六〇 | 新製鐵擴充要力 |

△印 減產

裏面白紙

マンガン

本計畫遂行上主タル産地内地ヲ初メトシ比律賓、馬來等各地ニテ極力増産スルモ尙第一期
目標數量ニ對シ一五〇、〇〇〇噸不足ス、本不足分ハ印度滿俺年産一〇〇万噸ノ内ヨリ適宜
獲得ノ方策ヲ講ズベキモノトス。

(單位 一〇〇〇噸)

| 計 | 支那 | 蘭印 | 馬來 | 比律賓 | 佛印 | 内地 | 産地 |
|-----|----|----|----|-----|----|-------------------|-----------|
| 二六〇 | 二 | 一一 | 三五 | 五〇 | 二 | 一六〇 | 戰前産額 |
| 一九〇 | 六 | 一六 | 三〇 | 七五 | 三 | 四〇 | 増産配分額 |
| 四五〇 | 八 | 二七 | 八五 | 一二五 | 五 | 二〇〇 | 合計 |
| | | 鑛 | 鑛 | 鑛 | 鑛 | 其 フエロマンガ ン他 | 主生産品 |
| | | 石 | 石 | 石 | 石 | 煉電 氣其 他 | 處理法 |
| 二六〇 | 二 | 一一 | 三五 | 五〇 | 二 | 一六〇 | 現採鑛能力 |
| 二四〇 | 六 | 一六 | 五〇 | 七五 | 三 | 四〇 | 新規要鑛能力 |
| 二六〇 | 二 | 一一 | 三五 | 五〇 | 二 | 一六〇 | 現選鑛能力 |
| 一九二 | 八 | 一六 | 〇 | 七五 | 三 | 四〇 | 新規要鑛能力 |
| 三〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三〇〇 | 現製鑛能力 |
| 三〇〇 | | | | 三〇〇 | | | 新規要擴充製鑛能力 |

裏面白紙

一、モリブデン

近年内地。朝鮮及滿洲ヲ合シ產出壹千應弱ニツキ特ニ本品ノ増産ヲ計ルト共ニニツケル、夕ローム又ハタンダステンニヨル代用方策研究ヲ要スベシ

(單位 應)

| 産地 | 戰前 産額 | 増産 額配分 | 合計 | 主生産品 | 處理法 | 現産 能力 | 新規 産能 | 現産 能力 | 新規 産能 | 現産 能力 | 新規 産能 | 現産 能力 | 新規 産能 |
|----|----------|-----------|-------|----------------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 内地 | 四〇二〇〇 | 二〇〇 | 二四〇 | フェロモリブ デン其他 | 電気爐 其他 | 五〇一九〇 | 三〇一九〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 |
| 朝鮮 | 三〇〇 | 三六〇 | 六六〇 | 精 鍊 | 内地へ賣出 | 四〇〇 | 二六〇 | 四〇〇 | 二六〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 不要 |
| 滿洲 | 五〇〇 | 五〇〇 | 一〇〇〇 | 精 鍊 | 内地へ賣出 | 六〇〇 | 四〇〇 | 六〇〇 | 四〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 不要 |
| 佛印 | 二〇 | 八〇 | 一〇〇 | 精 鍊 | 内地へ賣出 | 二〇 | 八〇 | 二〇 | 八〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 不要 |
| 計 | 八六〇 | 一、一四〇 | 二、〇〇〇 | | | 一、〇七〇 | 九三〇 | 一、〇七〇 | 九三〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

但シ モリブデン (Bokro) トシテノ數量ヲ示ス

裏面白紙

一、二、水 銀

水銀ハ大東亞共榮圈內鐵礦產物ニシテ目標三〇〇〇噸ノ計畫遂行至難ニテ不足分六〇〇噸ハ將來スペイン及ビイタリヨリ適當ナル方法ヲ以テ獲得策ヲ講ズル要アルベシ、
 ボルネオ、並支那ニ於ケル本資源開發増産ヲ特ニ期待ス

(單位 噸)

| 計 | ボルネオ | 支那 | 滿洲 | 内地 | 產地 |
|------|------|-----|-----|------|-----------|
| 三三〇 | 未開發 | 七〇 | | 一五〇 | 戰前產額 |
| 一八〇 | 五〇〇 | 四三〇 | 一〇〇 | 一五〇 | 分增產配額 |
| 一四〇〇 | 五〇〇 | 五〇〇 | 一〇〇 | 三〇〇 | 合計 |
| | 精 | 精 | 精 | 精 | 主生產品 |
| | 礦 | 礦 | 礦 | 蒸發製鍊 | 處理法 |
| | 內地 | 內地 | 內地 | 其 | |
| 三三〇 | 〇 | 七〇 | 〇 | 一五〇 | 現採能力 |
| 一八〇 | 五〇〇 | 四三〇 | 一〇〇 | 一五〇 | 新規要擴充採能力 |
| 三三〇 | | 七〇 | 〇 | 一五〇 | 現選能力 |
| 一八〇 | 五〇〇 | 四三〇 | 一〇〇 | 一五〇 | 新規要擴充選能力 |
| 五〇〇 | | | | 五〇〇 | 現精鍊能力 |
| 一四〇〇 | 不 | 不 | 不 | 一五〇〇 | 新規要擴充製鍊能力 |

裏面白紙

第二期（十五ヶ年）目標

資源名 十五ヶ年計数量

| | |
|----------|------------|
| 一 銅 | 六〇〇、〇〇〇 吨 |
| 二 鉛 | 四五〇、〇〇〇 " |
| 三 亜鉛 | 四五〇、〇〇〇 " |
| 四 錫 | 一二〇、〇〇〇 " |
| 五 アンチモン | 一二、〇〇〇 " |
| 六 ニッケル | 四五、〇〇〇 " |
| 七 コバルト | 二、〇〇〇 " |
| 八 タングステン | 三〇、〇〇〇 " |
| 九 タリウム | 六〇〇、〇〇〇 " |
| 十 マンガン | 一八〇〇、〇〇〇 " |
| 十一 リン | 四、〇〇〇 " |

備考

金屬トシテ
 " "
 " "
 " "
 " "
 " "
 " "
 W_{0.3} 鍍トシテ
 タリウム四〇%鍍トシテ
 マンガン四〇%鍍トシテ
 リン八〇%鍍トシテ



去水

銀

三、〇〇〇噸

金屬トシテ

一、銅

第一期計畫ノ成果ニ鑑ミ益々有望ナルモノハ勿論、國內外ニ亘リ貧
礦化ノ爲採算不能ノ礦山ト雖モ極力其生産ノ維持擴大ニ努ムル必要アリ。
然シ從來稼業ノ礦山ニ於テハ例ヘバ比律賓ノ如キ新興銅産地ノ他
ハ大ナル期待ヲ掛ケラレズ。

本計畫ノ特異性トスル處ハ(他ノ各金屬ニ就テモ大体同様)廣ク大
東亞圈内ニ於ケル未開發資源ノ積極的開發ニ在リ。

從來ノ調査ニ依リ少クトモ資源ノ存在ヲ確認セラル、モノノミニテ
モ相當多數ノ礦山アリ。更ニ第一期計畫遂行中ノ期間ニ於テ調査或ハ
探礦ノ結果新タニ發見セラル、未知礦床ヲ加フレバ相當ノ希望アリ。
然シ未知大礦床ノ發見セラレザル限り、技術的見地ヨリ見テ過大ナル
増産期待ハ不可能ナリ。



裏面白紙

左表ハ從來ノ實績ヲ有スル産銅地ノ増産ヲ進ムルト共ニ前記ノ特異性ニ立脚シテ未開發ナル各地ヨリノ新タナル産銅ヲ期待シテ十五年後ノ生産高ヲ配分セルモノナリ。然シ目標トスル計畫數量ノ六十萬噸ヲ所謂大東亞圈内ニノミ求ムル計ハ恐ラク困難ニシテ不足分ハ約三十萬八千噸ニ及ビ更ニ印度及濠洲ノ増産ヲ加ワルモ尙十七萬三千噸ノ不足ヲ告グル次第ナレバ本資源ニ關スル限り代用品ノ探究ニ待ツトモ口大ナルモノアリトス。

| 生産地 | | 戦前生産高(噸) | 十五年後生産高(噸) |
|-----|----|----------|------------|
| 内地 | 朝鮮 | 八一〇〇〇 | 一六〇〇〇 |
| 臺灣 | 滿洲 | 三〇〇〇 | 一三〇〇〇 |
| 支那 | 那 | 三〇〇〇 | 五〇〇〇 |
| 比律 | 賓 | 一一〇〇〇 | 五〇〇〇 |
| 佛 | 印 | 一〇〇〇 | 五〇〇〇 |



| 尙 不 足 | 濠 洲 ヨ リ 獲 得 見 込 | 印 度 ヨ リ 獲 得 見 込 | 不 足 | 生 算 目 標 | 合 計 | ニ ユ ー ギ ニア | セ レ ベ ス | チ モ ー ル | ジ ヤ バ | ス マ ト ラ | 水 ル ネ オ | 馬 來 | 緬 甸 | 泰 |
|-------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---------|------------------|---------|------------------------|------------------|------------------|-------------|------------------|------------------|--------|--------|-------|
| | | | | | 九八、〇〇〇 | | | | | | | | 三、〇〇〇 | |
| 一七三、〇〇〇 | 四五、〇〇〇 | 三〇、〇〇〇 | 二四八、〇〇〇 | 六〇〇、〇〇〇 | 三五二、〇〇〇 | 二〇、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 五、〇〇〇 | 五、〇〇〇 | 五、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 三、〇〇〇 | 一、二〇〇 | 五、〇〇〇 |

20

125

裏面白紙

| 尙 不 足 | 濠 洲 ヨ リ 獲 得 見 込 | 印 度 ヨ リ 獲 得 見 込 | 不 足 | 生 算 目 標 | 合 計 | ニ ユ ー ギ ニア | セ レ ベ ス | チ モ ー ル | ジ ヤ バ | ス マ ト ラ | 水 ル ネ オ | 馬 來 | 緬 甸 | 泰 | |
|----------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|-----------------------|----------------------------|------------------------|-----------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|--|
| | | | | | 九 八 〇 〇 〇 | | | | | | | | 三 〇 〇 〇 | | |
| 一 七 三 〇 〇 〇 | 四 五 〇 〇 〇 | 三 〇 〇 〇 〇 | 二 四 八 〇 〇 〇 | 六 〇 〇 〇 〇 | 三 五 二 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 | 三 〇 〇 〇 | 一 二 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 | |

20

裏面白紙

二、鉛

鉛ニ關シテハ内地生産ノ維持ヲ確保シ貧鑛處理ニ至ル迄健全ナル生産擴充ヲ獎勵實行スルト共ニ第一期計畫ニ於テ指摘シタル方如ク特ニ緬甸ノ増産ニ重點ヲ置ク必要アリ。

滿洲ノ増産ハ可能性多ク新興未開發方面トシテハニユ一ギニヤ、泰、佛印及比律賓ナルモ左表ニ示ス如ク生産目標ノ四十五萬噸ニ對シテハ約十三萬噸不足ヲ告グ。其不足分ハ濠洲ヨリ獲得スルモノトス。

| 生産地 | | 戰前生産高(噸) | 十五年後生産高(噸) |
|-----|----|----------|------------|
| 内地 | 朝鮮 | 一、一〇〇〇 | 三五〇〇〇 |
| 滿洲 | 洲 | 三〇〇〇 | 一五〇〇〇 |
| 文那 | 那 | 四〇〇〇 | 一〇〇〇〇 |
| 香港 | 港 | 〇 | 五〇〇〇 |

2/

| 不 足 | 生 産 目 標 | 合 計 | 小 ス ン ダ | ユ ニ キ ニ ア | ジ ヤ バ | ス マ ト ラ | ホ ル ネ オ | 馬 来 | 緬 甸 | 泰 国 | 佛 印 | 比 律 賓 |
|----------------------------|-----------------------|----------------------------|------------------|-----------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------------|------------------|------------------|------------------|
| | | 一 一 〇 〇 〇 | | | | | | | 七 六 〇 〇 〇 | | 五 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 |
| 一 三 一 〇 〇 〇 | 四 五 〇 〇 〇 | 三 一 九 〇 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 | 一 二 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 | 三 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 | 八 〇 〇 〇 |

22

裏面白紙

亜鉛

緬甸ノ増産ニ最大ノ期待ヲ有スルモノナレド、滿洲、支那、佛印、泰等相當ノ結果ヲ豫想シ得ベク、未開發方面トシテニューギニアノ如キモ或ハ案外ナル好成績ヲ得ルヤモ知レズ。

然シ大東亞圈内廣シト雖、我國内ノ産額ヲ第一トシ内地ノ増産ニ重點ヲ置ク必要アリ。外ニ大東亞全面ニ亙リテ生産可能ノ豫想ヲ抽出スレバ左表ノ如シ。但シ之等全地方ヲ合計スルモ二十六萬九千應ニ過ギズ目標ノ四十五萬應ニ對シテハ約十八萬應ノ不足ヲ生ジ濠洲ヨリノ獲得ヲ豫定スルモ尙可ナリノ不足ヲ皆グルコトトナルベキニ付亞鉛増産ニハ特ニ一段ノ努力ヲ要ス。

| 内地 | 朝鮮 | 滿洲 | 生産地 | 戰前生産高(應) | 十五年度生産高(應) |
|----|----|----|-----|----------|------------|
| | | | | 五八〇〇〇 | 一〇五〇〇〇 |
| | | | | 三〇〇〇〇 | 一五〇〇〇 |



裏面白紙

| 支那 | 北婆羅 | 佛印 | 泰 | 緬甸 | スマトラ | ジャバ | ニューギニア | 合計 | 生産目録 | 不足 |
|-------|------|------|------|-------|------|------|--------|-------|------|--------|
| 一五〇〇〇 | 三〇〇〇 | 八〇〇〇 | 八〇〇〇 | 一〇〇〇〇 | 三〇〇〇 | 三〇〇〇 | 一〇〇〇〇 | 九九〇〇〇 | | 一八一〇〇〇 |

四 錫

左表ニ示ス如ク本計畫數量ノ生産實行容易ナルモノトス

24

裏面白紙

| 生産地 | 戦前生産高(吨) | 十五年後生産高(吨) |
|-----|----------|------------|
| 内地 | 二〇〇〇〇 | 二〇〇〇〇 |
| 支那 | 七〇〇〇〇 | 七〇〇〇〇 |
| 佛印 | 五〇〇〇〇 | 六〇〇〇〇 |
| 泰 | 一〇〇〇〇 | 二〇〇〇〇 |
| 緬甸 | 五〇〇〇〇 | 五〇〇〇〇 |
| 馬來 | 六〇〇〇〇 | 五〇〇〇〇 |
| 蘭印 | 三〇〇〇〇 | 三〇〇〇〇 |
| 合計 | 一三〇〇〇〇 | 一三〇〇〇〇 |

五アングモン
支那ノアングモンヲ確保ニヨリ其ノ豊富ナル資源ニ徴シ計畫實行
容易ナリトス



| 生産地 | 戦前生産高(應) | 十五年後生産高(應) |
|------|----------|------------|
| 内地 | 四〇〇〇 | 三〇〇〇 |
| 支那 | 四〇〇〇 | 一〇〇〇〇 |
| 合計 | 四〇〇〇 | 一三〇〇〇 |
| 生産目標 | | 一三〇〇〇 |

六 ニツケル

ニツケルニ關シテハ第一期計畫ト同様緬甸、セレベス、ニユカレド
 ニアラ對象トシテ増産スル以外ニ良法ナク産地ニ對スル目標ハ明瞭ナ
 下、主産地タルニユカレドニアラ及セレベスノ錫石ハ硅ニツケル
 ニシテ緬甸ハ砒ニツケル鑛ヲ主トス。又内地或ハ朝鮮ニ産スル硫化鑛
 其他ヲモ考慮ニ入ルレバ夫々特異ナル處無階梯ヲ要シ之等ニツケル鑛
 ノ開發ニ關聯シテ優秀ナル製鍊設備ノ擴張或ハ新設ニ對シ國家的見地
 ヨリ適切ナル方策ヲ講ズルヲ要ス。



裏面白紙

| 生産地 | 戦前生産高 (一應) | 十五年後生産高 (一應) |
|----------|------------|--------------|
| 内地 | | 一〇〇〇〇 |
| 緬甸 | 九〇〇 | 四〇〇〇 |
| セレベス | 六八〇〇 | 一〇〇〇〇 |
| ニューカレドニア | 七五〇〇 | 三〇〇〇 |
| 合計 | 一五〇〇〇 | 四五〇〇〇 |
| 生産目標 | | 四五〇〇〇 |

セコバルト

左表ノ如ク緬甸及ニューカレドニアヲ主トシニツケルニ關聯シテ
其ノ増産ヲ期待シ得ルモノナリ



| 生産 目 標 | 合 計 | ミ ー カ レ ド ニア | 縮 甸 | 内 地 | 生 産 地 |
|--------------|------------------|-----------------------------|-------------|-------------|-------------|
| | 五 〇 〇 | 三 〇 〇 | 二 〇 〇 | | 戦前生産高（噸） |
| | 二 〇 〇 〇 | 八 〇 〇 | 八 〇 〇 | 四 〇 〇 | 十五年後生産高（噸） |

28

裏面白紙

ハダングス字ン

從來ノ實績ヲ保持スルト共ニ新興ノ緬甸、泰及馬來等ヲ考慮ニ入レ
目標數量迄増産セントス。

| 生産地 | 戰前生産高(噸) | 十五年後生産高(噸) |
|------|----------|------------|
| 内地 | 三〇〇〇 | 三〇〇〇 |
| 朝鮮 | 一〇〇〇 | 一〇〇〇 |
| 支那 | 五〇〇 | 五〇〇 |
| 佛印 | 二〇〇 | 二〇〇 |
| 泰 | 四〇〇 | 四〇〇 |
| 緬甸 | 一〇〇 | 一〇〇 |
| 馬來 | 一〇〇 | 一〇〇 |
| 合計 | 三〇〇〇 | 三〇〇〇 |
| 生産目標 | | 三〇〇〇 |

29

裏面白紙

九クローム

第一期計畫ノ如ク内地及比律賓特ニ後者ヲ主トシ二十五万應ニ増産ノ豫定トス。未開發地域トシテハボルネオニ重點ヲ置クモノトシ、ニューギニア、ニューカレドニア等ニ於ケルクローム開發ヲ期待スルモノナリ。

クロームニ關スル本計畫案ハ左表ニ示ス如ク合計六十万應ニ達スル見込ナレド多量ノ未開發部分ノ想定ヲ包含シ之レガ實行ニハ多大ノ努力ヲ要スルモノトス。

| 生産地 | 戰前生産高(應) | 十五年後生産高(應) |
|------|----------|------------|
| 内地 | 六〇〇〇〇 | 一〇〇〇〇〇 |
| 比律賓 | 一〇〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 |
| 佛印 | | 六〇〇〇〇 |
| ボルネオ | | 一〇〇〇〇〇 |



| 生産目標 | 合計 | チモール | セレベス | ニューカレドニア | ニューギニア |
|---------|---------|-------|--------|----------|--------|
| | | | | 四〇、〇〇〇 | |
| 六〇〇、〇〇〇 | 六〇〇、〇〇〇 | 四、〇〇〇 | 二〇、〇〇〇 | 六〇、〇〇〇 | 六〇、〇〇〇 |

マンガン

本計盤ノ特徴ハ比律賓ノ大増産ト馬來ニ期待ヲ掛ケ且ツ支那ニ於ケル未開
 發鑛石ノ利用ヲ示唆セルモノニシテ尙ジヤバ、スマトラ、泰等ニモ増産ノ
 必要ヲ分擔セシメントセルモノナリ。
 然シ左表ニ示ス如ク各地方合計ノ生産高豫想ハ漸ク八十萬噸程度ニ過ギズ
 目標ノ百八十萬噸ニハ相距ルコト遠ク不足分ハ印度ヨリ獲得ノ豫定ナリ。



| 不 産 目 足 | 計 | ス バ ス | マ ト ラ | 馬 來 | 泰 來 | 佛 印 | 比 律 | 支 那 | 内 地 | 出 産 地 |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-------------|
| | 二 六 〇 〇 〇 | 一 一 〇 〇 〇 | 三 五 〇 〇 〇 | | | 二 〇 〇 〇 〇 | 五 〇 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 〇 | 一 六 〇 〇 〇 | 戦前生産高(噸) |
| 一 〇 〇 〇 〇 | 一 八 〇 〇 〇 | 八 〇 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 〇 | 三 〇 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 〇 | 二 〇 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 〇 | 三 〇 〇 〇 〇 | 一 〇 〇 〇 〇 | 十五年後生産高(噸) |

32

裏面白紙



裏面白紙

不足分ハ印度ヨリ獲得ノ見込
一マモリブデン

第一期計畫ト同様内地、朝鮮及滿洲ヲ主トシ、比律賓及佛印等ヲモ
包含シタルモノナレド所期ノ計畫數量ニ達スルニハ大ナル努力ヲ要ス

| 生産地 | 内地 | 朝鮮 | 滿洲 | 比律賓 | 佛印 | スミト | 合計 | 生産目標 |
|-------------|-----|-------|-------|-----|-----|-----|-------|-------|
| 戰前生産高(一應) | 四〇〇 | 三〇〇 | 五〇〇 | | 二〇〇 | | 八六〇 | |
| 十五年後生産高(一應) | 五〇〇 | 一、二〇〇 | 一、五〇〇 | 五〇〇 | 二〇〇 | 一〇〇 | 四、〇〇〇 | 四、〇〇〇 |

裏面白紙

三水銀

左表ハ水銀ノ生産ニ關スル各地域ニ對スル配分數量ヲ示セルモノナリ
 第一期計畫ニ於テ指摘シタル如ク從來ノ稼業狀況ニ於テハ計畫數量ニ
 達スルコトハ多大ノ困難アリ。不足ヲ西班牙及伊太利ヨリ獲得スルモ
 ノトス。コノ際、特ニ増産獎勵方策ヲ講ジ各地ノ未開發鑛山ヲ極力開發
 シ廣ク大東亞ニ求メテコノ重要ナル不足資源ノ生産ヲ確保スベキモノ
 トス。

| 生産地 | 戰前生産高(噸) | | 十五年後生産高(噸) | |
|------|----------|----|------------|---|
| | 内 | 外 | 内 | 外 |
| 内地 | 150 | | 450 | |
| 朝鮮 | | | 100 | |
| 滿洲 | | | 200 | |
| 支那 | | 70 | 800 | |
| 佛 | | | 100 | |
| 暹 | | | 600 | |
| ス | | | 100 | |
| 合 | | | 1350 | |
| 生産目標 | | | 3000 | |



第三 地下資源ノ調査ニ關スル事項

大東亞共榮圈內ニ於テハ地下資源ノ急速且大巾ノ増産確保ヲ要スル次第ナルガ之レガ目的達成ニハ現在稼行中ノ礦物増産ニ依ルト同時ニ未開發資源ノ調査ニ期待スル處大ナルモノアリ殊ニ非鐵金屬ノ如ク大部分急激ナル増産ヲ目標トセルモノニ於テハ特ニ調査ノ點ヲ重要視セザルベカラズ仍テ左ニ之ガ調査ノ上ノ重要事項ニ付概說セントス

(一) 調査ハ重點主義ニヨルベキモ其實情ニヨリ緩急適宜鹽梅スベキモノトス、即

(1) 礦産的ニハ吾國ニ最モ必要ノモノヲ先ニシ、以下適當ニ其順位ヲ考慮シ調査スベキモノナリ

(2) 立地的ニハ出來ル丈設備ニ近キ地方ノ調査ヲ先ニシ、不便ナル所ハ漸次後廻シトスベキモ之レハ發見ノ難易トモ睨ミ合テ考慮ノ要アリ

(3) 量的ニハ大嶺山ノ地帶カ大物ノ發見ノ可能性大ナルヲ以テソノ附近ノ探鑛ニ主力ヲ注グ事又小鑛床ノ附近及ソノ隣接ノ類似セル地

質ノ地帯ハ之レニ次グ、尙何レノ場合モ平行脈ヲ豫想シテ盾入探
鑽ノ事、

(二) 鑽床發見ノチヤンスノ點ヨリ云ヘバ比較的調査行届キ居ラザル地
方即チ未ダ充分ナル地質圖作成セラレ居ラザル地方ヲ先ニシ然ラ
ザル地方地方ヲ后ニス

(三) 能率主義ノ事

(1) 調査者ヲ嚴選スルコトヲ要ス
(2) 鑽種別ニ調査隊ヲ編成スルヨリモ區域別トスルヲ可トス。一技師
ニシテ數種ノ鑽物ヲ精通セルニ拘ラズ鑽種別ニ編成サレ居ル爲メ
折角調査ノ序アリ乍ラ拱手シテソレヲ見ズニ退去シタル例ナシト
セズ

(3) 調査團ノ組織ニ付テ適合世帯ヲ排ス、

(三) 技術指導者ノ選定

(1) 調査又ハ探鑽ハ優秀ナル技術者ノ指導ヲ第一トス。
(2) 指導者ハ技術的ニ充分實地ノ訓練ヲ經タルモノナル事ヲ要ス



(イ) 技術者ニハ熱意ト創意アルヲ要ス、場合ニヨリテハ調査上往々生命ノ危険ヲ伴フ事アルモ之ヲ省ズ敢行スル者タル事ヲ要ス

(ニ) 著シキ失敗ノ經驗ヲ得ル技術者ハ第一線ニ立タルザル事ヲ望ム

(四) 物理探鑛利用ノ事

物理探鑛モ多方面ニ利用サレ其機關モアリ、新鑛體ノ發見ヲ企テラレ、既ニ其成功ヲ傳ヘタルモノアルモ實際上ハ尙釋然タラザルモノアリ、(イ) プハ立派ニ出ルガ有力ナ鑛體發見ニ至ラズ、仍テ其ノ利用ニ付テハ慎重研究ノ要アリ。

(五) 文獻ノ蒐集

海外地質鑛床ニ關スル文獻ハ近來良書ノ翻譯モアリ大イニ便利ヲ感ゼル所ナルガ尙オラシク其ノ他ノ雜誌、報告書圖類等ニシテ容易ニ入手出來ズ或ハ入手出來タトシテモ語學ノ關係上翻譯シ難キモノアリ、依テ重要ノモノヲ選定シ其ノ邦譯機關ヲ設置又ハ既設ノ機關ヲ利用シ、ソレ等ヲ關係者ニ配布シ探鑛調査等ノ便ニ供シ度(現地ノ役所等ニ特種ノモノ無キヤ取調ノ事)



第四 企業形態

東亞共榮圈內ニ於ケル企業形態ニ關シテハ一般的ニハ綜合的生產計畫ノ樹立、需給ノ統制、收益ノ國家歸屬等ノ觀點ヨリ資源及ビ設備ノ國有、國策會社ニ依ル經營等ノ形態ヲ適當トスル場合モ甚ダ多カルベシト考ヘラル、モ本案ニ於テ取扱フ非鐵金屬ノ多クハ共榮圈內ニ於ケル生産頗ル寡少ニシテ將來特ニ南方地域ニ於テ急速ニシテ且ツ多大ナル増産ヲ完遂スルニ非ラザレバ其ノ供給目標ニ到達スルコト能ハズ。而テ地下資源ノ増産ヲ如キ事業ニ於テハ企業者ノ技術的創造ト企業ニ對スル熱意ト努力トヲ最高度ニ發揮セシムルガ如キ企業形態ヲ採用スル事ヲ可トス

昭和十七年六月

極秘

大東亞共榮圈内ニ於ケル非鐵金屬生産
激充目標

専門委員
小村 千太郎

裏面白紙

大東亞共榮圈內ニ於ケル非金礦生産充目標

大東亞共榮圈內ニ於ケルニツケル、鉛及銅ノ生産充目標ヲ左ノ如ク第一期及第二期ノ二期ニ分テ、其ノ實現ニ付立地、開發及企業方式、所妥資金以テ資源政策等ノ觀點ヨリ考察スルコト次ノ如シ

一、生産充目標

| | 第一期 (五年) | 第二期 (十年) |
|------|----------|----------|
| ニツケル | 一五〇〇〇〇 | 四五〇〇〇〇 |
| 鉛 | 一五〇〇〇〇 | 四五〇〇〇〇 |
| 銅 | 二〇〇〇〇〇 | 六〇〇〇〇〇 |

ニツケル

大東亞共榮圈內ニ於ケルニツケル資源ハ他種ノ屬ノ夫レニ比シ比較的豐富ニシテ、ニツケルニ付及セシメスニ付ニ出立ヲイフトシテ、其ノ賦存シ且ノ平均品位ハ三、三%乃至一、六%程度ト推定セラル

(1)



裏面白紙

(1) 地域別生産目標

| | 産額(昭和十三年) | 第一期年産額 | 第二期年産額 |
|----------|-----------|----------|----------|
| セレス | 1 | 3,000 應 | 1,000 應 |
| ニューカレドニア | 7567 應 | 1,000 應 | 2550 應 |
| ブルマ | 1151 | 1,000 應 | 1,000 應 |
| 本邦 | | 1,000 應 | 3,000 應 |
| 其他(註) | 1 | 1 | 4500 應 |
| 合計 | 8718 應 | 11,000 應 | 14,500 應 |

註 セレス、比律賓産ヲテライト中ノニツケルヲ加算セルモノナリ

(2) 製煉

本邦以外ノ分ハ山許ニ於テニツケルノ第二次ワット(品位六〇%)
 ヌハスパイストシ之ヲ臺灣又ハ西貢朝鮮ニ輸送シ電氣製煉ヲ行フモノトス

{2}

尙ラテライト中ノニツケルニ就テハ前記ノ海外各地ハ孰レモ製煉
用炭ニ乏シキヲ以テ北支義ハ西部朝鮮ニ輸送シルツペヲ製出スル
モノトス

(3) 所要資金

| | 第一期 | 第二期 |
|------|------|------|
| 探鑛設備 | | |
| 選鑛設備 | 五千萬圓 | 七千萬圓 |
| 製煉設備 | | |
| 運搬設備 | | |
| 電煉設備 | 二千萬圓 | 三千萬圓 |
| 合計 | 七千萬圓 | 一億圓 |

鉛ノ自標量生産ニ付テハ濠洲ヲ包括セシムルヲ要ス
(1) 地域別生産目標

(3)

裏面白紙

| | 産額 (昭和十三年) | 第一期年産額 | 第二期年産額 |
|---------|--------------|---------|---------|
| 日 本 | 八六三八六圓 | 一一〇〇〇〇圓 | 一五〇〇〇〇圓 |
| 日 本 支 店 | 一三〇〇〇 (本邦ノミ) | 四〇〇〇〇 | 四〇〇〇〇 |
| 合 計 | 三三五六六圓 | 一 | 二六〇〇〇〇 |
| (2) 製 煉 | 三二九〇圓 | 一三〇〇〇〇圓 | 四五〇〇〇〇圓 |

(8) 所製資金
 實作製ラジウムトス
 於テハ原則トシテ山許ニ於テ精鉛又ハ電氣製煉迄ノ一

| | 第一期 | 第二期 |
|---------|------|------|
| 本 邦 | 五千萬圓 | 二千萬圓 |
| 本 邦 支 店 | 一千萬圓 | 一 |
| 合 計 | 六千萬圓 | 二千萬圓 |



銅

(1)

銅ハ前編ノ三ツナル、鉛ニ比シ現在ノ査定資源ニ於テハ大東亞共榮
國ノ資源ヲ以テシテハ第一期目標タル二十萬應スラ充足スルコト困
難ニシテ第二期目標タル六〇萬應ニ達スルコトハ到底不可能ナルヲ
以テ其ノ對策ニ付テハ個別的並ニ綜合的ニ劃期的ナル計畫樹立ヲ必
要トスベク之ガ具體案ヲ列舉スレバ左ノ如シ

(イ) 本邦及比島ニ重點ヲ置キ現在進行中ノ銅山ニ對シ積極的増産ヲ行
ハシムルト共ニ之ト併行的ニ開發ノ論議ヲ進ムルコト

(ロ) 内外ニ於ケル新資源ノ開發殊ニ濠洲、ピルマ、比律賓、ボルネオ
等、ニ於ケル積極的調査

探鑛ヲ行ヒ是等未知鑛床ヲ開發セシムルコト

(ハ) 低品位銅鑛ノ探鑛等ニ對スル保護政策ヲ強化スルコト

(ニ) アルミニウム等ノ他種金屬ヲ以テ代用ヲ行ルコト

(2) 地域別生産目標

(5)

| | 產額(昭和十三年) | 第一期年產額 | 第二期年產額 |
|-----|--------------|-----------|-----------|
| 本邦 | 七、七〇〇〇應 | 一〇,〇〇〇〇〇應 | 一〇,〇〇〇〇〇應 |
| 比律賓 | 五、四八六(昭和十四年) | 二〇,〇〇〇 | 二〇,〇〇〇 |
| 比呂馬 | 三、六〇〇 | 一〇,〇〇〇 | 一〇,〇〇〇 |
| 歐洲 | 一、九八六八 | 四〇,〇〇〇 | 四〇,〇〇〇 |
| 合計 | 一〇、五九五四應 | 一七、〇〇〇〇應 | 一七、〇〇〇〇應 |

(3) 製煉

山許製煉ヲ原則トスルモ比律賓ニ於テハ電氣製煉設備ヲ有セザル
 爲本邦ニ於テ之ヲ行フモノトス

(4) 所費資金

| | |
|---------|--------|
| 内地諸設備其他 | 一億五千萬圓 |
| 比律賓 | 一億圓 |
| 比呂馬 | 五千萬圓 |
| 歐洲 | 一億五千萬圓 |
| 合計 | 四億五千萬圓 |

{6}



五 開發方式

- (1) 國有民營ヲ原則トシ、國策會社經營方式ヲ避クルコト
- (2) 實力及經驗ヲ有スル專業商社ヲ指命シ地域別ヲ本體トシ之ニ組織ヲ加味シテ其ノ開發ヲ擔當セシムルコト、但シ廣域ナル經營ニ涉ルヲ以テ時宜ニ依リ受命者ヲ統制スル邊境ヲ考慮スルヲ要スベシ
- (3) 開發所費資金へ原則トシテ所費資材ト共ニ國家ニ仰グコトトシ其他動力、勞力等ノ統制、分配ヲ圓滑ニシ生産ノ高産能率ヲ發揮セシムルタメ強カナル綜合機關ヲ設置スルコト

以上

171



極秘

大東亞建設審議會第五部會

纖維部　　パルプ及紙關係

專門委員

高嶋　菊次郎

裏面白紙

一 開發ノ順位

高島

大東亞共榮圈内ニ於テ支那及南方諸地域ノ土産紙ヲ除キ洋紙類、板紙類及主トシテ我國ニ使用セララルル和紙類ノ供給力ハ薄葉紙及「クワット」紙ニ不足ヲ告グル以外、今日ノ消費規正ヲ勵行スルニ於テハ茲ニ、三年間ハ辛ウジテ供給シ得ベキモ、左記ノ通り煙草用紙其他ノ薄葉紙工場及「クワット」紙工場ヲ急設スル必要ガアル。

今日製紙ノ設備アルニ不拘供給力不十分ノ點アルハ搬送力不足ノ爲メ原料、石炭及諸資材ノ人手困難ニ起因シ、已ムナク操業ヲ制限シ居ルカラデアル。

特ニ印刷用紙類ノ生産ハ約四割方ノ減少ヲ餘儀ナクセララルル現状ニアル。

1、薄葉紙工場ノ増設

急速ニ工場ノ新設ニ着手シニ、三年間ニ抄紙機五臺位増設ノ必要アリ。

現代ニ於テ煙草ハ人類生活上不可缺ノモノトナツテ居ルコトハ何人モ異

①

論ナキ所デアル。

今次大戦勃發以前ニ於ケル共榮圈各地域ノ紙巻煙草ノ需給状態ヲ見ルニ、我國ヲ除キ他ノ諸國ハ相當多量ノ用紙ヲ輸入シテ、辛ウジテ需要ニ應ジテ居ル次第デアル。

然シテ煙草ノ需給ハ逐年増加シ、就中紙巻煙草ノ増加率ハ一層著シキ現状ニアル。之等需要ノ増大ニ答ヘ用紙ノ供給ヲ確保スルコトハ東亞諸民族安定ニ寄與スル所大ナリト信ズル。

次ニ近時電氣機械用絶縁紙ノ需要頓ニ増加シ、供給力之ニ伴ハザル現状ニ於テハ今後共榮圈内各産業開發ニ當リ電氣事業ノ發達ハ必然デアリ、亦「ラヂオ」ノ普及ニヨリ絶縁紙ノ需要ハ一層増加スベキハ疑ナキ所デアル、故ニ絶縁紙ノ供給力増強ハ一日モ忽諾ニ附シ得ナイ、尙此外ニ專賣局其他需要ノ多キ特殊薄葉紙ニ付テモ供給力ノ擴充ニ努力スル必要ガアル。

以上ノ如ク薄葉紙ノ増産ハ東亞諸民族ノ安定ニ資シ且亦産業開發ニ寄與

スルニ不可缺ナルヲ以テ早急増設ノ必要ヲ痛感スル次第デアル。

2、「夕ラフト」紙工場ノ増設

一、二年間ニ二、三萬噸ノ工場新設ノ必要ヲ認ム

從來主トシテ用ヒラレタル「増設ノ必要を認め、現在ノ工場は既に満員で、追加ノ工場を建設する必要がある。夕ラフト」、封筒用以外ニ砂糖、肥料、製粉等ノ包装用ガ濃カニ需要ヲ充タシ不得状態トナリ最近北海道及滿洲ノ二ヶ所ニテ都合四萬噸ノ工場、新設セララルニ至リシガ、今後益々増加スベキ大東亞總内ノ需要ヲ充タスコトハ困難ナルヲ以テ薄葉紙ニ次ギ且急南方ノ森林状態ヲ調査シテ適地ニ二、三萬噸ノ工場ヲ新設スルヲ急務ト思フ。

3、印刷用及新聞用紙工場

印刷用及新聞用紙類ハ現在ノ消費規正ヲ勵行セラルルニ於テハ現有設備ヲ以テ今後二、三年ハ日、滿、支ノミナラズ、廣ク共榮總内南方各地域ノ需要ヲ充タシ得ベキ見込ナルヲ以テ此間急速ニ且充分ニ南方資源ヲ調査シ然モ大東亞共榮總内ノ需給關係ト睨ミ合セテ資源ト地域トニ資源ノ

③

地點ヲ選ビ工場建設スルヲ肝要トスル。

一 産業立地

立地條件ハ他ノ事業ニ於テモ大体同様ノコトト信ズルガ、製紙事業ハ特ニ左ノ諸點ヲ充分研究シ之ニ適合セル地點ニ工場ヲ建設スル必要ガアル。

1、原料豊富ニシテ採集ニ便アリ、且恒久性アルコト

2、原料及製品ノ運輸ニ便ナルコト

3、水量豊富、且水質良好ナルコト

4、動力及燃料確保ニ便ナルコト

5、勞力ノ確保ニ便ナルコト

以上ノ見地ヨリ煙草用紙工場ハ原料トシテ麻類ヲ使用シ、且勞力、市場ノ關係等ヲ斟酌シテ支那、比律賓及布哇ニ分布設置スル要アリ

印刷用紙、新聞用紙及「タタフト」紙工場ハ豐富ナル森林資源ヲ必要トスル外多量ノ動力、燃料、硫酸、硫酸曹達、晒粉、石灰石等ヲ使用スル關係上資源調査ヲ充分ニシ以テ立地ヲ決定スルヲ最モ妥當トスル。

④

一 企業ノ方式

製紙技術及經營ニ多年卓拔セル經驗ヲ有シ、國家的ニ活動セル企業家ヲ
選ビ之ガ熱意ト創意トニ一任スル方式ヲ適當ト認ム。

一 資金、勞務、動力

(數字ハ總テ概算ヲ示セルモノナリ)

建設資金其他ハ設置場所及構造ニヨリ差異アルヲ免レザルモ多年ノ經驗
ト實狀ヲ考慮シ左記ノ如ク計出セリ。

一、薄葉紙工場(抄紙機一臺)

イ、年産能力 一、一五〇噸(日産三噸半)

ロ、建設費 三七六〇〇〇圓

ハ、流動資金 建設費ト約同額

ニ、主ナル建設資材

鐵材 八〇〇噸

「セメント」 二二〇〇噸

裏面白紙

球、動力

三、四〇「キヨウツト」

燃、料

二、五〇〇噸

石炭

ト、原料
（但自家發電ノ場合ハ合計五三〇〇噸ヲ要ス）

二、八〇〇噸

主ナル藥品

一、二〇噸

職、勞務

四、二〇人
噸當 一、三〇人

内、譯

三、四〇人

男、工

八〇人

⑥

裏面白紙

右ノ内

内地人 四〇人
土着人 三八〇人

但シ土着人ノ素質ニヨリ増減アルベシ

2、「シラフツト」紙工場

イ、年産 二〇〇〇〇噸（日産六〇噸）

ロ、建設費 一五〇〇〇〇〇〇圓

ハ、流動資金 建設費ノ約六、七割

ニ、主ナル建設資材

鐵材 五六〇〇噸

「セメント」 六六五〇噸

ホ、動力

三六〇〇「セメント」

ヘ、燃料

⑦

石炭 四〇〇〇噸

(但シ自家發電ノ場合ヘ合計六〇〇〇〇噸ヲ要ス)

ト、原料

原料木材 三六〇〇〇〇石

テ、主ナル藥品

硫酸曹達 三六〇〇噸

リ、勞務

職工數 九〇〇人 噸當 一五人

内譯

男工 七七〇人

女工 一三〇人

右ノ内 九〇人

内地人 八一〇人

土着人 八一〇人

但シ土着人ノ素質ニヨリ増減アルベシ

⑧

印刷用紙工場

イ、年産 一〇〇〇〇噸 (日産三〇噸)

ロ、建設費 九〇〇〇〇〇圓

ハ、流動資金 建設費ノ約四、五割

ニ、主ナル資材

鐵材 三三〇〇噸

「セメント」 三三〇〇噸

水、動力

電力 九〇〇「キロワット」

ハ、燃料

石炭 一四〇〇噸

(但シ自家發電ノ場合ハ合計二〇〇〇噸ヲ要ス)

ト、原料

原料木材 一八三〇〇石

⑦

裏面白紙

子、主ナル薬品

硫黄粉 一、一〇〇噸
粉務 一、五〇〇噸

職工數 三九〇人（噸當一三人）

内譯

男工 三三〇人

女工 六〇人

右ノ内

内地人 四〇人

土着人 三五〇人

但土着人ノ素質ニヨリ増減アルベシ

新開用紙工場

年産 一七〇〇〇噸（日産五〇噸）

建設費 一三〇〇〇〇〇〇圓

⑩

ハ、流動資金 建設費ノ役六、七割
ニ、主ナル建設資材

鐵材 四〇〇〇噸
「セメント」 四五〇〇噸

水、動力 力 五五〇〇「キロワット」

燃 料 石 炭 一七〇〇噸

（但シ自家發電ノ場合ハ合計二五〇〇噸ヲ要ス）

ト、原料 原料木材 一八七〇〇〇石

チ、藥品 硫 黄 五〇〇噸

リ、勞務

⑪

職工數 五〇〇人（噸當一〇人）

內譯

男工 四五〇人

女工 五〇人

右ノ内

内地人 五〇人

土着人 四五〇人

但土着人ノ素質ニヨリ増減アルベシ

一、運輸

工場建設ニ當リ之ガ資材ハ極力現地ニ於テ調達スルヲ便利トスルモ機械類ハ我國ニテ製作シ輸送スル外ナシ、次ニ工場運輸ニ際シ原料、燃料、諸藥品及製品ノ輸送ハ元來資源ト市場關係トヲ充分調査研究ノ上、工場設置セルヲ以テ一部ヲ汽船ニ依ル以外ハ機帆船乃至陸送ニテ辨ジ得ベシ

②

一 資源ノ開發

木材

「パルプ」原料トシテ最も重要ナルモノハ木材デアル。然ルニ、大東亞共榮圈ノ北方地域ニ於テハ、樺太、北海道及内地ハ既ニ今日以上利用ノ余裕ヲ有セズ、只朝鮮及滿洲ニ於テハ尙若干供給余力アリ。現ニ製紙工場ノ新設目論マレ居ルモ、之トテ將來ハ兎ニ角差當リハ同地ニ於ケル木材需給並ニ伐木事業ノ現狀カラ見テ、大ナル期待ハ出來ナイ様デアル。尤モ滿洲ノ大興安嶺ニハ落葉松ノ大森林ガアルガ、其地理關係ヨリ當分ノ間ハ開發利用ノ可能性ガ乏シイ。支那大陸ニ於テハ、北、中支ニハ殆ド森林ガ無イト言ツテモヨロシク、南支ニハ福建、廣東、廣西地方ニ廣葉杉、馬尾松ノ相當ノ大森林アリ、將來「パルプ」原料トシテ開發ノ有望性ハ存シ居ルモ、是亦治安ノ定マラザル現在ノ狀態ニアリテハ、其實現ハ容易デナイ。

如上ノ次第ナルヲ以テ、爰ニハ大東亞ノ「パルプ」資源トシテ、主トシテ南方地域ノ森林資源ノ事情ニツイテ述ベテ見ルコトニスル。尙一言シタキハ沿海州、北樺太地方ノ森林ニシテ、「パルプ」原料トシテ最良ナル、エゾ松、トマ松ニ富ミ、將來之ヲ利用シ得ル時機來レバ、大東亞ノ「パルプ」資源ニ變革ヲ來スコトナルモ、爰ニハ暫ク言及シナイコトニスル。

南方森林ノ「パルプ」資源

南方熱帶地域ニハ廣大ナル原生林存在スルモ、之ヲ「パルプ」原料トシテ利用スル上ニ於テ、未ダ遺憾ナガラ充分ナル實地調査ガ行ハレテ居ナイ。

南方諸地域ニ於テ需要スル紙類ハ將來相當ノ大數量ニ上ルベク、コレハ南方資源ヲ開發シテ其供給ヲ圖ルコトガ原則ト考ヘラル、カラ、是非共至急南方森林ニ對シ、「パルプ」工業ノ立場ニ於テ其具體的調査ヲ行フコトガ緊要デアル。

然シ乍ラ爰ニ從來調査セラレタ資料ニヨツテ、南方森林ノ「パルプ」資

源トシテ概念ヲ述ブレバ次ノ通りデアル

(一) 南方熱帯林ノ分布及特徴

南方各地、就中「スマトラ」、「ボルネオ」、「ニューギニア」、「フィリッピン」、「マレー」、ノ殆ド大部分及錫印ノ南部、泰、「ビルマ」ノ北部等ニハ孰レモ廣大ナル原生林ガ分布シ、試ミニ其面積ヲ擧グレバ

| | |
|----------|------------|
| 「フィリッピン」 | 一八八二〇〇〇〇町歩 |
| 「ボルネオ」 | 四九四〇〇〇〇〇〇 |
| 「スマトラ」 | 二九六〇〇〇〇〇〇 |
| 「マレー」 | 九四一七〇〇〇〇 |

ノ如キ老大ナル面積ニ達シテ居ルガ、其大部分ガ熱帯圏内ニ屬シ、高濕多濕ノ氣候ニ支配セラレテ、大体ニ於テ酷似シタ森林状態ヲナシテ居ル。

即チ此等森林ノ特徴ヲ擧グレバ、熱帯林ノ常トシテ、

一、針葉樹モ無キニ非サルモ、概シテ高地ニ生ジ其量ハ多クナイ。



三大部分ハ常緑闊葉樹林デ樹種極メテ多ク此等ガ雜然ト混生シテ
キル。

即チ北方森林ノ如キ單純林ガ少ク、又針葉樹モ少ク、此點ガ「パ
ル」資源トシテ利用價值ヲ減ズル。

尙森林面積ガ余リニ老大デアリ、且運輸機關ガ關ケテ居ラヌ爲搬出
不便デ利用出來タ地域モ非常ニ廣イ。

(二) 針葉樹

針葉樹ノ纖維ハ製紙「パルプ」原料トシテ最モ優秀デアル。

南方地域ニモ十數種ノ針葉種ガアルガ其主ナルモノヲ擧グレバ

「スマトラ」松 (*Pinus Merkusii*)

「インシユラリス」松 (*Pinus Inularis*, *Pinus Khaya*)

馬尾松 (*Pinus Massoniana*)

「コパール」樹 (*Agathis alba*)

南洋杉 (*Araucaria Bidwillii*)

等デ孰レモ「パルプ」ノ製造ニ適シテ居ルガ、遺憾ナガラ前述セル
通り、概シテ高地ニ生シ其蓄積モ多クナイ。

然シ乍ラ佛印、「スマトラ」、及「ワイリツピン」ニハ相當總ツタ面積

ノ純林ヲナシ且伐採搬出ニモ便利デ直ニ工業原料トシテ利用可能ノモ
ガアル。

即チ

- (一) 佛印南部「ダラツト」ノ松林 (面積約十三萬町歩)
 - (二) 「スマトラ」北部「アヂエ」州ノ松林 (五萬町歩)
 - (三) 「スマトラ」東海岸「ダバヌリ」州ノ松林 (五萬町歩)
 - (四) 「フイリツピン」島ノ松林 (數萬町歩)
- (二) ハ舊蘭印政府ガ之ヲ原料トシテ資本金七百五十萬盾ヲ以テ「パ
ルプ」工場ノ設立ヲ企テ、工場ヲ其附近ノ *Johi* 若シクハ *Schokken*
Mawie ニ建設セントスル計劃ヲ進メツツアツタ様デアル。
- 右ノ外、佛印ノ北部ニモ松林ガアルガ搬出不便デ利用困難デアル。
然シ乍ラ南洋地方ノ松樹、特ニ「タルクシ」松ハ松脂ノ採取ニ
適シ、今日我國ニ於テ、松脂ノ増産自給ガ極メテ緊要ナル現狀ニ
アリテ、前記松林ノ内松脂ニ適スルモノハ先ツ其採取ヲ行ヒ、而



テ後其廢木ヲ「パルプ」ニ利用スルコトモ大イニ考慮シナケレ
ハナラヌ問題デアル。

樹「ニユーギニア」及「セレベス」ニハ「コパール」樹、又「ニ
ユーギニア」ノ高地ニハ南洋杉ガ相當多量ニアル模様ナルモコレ
ハ調査不充分テ詳況不明デアル。

潤葉樹

南方熱帯林ノ大部分ハ既述セル通り潤葉樹林デ、極メテ多數ノ樹種
ハ歐材ヨリ硬材マデ、白色ヨリ黒褐色マデガ相混淆状態モ場處ニ
ヨリ一様デナイ。

元來潤葉樹ハ針葉樹ニ比スレバ、纖維短ク製紙「パルプ」トシテ不
利ナルヲ常トシ、且材質堅硬着色セル爲メ蒸解、漂白ニ困難ナルモ
ノ多ク、從テ其利用ヲ制限サルル場合ガ多イ。

然レ共、其多數樹種中ニハ蒸解漂白共ニ容易テ纖維状態モ良ク、製
紙及人絹「パルプ」ノ製造ニモ適スルモノ少クナイ様デ、當社ノ研

(18)



究所ニ於テ試験セル結果ニヨルモ利用可能ト認メラルモノ尙十數種ニ達シテ居リ、概言スレバ淡色軟材ハ亜硫酸法ニヨリテ處理容易ネルヲ常トスル。

然ルニ茲ニ現存林ノ利用ニ際シ當面スル最モ困難ナル問題ハ、前述セル如ク此等原生林ハ極メテ雜多ノ樹種カ混生セルタメ、其内ヨリ「バルブ」適材丈ケヲ選抜集收シナケレバナラヌコトデアリ、從テ工場ノ建設ニ當ツテハ充分此點ヲ考慮シ先ヅ其資源林ニ付詳細ナル調査ヲ行フ必要ガアル。

然シ乍ラ一面ニ於テ「バルブ」製造ノ技術モ進歩シ、最近ノ研究ニヨレバ硫酸法ニヨリ處理スルトキハ、潤葉樹カラモ比較的優良ナル、「タラフトバルブ」ガ得ラレ、又之ヲ漂白スレバ印刷紙及人絹「バルブ」モ得可ク、且同法ニヨレバ或程度ノ着色、堅硬材モ蒸解シ得ルノデ、亜硫酸法ノ場合ニ比スレバ遙ニ利用可能ノ樹種ト材積ヲ増加シ得ル譯デアリ、今後更ニ技術的研究ニヨリ熱帶濶葉樹モ

次第ニ其有用性ヲ増進スルモノト信ズル也

四「バルブ」適樹ノ造林

南方熱帯林ニハ針葉樹少ク、潤葉樹モ多數種類混生シ、「バルブ」材トシテ利用ガ制限サルルコトハ前述ノ通りデアアル。

然ルニ熱帯地方ハ凡テ熱ト光ト雨量ノ天恵ヲ有シ、林木ノ生長ハ驚クベキ程迅速デアアルノデ、南方ノ「バルブ」工業ヲ考ウル上ニ於テ「バルブ」適樹ノ造林ヲ行ヒ、針潤葉樹共ニ其單純林ヲ造成スルコトハ極メテ緊要適切デ忽諸ニ附スベカラザル問題デアアル。

即チ針葉樹ニアリテハ既述セル、「スマトラ」松、「インシユラリ」ス「松」、「コパール」樹等ハ最モ有望ナルモノデ、舊蘭印政府ノ研究試験ノ結果ニヨレバ孰レモ人工造林ニ適シ其生長亦迅速デアアル。其造林地ハ稍高地ヲ適當トスルガ、南方各地ニ涉ツテ其ノ適地ノ選定ハ困難デナイ。殊ニ現存針葉樹林ヲ伐採シタ場合ニハ其跡地ニ必ズ造林ヲ行ヒ、以テ資源ノ保續ヲ圖ルベキデアアル。

潤葉樹ニ於テハ當社ハ夙ニ其研究ニ努メ昭和十三年以來帝國森林會ニ委囑シ試験費ヲ負擔シ、舊英領「ボルネオ」ニ於テ造林試験ヲ行ヒ優秀ナル成績ヲ收メテ居ル。

即チ「バルブ」適樹デアル、「ビノアン」(Bineang)「カランバーヤン」(Kalanjayang)ノ如キハ植付後僅二年半デ直径十六糎、樹高十二米突ニ達シ、優ニ内地赤松ノ二十年生ニ匹適スル状態デアツテ、工場計畫ト同時ニ其植林ヲ行ヘバ、七八年後ニハ直径一尺以上ニ達シ、「バルブ」原料トシテ充分伐採利用ニ足ルベク、「フィリツピン」、「ジャワ」、「スマトラ」、「ボルネオ」、等何處ニ於テモ其造林ハ容易デアル。

結論

上述セル如ク、南方森林ノ「バルブ」資源ノ開發ヲ爲スニハ先ツ現存針葉樹林ノ利用ヲ圖リ次テ潤葉樹ニ及ブベキデアルガ、何ト云フテモ其森林状態ノ詳細ニ付調査ガ不充分デアルカラ、差當リ直ニ「バルブ」資源探究ノ目的ヲ以テ其具体的調査ニ着手スルコトガ緊要デアル。

同時ニ「バルブ」適樹ノ造林ガ肝要デアツテ、直ニ實行スレバ數年ニシテ之ヲ利用スルコトガ出來ル。

ニ 其他ノ資源

(一) 「バガス」
 「バルプ」原料トシテ、「バガス」(蔗糖ノ搾粕)モ木材ニ次デ重要デアル。
 臺灣ニ於テハ既ニ「バガス」ヲ原料トスル「バルプ」工場ガ設ケラレ、當社ニ於テモ研究ノ結果、硫酸鹽法ニヨリ優良ナル「フトラ」紙ヲ製シ得ル確信ヲ得目下臺灣製糖會社ト協力シテ工場ノ建設中デアル。

東亞共榮圈ニ於ケル砂糖及「バガス」ノ年産額ハ

| 日 | 本 | 砂糖産額 | 「バガス」産額 |
|----------|----------|------|----------|
| 「フイリツピン」 | 一三〇〇〇〇〇〇 | 應 | 一九〇〇〇〇〇〇 |
| 「クニヤ」 | 一〇〇〇〇〇〇〇 | 〇 | 一五〇〇〇〇〇〇 |
| 「ジャワ」 | 一六〇〇〇〇〇〇 | 〇 | 二四〇〇〇〇〇〇 |

今後「フイリツピン」「ジャワ」ニ於ケル砂糖ノ生産ハ減少スル

(22)



モノト思ハル、ガ假ニ「フイリツピン」五十万噸「ジャワ」百万噸、合計百五十万噸トスレバ其「バガス」ノ産額ハ二百二十五万噸トナル。

然シ乍ラ「バガス」ハ從來燃料其他ニ使用サレ居リタル關係上、其全部ヲ「パルプ」ニ振向クルコトハ不可能ナルベキモ、燃料用ニ余裕アリテ其一割ニ十二万噸ヲ利用スルトシテ、コレヨリ約七万噸ノ「パルプ」ヲ生産シ得可ク、今後南方ニ於ケル「パルプ」資源トシテ「バガス」モ看過シ得ザルモノデアル。

(二) 竹 類

竹モ南方地域ニ於ケル重要ナル「パルプ」資源デ現ニ佛印、及泰ニハ之ヲ原料トスル「パルプ」工場ガアツテ、各年産四千噸ノ紙ヲ製産シテキル。

竹類ハ佛印、泰、「ビルマ」、「フイリツピン」、地方ニ繁茂シ竹林ノ面積ハ大体次ノ如ク推定サレル。

佛 印
 四〇〇〇〇町歩
 三〇〇〇〇町歩
 二五〇〇〇町歩
 一五〇〇〇町歩

「ビニラ」
 「マニラ」
 「フィリツピン」

右ノ面積カラ毎年多量ノ竹材ガ産出サレ、今後更ニ竹「パルプ」増産ノ余地ガアルガ、只現在ノ製法ニ於テハ苛性曹達蒸解ヲ行セ其結果生産スルコトニ於テ不利ナルノミナラズ藥品ノ入手モ困難ノ現状デアリ、竹「パルプ」製造ニハ今後技術的研究ガ必要ト認メラル。

「尚竹」
 「パルプ」ハ製紙ニ際シ約二割位ノ木材「パルプ」ヲ混入スル必要ガアル。

(三) 「マニラ」麻
 「フィリツピン」
 「北ボルネオ」、蘭印ニ於ケル「マニラ」麻ノ年産額ハ從來約十七万噸ニ達シ、今後著シク生産過剰ノ見込デア



リ、其屑麻ヲ製紙「パルプ」トシテ利用スルコトモ大ニ考慮研
究ノ必要ガアル。

(四) 其他各種ノ藻類、稻藁、苧、其他ノ藪皮モ各特殊ノ用途ニ利用サ
ル、可能性ガアリ其研究ノ必要ガアル。

一 技 術

紙及「パルプ」用原料木材トシテ南方森林ノ開發ハ蓋シ一般ノ趨勢
ナルガ南方ハ北方ノ林相ノ如ク針葉樹ノ單種林ニアラスンテ、多種
類ノ混合林ナリ。然モ針葉樹少ク潤葉樹多キヲ以テ之ガ利用ニ重
點ヲ置ク必要アリ。潤葉樹ノ「パルプ」化ニハ「硫酸鹽法」ノ採
用ヲ適當トス、從來木材ノ「パルプ」化ニハ「亞硫酸法」ヲ多ク採用
シタルモ南方ノ如キ多種ノ木材ヲ混用スル場合ニハ技術的ニ觀テ
硫酸鹽法ヲ採用スルヲ得策トス

以 上

25



極秘

昭和十七年六月

大東亞共榮圈內輕金屬事業建設ニ關スル意見

専門委員 大 屋 敦

裏面白紙

大東亞共榮圈內輕金屬事業建設ニ關スル意見

一、生産數量

アルミニウムノ現生産計畫ハ日滿支ヲ通シ一ケ年一五〇、〇〇〇應ヲ
目標トセルニ對シ新ニ昭和十八年以降(イ)五ケ年計畫ニ於テ之ヲ三五〇、
〇〇〇應ニ(ロ)一五ケ年計畫ニ於テ八〇〇、〇〇〇應ニ擴張スル計畫ヲ
樹立遂行セントスルモノナリ

右數量ハ獨、米ノ生産計畫ニ於テ前者カ近ク年産五〇〇、〇〇〇應ヲ、
後者カ同上七五〇、〇〇〇應ヲ實現セントセルニ對シ不十分ノ憾ミナ
キニ非サルモ(イ)五ケ年間ニ二〇〇、〇〇〇應、一ケ年平均四〇〇、〇〇〇
應ノ擴張計畫ハ現在ニ於ケル電力竝ニ資材供給ノ狀況ニ照ラシ一應實
現可能ノ最大限ト爲スヘキト同時ニ現下ノ皇軍作戰ニ鑑ミ其ノ最少限
ノ要求ヲ充タスヘキ數量ト認ムルモノニシテ、若シ電力、資材等ニ此
以上ノ供給ヲ受ケ得ル見込アラハ生産計畫ハ更ニ擴張セラルヘキモノ
ナリ(ロ)一五ケ年間ニ八〇〇、〇〇〇應、即チ最後ノ一〇ケ年間ニ四五
〇、〇〇〇應ノ擴充ヲ爲スコトニ付テモ亦同様ニシテ、特ニ大東亞共
榮圈內ニ於ケル銅資源ノ不十分ナルニ對シアルミニウムヲ以テ其ノ代



用ニ充ツヘキコトヲ考フル場合、過少ノ憾ミナキヲ得サルモノアルモ主トシテ實現可能ノ最大限ト國防上要求セラル、最少限ヲ目標トシテ一應ノ計畫ヲ立テタルモノニシテ、從ツテ以上ノ數量ハ絶對ニ其ノ實現確保ヲ必要トスルモノナリ

ニ工場立地

以上ノ生産計畫ハ之ヲ内地、臺灣、朝鮮、滿洲、北支及南方ノ六地域ニ分チ左ノ通り配分實施スルヲ適當ト考フ

| 地域 | 第一期 (二〇〇,〇〇〇 吨) | 第二期 (四五〇,〇〇〇 吨) |
|----|-----------------|-----------------|
| 内地 | 五〇,〇〇〇 吨 | 七〇,〇〇〇 吨 |
| 臺灣 | 一〇〇,〇〇〇 | 一五〇,〇〇〇 |
| 朝鮮 | 一〇〇,〇〇〇 | 一五〇,〇〇〇 |
| 滿洲 | 一〇〇,〇〇〇 | 一五〇,〇〇〇 |
| 北支 | 一〇〇,〇〇〇 | 一五〇,〇〇〇 |
| 南方 | 五〇,〇〇〇 | 三〇,〇〇〇 |
| 合計 | 二〇〇,〇〇〇 | 四五〇,〇〇〇 |

註 本表ノ數字ハ五ヶ年、一五ヶ年計畫トモ夫々新ニ増加スル數量ヲ示スルモノナリ

右ハ電力ノ供給ヲ主トシ之ニ原料其ノ他ノ關係ヲ配シテ計畫シタルモ
ノナリ、南方カ電力竝原料ノ供給ニ於テ最モ惠マル、ニ拘ラス日滿支
ニ於ケル増産ヲ南方ノソレニ併進セシメントスルハ大東亞共榮圈ヲ打
ノテ一丸トスル經濟的見地ト全盤ニ對スル防衛ノ完璧ヲ期セントスル
國防的見地トニ出ツルモノナリ

成品タルアルニテ原料所在地ニ於テ製造シ之ヲ電力所在地ニ搬送
テ電解スル計畫ハ當然考フヘキ所ニシテ、特ニ北支鑛土頁岩ノ如キ
鑛ニ對シ適切ナルモノアルヘシ、前表五ヶ年計畫中北支ニ於テアル
チ四〇〇〇〇〇噸ヲ製造セントスルハ右ノ方針ニ基クモノニシテ、
アルニテハ滿鮮ニ搬送シテ電解セシムヘク、又一五ヶ年計畫ニ於テ
朝鮮、滿洲ノ割當數最ノ一部ハ鑛土頁岩ニ依ル計畫ナリ

甲 原鑛石資源ノ開發ニ付

アルニテニウム工業ニ對シ最モ重要ノ關係ヲ有スルモノハ電力ト原料
ニシテ、ボトキサイト資源ニ對シテハアルニテニウム工業トノ間ニ特
ニ密接ナル連絡ヲ保タシムル必要アリ、ボトキサイトノ殆ント全部
カ南洋遠隔ノ地域ニ存スル以上、之ヲ一般鑛業ノ一部門トシテ之ニ

(三)



開發ヲ托スルハアルニシテ工業ノ健全ナル發達ニ支障ヲ來ス虞アリトナスヘク、此ノ際適當ノ方法ヲ設ケアルニシテ工業ヲシテ其ノ開發ニ干與セシムルカ、少クトモ極メテ緊密ナル連絡ノ下ニ其ノ開發ヲ計ルノ必要アリ、且ツ南洋諸地方ニ存スル煤ト石油ト鐵區ハ各其ノ所在地ヲ異ニスルニ從ヒ自ラ開發條件ヲ異ニスルモノアルヘキヲ以テ其ノ間統制アル連絡機關ヲ設ケテ一元的開發ヲ計ルノ要アルヘク彼是相待ツテアルニシテ工業ノ必要トスル原料補給ノ目的ヲ達成スルト同時ニ鐵石ノ溢掘ニ依ル重要資源荒廢ノ憂ヲ防遏スルニ努メサルヘカラス

北支方面ノ礬土頁岩其ノ他ノ近接地域ニ於ケル原料ニ付テモ大体同一ノ方針ニ依リ其ノ開發ヲ計ルヲ要スヘシ

乙 アルニシテ工業ニ付

アルニシテ工業ノ第一次生産計畫ニ於ケル企業形態ハ聊カ統制ヲ缺キ無秩序ニ流レ爲メニ現在ノ各社工場設備ハ雜多ニシテ其ノ能力ノ十分ニ發揮セラレサル憾ミアリ、之カ統一ノ必要ヲ認メシムルモアルニヨリ今後ノ生産計畫ノ遂行ニ對シテハ此點ニ付豫メ十分ノ

用意ヲ整フル必要アリ、全生産ヲ一、二ノ地點ニ集中シテ餘リニ大規模ノ工場ヲ設クルハ技術上、經營上却ツテ不利ナル事情アルヲ以テ適當ノ經營單位ニ依リ適宜ノ地點ニ分散セシムルコトヲ計ルト同時ニ各企業間ニ十分ナル連絡統制ヲ保ツノ必要亦大ナルモノアリ、特ニ南方ニ設クル工場ハ其ノ特殊ノ事情ニ鑑ミ本邦全アルミウム工業ヲシテ共同シテ一會社ヲ設立セシメ之カ經營ニ當ラシムルコト必シモ不可ナラス、蓋シ現在アルミウム工業ニ従事スル各會社間ニハ技術ノ交流遺憾ナク行ハレ殆ント共通ノ技術的水準ニ在リト認めラル、ヲ以テ南方ニ對スル合同企業ノ合理的ナルヲ感スルモノナルモ、若シ數社ヲシテ分擔經營セシムルコト、ナラハ各會社ニ付技術並經營ニ關シ特ニ優レタルモノヲ嚴選シテ之ニ當ラシメサルヘカラス、彼ノ先願者優先ノ如キハ最も避クヘキモノト考フルモノナリ

四 資金、資材、勞務、動力、運輸ノ關係

以上ノ計畫ノ遂行ニ對シテ必要トスル資金、資材、勞力、運輸等大體之ノ如キ見込ナリ

| | 第一期 (二〇〇,〇〇〇應) | 第二期 (四五〇,〇〇〇應) |
|----------------|-------------------------------------|----------------|
| 資 金 | 七七〇,〇〇〇千圓 | 一,七五〇,〇〇〇千圓 |
| 建設用資材 〔銅鋼材〕 | 三三〇,〇〇〇應 | 七二〇,〇〇〇應 |
| 勞 務 者 | 二四,〇〇〇人 | 四五,〇〇〇人 |
| 電 力 | 電力量 五,四〇〇,七〇〇千kw時 設備發電力約 七〇〇千kw時 | 一三,二〇〇,五七〇千kw時 |
| 輸 送 (海上) | 二,〇〇〇,〇〇〇應 | 四,五〇〇,〇〇〇應 |

資源對策

甲 電力

本計畫ニ依ルアルニウムノ生産ニ對シテハ尨大ナル電力ノ供給ヲ前提要件ト爲シ、之ガ開發ニ付テハ特別ノ考慮ヲ要スルモノアリ、而シテ電力供給ノ用意ハアルニウムノ生産計畫ノ根本的條件ヲ爲スモノニシテ一切ノ計畫ニ先チテ解決スルノ必要アリ出來得ル限り



急速ニ着手シ實現スルヲ計ラサルヘカラス

本邦内地ノ電力ハ尙開發ノ餘地アリトスルモ其ノ需要極メテ廣汎ニシテアルニシテ向ケ得ル量ハ少シト認メサルヘカラスアルヲ以テ本計畫ニ依ルアルニシテ用電力資源ハ之ヲ朝鮮、臺灣、滿洲及南方ニ求めサルヘカラス、南方ニ於ケル計畫ニ對シテハアルニシテ製造ノ如キ高級化學工業ヲ起スニ付氣候其ノ他不利ト認ムヘキ事情少ラスト爲ス説モアルヘシト雖モ南方電力ノ開發ハ朝鮮及滿洲ト異リ巨大ナル堰堤ヲ建設スルノ要少ナカルヘキヲ以テ資材及工事期間ヲ節約シ得ル利益アリ生産擴充ノ急速實現上、是非トモ遂行ノ必要アリト認ムルモノナリ

南方ニ於ケル發電所建設促進ノ方策トシテハ此ノ際國ノ資本ヲ以テ遂行シアルニシテ事業ノ起點ト別備ニ適當ノ擔當者ヲ選ビテ最先ニ着手セシムルコトヲ要ス

乙 主 原 料

アルニシテ製造ノ主原料ハ製造方法ノ簡易ナルニシテ其ノ採掘トモ容易ナル第一トスヘク今次計畫ニヨリテ確保セラレタルビシク



地質學的ニ同一ノ構成ヲ示ス南方地域ニ對シテハ更ニ資源ノ探求ト
 開發ヲ圖ルノ必要アリ、之ト同時ニ滿洲特ニ北支ニ多量ニ存スル礬
 土頁岩朝鮮ニ存スル明礬石及霞石内地ニ存スル明礬石、福礬土等ノ
 低品位礬石ノ利用ヲ計ルコトモ亦國防上其ノ必要ヲ認ムルモノニシ
 テアルニシテ、生産計畫中ノ相當部分ハ此等資源ノ處理ニ俟ツヘキ
 モノト考フ、但シ此等礬石ノ處理方法ニ付テハ特ニ慎重ナル研究ヲ
 遂クルノ必要アリ、技術ノ用意不足セル輕卒ナル企業ハ資源並資材
 ノ冒瀆トシテ此ノ際最モ慎重ムヘキ所ト認ム

丙 丙 原 料

アルミニウム製造用副原料ノ主ナルモノハピツチコロシス及弗化物
 ニシテ尙苛性曹達モ缺クヘカラサル關係アリ
 (1) ピツチコロシスハ製礬工業及瓦斯工業ノ副産物タル石炭ピツチト
 石油ノ精製ニ依ツテ生スル石油ピツチヲ主ナル資源トナシ其ノ供
 給自ラ制限セラル、ヲ以テ巨大ナルアルミニウムノ生産計畫ニ對
 (八)



シテハ之カ供給確保ヲ圖ルト同時ニ石炭中ノ灰分ヲ除去シテ優良
ノコイシ夕スヲ製造スル等別個ノ對策ニ付研究ヲ遂クル必スアリ
弗化物一水晶石及弗化アルミニ付テハ其ノ原料タル螢石
ノ生産ヲ確保スル必スアリ滿洲及北中支ノ資源ノ急速ナル開發
ヲ要ス

(ハ) 苛性曹達ノ製造ニ對シテハ先ツ以テ製鹽事業ノ擴充ヲ計ルノ要アリ
リ、滿洲及北支ニ於テ實施セラレツ、アル所ノ外中支及南方鹽田
開發ノ必スアリト考フ

六 技術關係

上記ノ如ク、
ル技術ハ尙改良ノ餘地アリトスルモ相當信頼シ得ル程度ニ發達ヲ遂ケ
タルヲ以テ各社ノ技術ヲ綜合スルニ於テハ今次ノ計畫實施ニ對シ遺漏
シキヲ期スルヲ得ヘシ
岩土質若其ノ他ノ資源ヲ利用スル方法ニ付テハ尙技術上ニ研究ヲ要ス
ル餘地頗ル多ク從來ノ研究程度ニ付テハ極力適切ナル製造技術ノ
完成ヲ計ルヲ要スヘシ

(九)



マダガスカル

甲 生産数量

現計畫ニ依ルマダガスカルノ生産数量ハ本邦及滿洲ヲ通シ一ヶ年約
 一五、〇〇〇應ニ目標トセルニ對シ、昭和一八年以降(一)五ヶ年計畫
 ニ於テハ之ヲ六〇、〇〇〇應ニ(二)一五ヶ年計畫ニ於テハ一五〇、〇
 〇〇應ニ擴充スルノ必要アリト認ム

乙 工場立地

マダガスカルノ生産計畫ハ内地、臺灣、朝鮮及滿洲ノ四地域ニ於テ
 實施スヘク支那及南方ハ原料ノ關係上不適當ノ地アリ、而シテ電力
 並ニ原料ノ二點ニ亘リ將來最モヨキ工場立地無件ヲ具備スルモノハ
 朝鮮及滿洲ニシテ五ヶ年、一五ヶ年兩計畫ヲ通シ生産ノ主力ハ此等
 兩地域ニ於テ實現セラルヘキモノト認ム

丙 開發企業ノ方式及權限

マダガスカルノ製造事業ハ多數ノ小規模企業ニ分レ其ノ間連絡統制ヲ
 欠キ重要工業ノ達成上遺憾トスヘキモノ尠ラス今後ノ擴充計畫ニ對
 シテハ企業ノ方式並ニ權限ニ對シ十分ナル留意ヲ整フル必要アリ

(10)



丁 資源對策

(1) 電力
 力マダネシウム一應管リ三五、〇〇〇キロワット時トシ
 テ六萬應ニ對シテハ二億キロワット時即設備電力約三〇萬キロ
 ワット、一五萬應ニ對シテハ五二億五千キロワット時即設備電
 力約七五萬キロワットトヲ要ス之カ供給ハ一部内地及臺灣ニ於テ之
 ラ求ムルコトヲ得ヘキモ大部分ハ朝鮮及滿洲ニ仰ク外ナク其ノ開
 發ニ付テハアルミニ對スルモノト一括シテ解決ヲ望ム

(2) マグネサイト
 マグネサイト鐵ハ朝鮮及滿洲ニ殆ト無盡蔵的ニ良
 質ヲ存シマダネシウム原料トシテ何等不安ナシト雖モ同鐵ハ他ニ
 耐火材料其ノ他種々ノ用途アルヲ以テ之カ開發ニ對シテハ一定ノ
 計畫ヲ立テ資源ノ有效利用ニ遺憾ナキヲ期セサルヘカラス

(3) 副原料
 苦汁ハ製鹽業ノ副産物ニシテ相當ノ供給ヲ期待シ得
 ルモノヲ主原料トスルハ大量生産ニ對シテハ不適當ト認ム
 食鹽ハ鹽業ノ補給資源トシテ必要ナルヲ以テ之カ生産ハ十分ニ實
 現セラル、コトヲ要シ、大体マグネシウム一應ニ對シ二應ヲ要ス
 ル見込ナリ

(一一)



戊 技術關係

マグネシウムの製造方法ハマグネシウムニ鹽素ヲ反應セシメテ鹽化マグネシウムトナシ之ヲ電解スルモノ現在我國ニ於テ最モヨク發達セルカ其ノ後最近ニ至リ海水ニ石灰ヲ作由セシメテ水酸化マグネシウムヲ回收シ之ヲ鹽化スル方法、マグネシウム製法ニ鹽素ヲ反應セシメテ鹽化マグネシウムヲ製造スル方法、マグネシウム炭素ヲ以テ高熱還元スル方法等工業的ニ實施セラレ今後ノ進歩發達ヲ期待セラル、モノアルモ全体ヲ進シ製造技術ニ尙研究ノ餘地多ク今後ノ計畫ニ關シテハ十分ナル用意ヲ整フルノ必要アルヲ認ムルモノナリ

(一三)

極秘

昭和十七年六月

大東亞共榮圈内化學工業建設ニ關スル意見

専門委員 大 屋 敦

裏面白紙

大東亞共榮國內化學工業建設ニ關スル意見
一、生産數量

化學工業建設ノ數量的計畫ハ全工業ガ主トシテ充足的物資ヲ生産スル關係上大東亞共榮國內ニ於テ總計其ノ他基本物資工業ノ建設計畫樹立セラレ又食料及衣料問題ヲ中心トスル大東亞農林政策確立セララルヲ俟チ始メテ之レヲ檢討決定スベキモノナルヲ以テ茲ニハ之等物資ニ關スル生産數量ノ目標ニ列レズ

但日滿支ツ國ツクニ於ケル食糧自給ニ關聯シ全ブ回ツク内化學肥料ノ生産増充ニ付テハ今日ヨリ十分ノ考慮ヲ必ズトスルモノナルヲ以テ此際十五年計畫中重要物資トシテ其ノ増産對策ヲ講ズベキナリ

今其ノ假目標ヲ左ノ如ク推定ス

| 品名 | 現生産力 | 第一期増産 | 第二期増産 |
|-------|-------------|-------------|-------------|
| 硫酸 | 1,000,000 噸 | 500,000 噸 | 1,000,000 噸 |
| 硝酸 | 1,000,000 噸 | 1,000,000 噸 | 1,000,000 噸 |
| 過磷酸石灰 | 1,000,000 噸 | 1,000,000 噸 | 1,000,000 噸 |

註一、硫安ノ一部ハ石灰質ニヨリ代換スルモ可ナリ

二、硫安ノ相當量ヲ見込メルハ硫酸資源ノ節約ト火薬原料ハノ轉換

トヲ考慮セル為メナリ

三、本生産ニ余裕アルモノハ南方及濠洲ニ供給ス

三工場立地

化学工業ハ其ノ榮耀廣汎ニ亘ルヲ以テ之レヲ大別シテ四ツトナス

甲、石灰ヲ主タル原料トスルモノ

人造石油、アセトン、硝酸、多クノアルコール（イソオクタン）ヲ含ム

等ノ製造之レニ關ス、之等ノ化学工業ニアリテハ今後石灰、増産ガ

主トシテ北支及南洋ニ期待セラルル限リ其ノ工場ハ之等現地及内地

ニ建設スベシ。其ノ製品ハ概ネ電線及肥料ニ關スルモノナルヲ以テ

工場ノ配分ニハ日南兩國ノ防衛及大東亞邊地ヘノ輸送ニ有裨察

スベシ

乙、電力原料トスルモノ

カ、パイロ及其ノ誘導體（イソクタインヲ含ム）、アロンヂム、各種合金鐵、電解苛性曹達等ノ製造之レニ屬ス、南方ガ開發容易ナル大水力ニ惠マレ居ルノミナラズ之等製品ノ原料關係ニ於テ有利ナルヲ以テ南方ハ適地トシテ考慮セラレベキモノナリ。但當分ノ間南方ノ電力ハアルニシツム製造ニ對シ最優先ニ割當テラルベキ事情ナルニ付キ此ノ際ハ之等工業ハ日滿兩國ニ建設スルヲ原則トスベシ

丙、無機原料ヲ使用スルモノ

曹達灰、苛性曹達、過磷酸石灰、セメント、ガラス等ノ製造之レニ屬ス。南方ガ磷礦、工業鹽、無煙炭等ノ資源豐富ナル點ニ於テ或ル程度適地ト認ムベキモ本來一放化學工業ニアリテハ其ノ所要原料單一ニ非ズシテ各種ノ副原料ヲ必要トシ其ノ製品ニ於テモ副生スルモノニ付利用消化ノ途ヲ講ゼザルベカラザル點ニ於テ概シテ綜合多角經營ヲ本則トスルモノナルヲ以テ當分ノ間之等南方原料ハ内地工場ノ培養ニ資スベキモノナリ。尙曹達灰ノ如キ化學工業ニアリテハ低

温操業ヲ有利トシ夫レガ爲メ世界ニ於ケル全工場ノ分布ハ北緯二十
二度以北ニ限ラレル事實、綜合經營ニヨル化學工業ニアリテハ其ノ
操業ニ當リ各細部ニ付キ綿密周到ナル監理ヲ必要トスル事實等ニ鑑
ミ南方ハ氣候、勞務員等ノ點ヨリ相當制約ヲ受クルコト已ムヲ得ザ
ルナリ

丁、有機原料ヲ使用スルモノ

護謨、砂糖、コブラ、パーム油等ノ農林資源ヲ原料トスル化學工業
ハノルマルヅツノールヨリノイツゴクシリンラ含ム之レニ屬ス。
之等ノ工業ハ大東亞共管内農業對策ト密接ナル關係ヲ有シ單獨ノ
推論ヲ許サズ。過剰生産ヨ如何ニスベキカ、境地又ハ内地加工ヲ主
トスベキカ、中間製品トシテ内地ニ搬入スル可否、在支工場ヲ如何
ニ介入セシムベキカ等々幾多ノ問題ハ今後ノ研究ニ俟ツベキモノナ
リ



三、開發、企業ノ方式及設備

化學工業ハ技術ノ進歩急激ニシテ一日モ倫安ヲ許サズ經營者ノ創意ト熱意トヲ要求スルコト至大ナルヲ以テ其ノ企業機構ハ努メテ一社一業主義ヲ避ケ同業間ツテ生産能率ノ増進、品質ノ向上、新製品ノ開發ニ不斷ノ努力ヲ爲サシムルヲ原則トスベシ。然ルニ一面化學工業ハ原料、製品、技術ニ於テ相互ニ關聯アルコト他工業ノ比ニ非ザルヲ以テ強力ナル統制機關ニヨリ各企業ノ連絡ヲ計リ單獨恣意ノ經營ヲ抑制スベシ又立地條件如何ニヨル生産費ノ相違ヲ大東亞圈内全般ニ亘リ一元的ニ調整スル方策ヲ講ズベキハ論ヲ俟タズ

今後ノ擴充計畫ノ遂行ニ當リテハ日滿支那四ツタタルト南方タルトヲ問ハズ當該企業ニ經驗アル輩モ堪能ニシテ信賴シ得ベキモノヲ嚴選シ其ノ術ニ當ラシムベシ。但現地出先ニ於ケル企業ガ其ノ建設及運営ニ當リ屢放漫ニ流ルル惧アルヲ以テ其ノ監督ニ特別ナル留意ヲ要スベシ

四 資金、資材、動力ノ關係
 前叙ノ如ク各般ノ化學工業ニ亙リ數量的建設計畫ヲ樹立シ難キヲ以テ
 茲ニハ數種ノ基礎品目ニ付假ニ規定セル増産目標ニ對シ必要ナル資金、
 資材、動力ヲ掲記スルニ止ム

| 品目 | 生産目標 | 年 | 千圓 | 千圓 | 千圓 | 千圓 | 千圓 |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 人造石油 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| 硫酸 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| 硝酸 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| メタノール | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| 過燐酸石灰 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| 基礎設備材用 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |
| 力(動力) | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 | 1000000 |

一 人造石油中ニハ瓦斯發生設備ヲ含ム
 二 硫酸、過燐酸石灰中ニハ硫酸設備ヲ含ム
 三 硝酸中ニハアンモニア及硝酸設備ヲ含ム、即ち硝酸約七十万吨
 ニ相當スル稀硝酸設備ヲ含ム

五 資源對策

各般ノ化學工業ヲ通シ最モ重要ナル原料ハ石炭ニシテ其ノ消費量ハ尨大ナル數字(前記諸品目ニ付テ見ルニフイシヤ)法ニヨル人造石油一千九百萬噸、硫安二百三十五萬噸、硝安百七十五萬噸、多クノル二百二十萬噸合計約二千五百万噸ニシテ他ニカバイ卜用等多量アリニ上ルベキヲ以テ今後極力滿支聯ニ北支ニ於ケル適性炭ノ増産ニ努メ之レヲ日滿支ブツツ内ニ建設セラルベキ之等ノ工場ニ供給セザルベカラズ

肥料製造及各般化學工業ニ必要ナル硫酸資源即硫磺礦ハ目下ノ處京方ニ於ケル埋藏量益ク未確定ナルモ大ナル期待ヲ存シ雖ク大部分内地鑛山ノ開發増産ニ俟タザルベカラズ。内地鑛量ハ相當豊富ナリト想像セラルルモ今後其ノ使用ハ益制限セラルベキヲ以テ他ノ硫安資源即山西管冀ノ他ニ於ケル石膏ノ現地利用ヲ考慮スル下共ニ硫酸ヲ使用セザル窒素肥料即硝安、鹽安ノ如キ代換品ノ施用奨励ノ積極的方策ヲ講ゼザルベカラズ



過燐酸石灰ノ原料タル燐礦石ハ南方多リスマシ、オウル、オーシヤン諸島ヲ占據開發セバ東亞共榮圈内ノ自給全ク成リ、其ノ餘力ヲ以テ全圈内ニ包含セラレベキ濠洲ニ於ケル過燐酸需要ヲ賄ヒ得ベク、尙過燐酸石灰ノ豫備原料タル燐石灰ニ付テハ佛印老開、中支海州、朝鮮端川等ニ多量埋藏セラレ

工業隆ハ海上輸送恢復セバ大東亞共榮圈内ニ於テ大体自給可能ナルモ今後ノルミオウム工業ノ飛躍的發達及人造纖維工業ノ復活如何ニヨリテハ猶相當量ノ鹽田ヲ南方及中支方面ニ開發補充スルノ必要アルベシ各種原料中炭ニ貧弱ナルハ加里奉源ニシテ關係者最善ノ努力ニ拘ラズ自給甚困難ナルガ如シ

研磨劑ノ需要ハ鐵鋼工業ノ發達ニ伴ヒ急速ニ増大スベキヲ以テアルミニ充當スルコトニ付テハオウムノ内低品位ノモノヲツツシム原料其ノ他石灰石、磁砂、夕田ノ磁石等ニシテモオウムト、磁石、耐火煉瓦ノ原料タルベキモノニ付テハ何等不虞ナシ



裏面白紙

農林資源ニ付テハ前記ノ理由ニヨリ省略スルモ茲ニ留意ヲ要スベキコトハ(一)護膜、椰子油等ノ高壓水素添加ニヨル高級潤滑油ノ製造(二)生産費低廉ナルジャバ蔗糖及糖蜜ニヨルアルコール、ブタノール、アセトシ等ノ製造ヲ可及的大規模ニ工業化スル一途ニシテ南方農林資源利用上最も重要ナル課題ナリトス

要之化學工業資源トシテハ加里ヲ除キ大東亞共榮圈中是ラザルナシト稱シ得ヘキモ建設用及操業用資材ニ於テハ銅ヲ始メトシニツケル(一)ニユーカレドニア占據前ニ於テ(二)コバルト、白金、水銀、ヴァナヂウム、アスベスト等重要ナルモノニ付キ著シク缺乏ヲ感ゼザルヲ得ズ。之等換品ニ付眞摯ナル研究ヲ要ス



六 技術關係

技術ハ大東亞國內ニ於テ切磋琢磨シテ自己ノ力ニヨリ育成スルノ外ナ
 キヲ以テ、今後企業擴張者間ニ完全ナル技術研究ノ交流ヲ敢行シ、國家
 目的ノ達成ニ協力セザルベカラズ、併其手無礙ニ他ノ發明者ノ利
 用スル如キモ、アラバ惹イテハ、考察者ノ創意ト熱意トヲ冷却喪失セシ
 ムベキヲ以テ、一方考察者ヲ推奨スルト共ニ他方利用者ニ感恩ノ意ヲ表
 セシムル爲メ、原則トシテ利用者ハ考察者ニ相當ノ謝儀ヲ支拂フベシ
 其ノ謝儀ハ考察者ノ功ハル權任ト利用者ノ受クベキ利益トヲ考慮シ、互
 定サルベキモノニシテ、當事者間ニ協定セラザルトキハ、兩者必ズ統制團
 體ノ決定ニ服シ、貴重ナル考察ヲシテ考察者ノ秘藏ニ終ラシムルベカラ
 ズ



航空機燃料と南方資源

- 一、航空機用ガソリン
- 二、イソオクタンの製造法
- 三、航空機燃料の添加劑
- 四、南方の酒精資源
- 五、航空機燃料工業の經營法

大河内正敏

大河内正敏先生著作目録

| | |
|-------------------|------------|
| 生産第一主義 | 定價 一・三〇 一五 |
| 統制経済と経済戦 | 一・〇〇 一五 |
| 持てる國 日本 | 一・〇〇 一五 |
| 農村の機械工業 | 一・四〇 一五 |
| 農村の工業と副業 | 九〇 一五 |
| 資本主義工業と 科學主義工業 | 一・二〇 一五 |
| 科學宗信徒の進軍 | 二〇 八 |
| 國防經濟と科學 | 一・二〇 一五 |
| 回轉爐製鋼法 | 二・五〇 二〇 |
| 施盤の検査法 | 五〇 八 |

東京・小石川・水道橋
理研産業團聯合事務所内
科學主義工業社
振替東京二五〇六番

科學主義工業

大河内正敏博士首唱の下に、生産擴充と科學技術の振展を目的として發刊せられつゝある月刊雜誌を『科學主義工業』と題する。
本冊子に收むる所論は本誌六月號處載の博士の論文である。毎月の御愛讀を賜はらんことを冀ふ。

毎月八日發行 定價 五錢 送料 三錢 一年六圓

航空機燃料と南方資源

大河内正敏



一、航空機用ガソリン

大東亞戰爭に於ける日本の大敗果は、世界を擧げて驚歎の眼を瞪らせたが、日本に對する認識の十分でなかつた米、英を初めとして、外國人の全く豫期しなかつたことは、日本の空軍戰術と航空機及びその操縦の優秀性であつた。さうして今後何れの國の國防にも航空機が從來とは全然比較にならない位重大な役割を演ずることには於て何人も議論の餘地がなくなつた。今日迄の航空機の發達を顧みると世界各國が初期に於ては翼の構造の研究に専念し、近來は動力の改良に研究の重點を置いて來たやうに思ふ。人類が鳥の飛ぶのを見て空を飛ぶといふことは、先づ第一に鳥の翼に似たものを身につけて飛ぶことを考へるのが自然であるからである。初期の研究者は獨逸のリエンタールを始めとして、グライダー式のやうに動力なしの飛行機から發達して來たのを見ても頷れる。

その後内燃機による動力が取附けられたが、その研究よりも、風洞其の他を使用して航空機を研究する方が盛んであった。併し最近はその早いしかも航続距離の長い飛行機が益々要求されると同時に、重機や輸送機の如き積載力の大きなものも要求されて来た。その何れもが皆強力な動力を必要とするために、航空機の機関と燃料との研究が非常に盛んになつて各國先きを争つて軽くて強力な原動機を製作し始めたのである。

原動機の研究が進むにつれて、より力を出すには従来の燃料では間に合はなくなつた。例へばガソリンの如きも普通のものでは如何に原動機が改良されても力が出ない。価格は高くなつてもより力が出るガソリンでなければ、航空機の速さも飛行距離も延びないから航空機用ガソリンといふ特殊のガソリンが現はれたのである。此種の燃料が今後何處迄改良發達して行くかは豫想出来ないが、現在は石油井戸から採取出来る天然ガソリンでは一定限度以上に力が出ない。その強弱の程度を示す物差しとしてオクタン価と云ふものが使はれてゐる。インオクタンを内燃機に使つた時に出る力を百として、他の燃料をそれと比較するとオクタン価八十とか九十とかになつて百に近いもの程航空機燃料として良いのである。

南方資源の數ある中で石油資源位帝國の國防に重要なものはない。軍艦も、戦車も、あらゆるものが石油を燃料とするから今日の競争は石油なしには戦へないからである。併し残念ながら南方の天然ガソリンは航空機燃料としてはオクタン価が低くて餘り良くないと云ふことである。勿論、南方油田から出来た重油を更に乾留してインオクタンを合成すれば何等問題はないが、重油はそのまま重油としての用途が非常に多いから、航空機用燃料の一部を使用するとしても、出来るだけ他の資源からインオクタンを造り出すことが考へられなければならない。

二、インオクタンの製造法

航空機用燃料として最適のインオクタンは大體今日三様の製造法がある。第一は天然石油を原料とするもの、第二は電氣爐により炭化石灰を作り是からアセチレン瓦斯を發生させ化學合成によつて造るもの、第三は植物質例へば糖蜜、芋等を原

料とし酸酵によるもの三方法がある。現在南方資源に頼り得ないものは第二の電氣法であるが、それは關印その他南方にある水力電氣資源が未だ開發されてゐないためである。

南方の水力資源に關しては和蘭の調査を初めとして已に我國に於ても種々發表されてゐるが、實に驚くべき豊富なものあつて、而も頗る低廉な電力が得られると云ふことであるから、カーバイド工業の如き有機合成化學工業の基礎となるものは、今後南方の水力電氣が大いに利用されることと思ふ。或ひはアルミニウム工業の如き現地に原料となるボーキサイトの大産床と豊富な電力とがあるから、世界的に最適な工業立地條件に恵まれてゐると云へる。唯、今後の電力開發を待つばかりである。

航空機燃料の主體となるインオクタンの第三の製造法は、今日直ちに實行し得る方法であつて、南方にある植物資源から酸酵によつて製造するのである。酸酵法と名づけられてゐるがその原料は酒類を製造すると殆んど變りがない。即ち南方に於ける過剰原料の一つである糖蜜、其の他澱粉或ひは濃粉糖等を原料とし、酒精を製造すると同様にブタノール酸酵菌を植え付けて酸酵させ、更にブタノールをインオクタンに變ずるのである。

内地に於てインオクタンを酸酵法により收得せんとすれば、直ちに食料問題と或ひは酒精製造と抵觸して多少の問題が残されるが、南方の製糖工場から出る多重の糖蜜、或ひは天然に存在する澱粉原料等を利用すれば過剰物資の消化ともなり何ら問題は起らない。而もその酸酵精は良好な家畜飼料となり畜産に對しても貢獻するところが大きい。元來、此の酸酵菌の利用は第一次世界戦争當時、火薬に用ひるアセトンを酸酵法によつて英國が生産して以來の研究に係るものであつて、わが理化學研究所でもこの菌の培養研究を約二十年前にやつた。其の後此の研究は滿鐵に移つて成果を擧げてゐる。アセトンを酸酵によつて製造すると同時に、ブチルアルコールが出来、此のブチルアルコールからインオクタンが造られるのである。だからインオクタン製造の主體とすればアセトンは副産物であつて是又重要な藥品溶濟である。

三、航空機燃料の添加剤

航空機用原動機の馬力を強大にするためには種々の手段が発見され、それは各國専門家の熱心な研究目標である。しかし馬力を強大にするため機關の壓縮比を増す程力が出ることは明らかだ。併しそのために燃料が適當の時期より早く燃え過ぎる缺點が具つて来る。それを防ぐために燃料中に早燃防止剤を入れるのである。簡単に云へば航空機の速力、積載力、航続力等を増すために、燃料中に薬品を添加する必要がある。更に言ひ換へれば、燃料中に添加剤を入れるとオクタン價が増すのである。

航空機用燃料にインオクタンを主體とすれば大いに力が出ることを先きに述べたが、更に此の添加剤を用ひると、インオクタン價の低いガソリンでも添加剤を使ふとオクタン價は増して來て發動機の出る。だから航空機用には餘り良くないガソリン、即ちオクタン價の低いガソリンでも添加剤を使ふとオクタン價は増して來て發動機の出る。

この添加剤は普通三種の薬品の混合劑であつて、その何れもが、酒精を原料として造り得るからインオクタンと同様に、糖蜜とか同じ原料が使用出来る。併し尙少しく詳しく云へば、兩藥品とも酒精を原料としてエチレン瓦斯を造り此の瓦斯との化合物であるから、必ずしも酒精でなくてもエチレン瓦斯を得るために、アセチレンを原料とし合成によつてエチレン瓦斯を造つても宜しい。或ひは石炭の乾溜により人造石油を造る時の副産物としても、エチレン瓦斯が得られるからそれを使つても宜しいが、南方資源はアルコール原料に特に豊富である點と、同一原料から同じやうな酸酵法で航空機燃料が一方に於て得られるから、立地上より見ても、燃料と添加剤とが同時に造られる方が宜しいと思ふ。

四、南方の酒精資源

關印にもフィリピンにも幸ひにして酒精工場は多數にある。さうして多くは砂糖工場の廢品である糖蜜を原料として、

從來酒精の生産をやつてゐた。南方過剩資源の内砂糖の處分についても論議があつて、甘蔗畑が他の農産物に轉換されるといふことも聞いた。無論、大東亞共榮圈の建設に對し全體的に見て不足農産物の増産のためと思ふが、砂糖が過剩であつても、その國防上の用途が十分に考へられた上でなければ輕々に斷すべきことではないと思ふ。

南方の糖蜜は從來日本にも輸入されてゐたが、歐米等にも増産されて冷んど全部が酒精の原料とされてゐた。現地の砂糖工場に附屬した多數の酒精工場でも使ひ切れなかつたために、運搬に對して非常な難物であるに係はらず、糖蜜が遠く迄運ばれてゐたのである。臺灣が日本の領有に歸した初期に於て、砂糖工場から出る廢物の糖蜜は、そのまま捨てれば腐敗して悪臭を放ち堪へ難い結果、穴を掘つて埋めてゐた程であつたが、酒精工場を建てアルコール原料に糖蜜を使用し、使ひ切れな分は内地の酒精工場に供給してゐた。故に、假りに従前通り砂糖が生産されても、その廢品から航空燃料を酸酵によつて造る餘力は相當にある。若し大東亞共榮圈内の砂糖の生産過剩に苦しむやうなことがあれば、甘蔗の汁から砂糖を精製せず、甘蔗をそのまま原料として酸酵して航空機燃料の生産に振り向けるのが宜しいと思ふ。これは自由主義經濟下に於ても採算可能であるといふことであるから、今日直ちに着手して差支へない問題だ。

航空機燃料と云へば、吾々は直ぐガソリンを思ひ及ぶが、ガソリンよりも遙に良好な燃料が植物資源を原料として酸酵によつて得られることを知らなければならぬ。人造石油工業は石油代用品を製造する工業であるといふまでもないが、併し、生産の一部には割合にオクタン價の高いガソリンが出来る、即ち天然ガソリンよりも良好なものが出来るから、強ち代用品工業とは云へないのである。此の點は丁度人造ゴムが天然ゴムよりも使用の箇所によつては良好であるために、代用品ではないと云ふことと同じだ。人造石油工業の重要性は爰にあつて、例へば南方に天然石油の豊富な油田があつても、内地の人造石油工業は國防上少しもその重要性が失はれないのである。酸酵法による航空機燃料の製造は、植物資源を原料とする點に於て資源を使ひ盡すおそれがない點がよいと思ふ。天然石油の如き埋藏量の推定には、非常な困難があり、従つて油田の生命は豫定出来ない。無盡蔵と思はれた油田も直きに衰退して、他に新しい油層が発見されない限り毎年その地方の

産額は選減する。人造石油工業も石炭を原料とするために頼みにした炭質が、掘り盡されれば、また他の地方から供給を受けなければならぬ。併し石炭は比較的埋蔵量の推定が正確に出来るから、企業の上に多分の計費性があるが、掘り盡すことは何物を以てしても防ぎ得ない。植物資源は此の點に於て無盡蔵であるから企業の確信性は十分にある。さうして南方には醱に使用し得る植物資源が獨り砂糖や糖蜜に限らず、野生の澱粉、例へばカッサバ根の如きものがある。勿論これを土人が栽培してゐる處もあるといふから、未開墾地の多い南方としては好適の事業である。

獨逸の酒精工場は馬鈴薯畑の中央に建てられて、薯を原料とし、醱酵して酒精を造るが、その糟と葉や蔓等を豚の飼料とし、豚舎からは畑に肥料を供給し、更に醱酵の際發生する炭酸瓦斯までもパイプで畑に引いて肥料とする。それ迄に科學化された經營法によれば、酒精の生産原價は、臺灣で原料代金具の糖蜜から造つた酒精の原價より廉かつたといふくらゐである。南方に於ける醱酵工業は國防上から見ても是非發展させなければならぬ。

五、航空機燃料工業の經營法

航空機燃料工業の立地を考察するならば、電力を主體とする場合と、醱酵による場合とによつてその立地が變り來ることはいふまでもない。先づ電力により合成する場合を考へると、すでに開發せられたる電力は内地、朝鮮、臺灣、滿洲等であるから、ここに適當の地點を撰定すること勿論であるが、大體に於て十分の餘力は望めないと思ふ。さうして今後、所要の航空機燃料は其の量が増大するから共榮圈内全部のものを電力によつて造り出すことは不可能だ。さうして一方には輕金屬工業の如き、航空機體の製造に重要な工業が多量の電力を必要とし、而もこればかりは電力以外のものでは生産が出来ないのであるから、かれこれ考へ合はすと航空機燃料工業は、三種の製造法中の一つだけに頼る譯には行かない。一部は電力法式により、一部は醱酵法に、一部は石炭、石油を原料とする製造法といふふうな製造方式を適當に分散させなければならぬ。

南方の莫大な電力資源は未だ開發されてゐないから、それは他日を俟つとして、差當り着手し得る醱酵法による航空機燃料工業の經營に就て考察を下してみると、その立地はそれぞれの地方から得られる植物資源によつて決まる。糖蜜を原料として得られる場所はその生産能力が糖蜜の量によつて限定される。カッサバルト其の他澱粉の得られるところは、其の地

方の澱粉原料の蒐集力によつて其の工場の規模が決定される。併し、場合によつては糖蜜と澱粉原料と兩者を混用することもあると思ふが、兩者は設備の一部が同じでないから、なるべく工場の作業と設備とを單純化するため、何れか一つを出来るなら専門にした方が宜しい。

これに反して糖蜜を用ひる場合も澱粉を用ひる場合も、航空機燃料を醱酵によつて生産する傍ら、同じ原料で酒精を生産してその一部を添加劑製造に振り向け、一部はアルコール飲料を製造するのが良いと思ふ。化學工業經營の原則は、一つの原料から多數の製品を造ることが合理的であつて、逆に多種の原料から一つの製品を造ることは極力避けなければならぬ。原料として糖蜜或ひは澱粉何れか一を撰べと申したのはこのためである。

添加劑の一つの成分として、臭素が絶対に必要であるばかりでなく、寫眞、醫藥等にも用途が廣い。さうして目下この代用品はまだ見出されてゐない。だから、各國とも岩鹽關係の鹹水、或ひは苦汁、若しくは直接海水から臭素を採集してゐる。米國のダウ會社の如き海岸に大規模の臭素採集工場を數年前に建設し、すでに作業してゐる。此の種の工業を南方に於て起すのは國防上必要だと思ふ。さうして先きに述べた酒精を原料とし臭素と化合させ添加劑を造るのである。と云ふのは、臭素(液體)の運搬が容器その他の點で非常に面倒であるから、出来れば臭素採集の現地で、すぐ添加劑とする方が得策であるからだ。海水からそのまま臭素を採る代りに海水の濃厚となつたものから採集すれば、一層設備も少さく且つ作業が容易である。だから、日本の如く鹽田で醱酵する場合は、鹽の副産物の苦汁を原料として臭素を採つてゐる。ところがそれだけでは到底需要に應じ切れないから、海水を原料とするのである。海水中の鹽分と臭素分とは比較にならぬ位臭素分が少くて鹽一萬屯の採れる海水から臭素は僅か六屯位しか採れない。だから海水から所要の臭素を採り、同時に鹽を採ると鹽の生産過剩が起るのである。日本は戦前、工業鹽が自給自足出来なかつた。大東亞共榮圈内全部の鹽でも足りない。鹽不足の共榮圈内で、鹽の生産過剩になる工業、しかもそれが國防上絶対に必要な工業であるとすれば、これを起さない理由はない。況んや工業鹽そのものも亦國防上絶體に必要な原料であるから、南方植物資源による航空機燃料工業を興すとすれば、製鹽事業は同時に經營さるべきだ。さうして共榮圏以外からの鹽の輸入を斷じて排斥することが高度國防國家建設の原則である。

業工密精と争戦

最新刊 青木保 著 博士 東京帝大教授 東京帝大農工博士

今から廿年前、著者が光學機械の必要を説いた時「眼鏡なんか兵器と何の関係があるか」と反問した人があると言ふ。爾來精密器械は長足の進歩をした。精巧正確な爆撃照準機も生れた。空中道から投げる一彈はよく巨艦を沈没せしめ、一發の魚雷は不沈艦を其名稱と共に抹殺せしめるに至つた。しかし、兵器に限らず精密機械は一萬分の一ミリの狂ひを問題にするほどの精度を要求するのである。こゝに精密工業の重大さがある。著者は多年に亘り精密工業の振興を叫んで今日に及んだが、本書は收むるところは即ち其發展の論集であり、要領の至精ほどはしる弊世の文字でもある。

砂鐵の研究

東北帝國大學教授 理學博士 岩瀬慶三 著 A6判七二二頁 八圓五〇錢 七三〇〇

開公の究研大的策國

鐵鋼増産は刻下の國策中最も急を要する處のものであり、我國に於て豊富なる埋藏量を有する砂鐵に關しては既に三十年來その製鍊が續けて來られたが、悲しい哉未だ成功の域には到達して居らないのである。茲に於て著者は東北帝大金屬材料研究所に於て過去十二年間砂鐵製鍊の基礎研究に没頭し、漸くにして、その工業的試験に着手する迄に成功を見たのである。即ち本書に於て其研究結果の公表を行ひ、國家緊急の要望に應へんとする國策的著述であり、砂鐵のみならず一般鐵鋼の製鍊上裨益する所極めて多大なるべきを信じて疑はぬ。

技術の發展と 經濟の交流

最新刊 經濟史家として知られた原著者が、歴史哲學的洞察をもつて經濟史の根柢に技術の發展の存することを明確にし、人間生活の進歩的發展を技術の理念を通じて歴史的に證明せんとしたものである。

技術經濟學

高山洋吉 著 A5判金三卷 各册金二圓

經濟學の革新

印南博吉 著 A6判二五〇頁 二圓八〇錢 二二〇

ウルタース・ハッゼン 著 佐々木俊次 譯 A5判三〇一頁 定價金三圓 送料二〇錢

- 松前重義 著 科學・技術・思想 價一・三〇
- 松前重義 著 東亞技術體制論 價一・八五
- デックウエル 著 技術の哲學 價二・八〇
- 永田廣志 譯 技術の哲學 價二・八〇
- ソノバルト 著 技術論 價二・八〇
- 阿閉吉男 譯 技術論 價二・八〇
- 宮本武之輔 著 技術と國策 價二・五〇
- 宮本武之輔 著 技術者の道 價二・五〇
- 輝峻義 著 勤勞と文化 價二・八五
- 輝峻義 著 生産と勞働 價二・八五

六〇五二東京替振 社業工義主學科 内閣業産研理 橋道水・川石小

六〇五二東京替振 社業工義主學科 内閣業産研理 橋道水・川石小

裏面白紙

RS

= 刊 月 =

| | | | |
|---|---|---|---|
| 工 | 工 | 生 | 科 |
| 具 | 作 | 産 | 學 |
| と | 機 | 青 | 主 |
| 材 | 械 | 年 | 義 |
| 料 | | | 工 |
| | | | 業 |

207 1/2

極秘

大東亞重工業建設ニ關スル私見

委員

郷

古

潔

裏面白紙

207 3/2

大東亞重工業建設ニ關スル私見

立地

郷古潔

大東亞共榮圈確立ノ要諦ハ、帝國ヲ主軸トスル大東亞經濟力ノ擴充ニアル。從ツテ帝國ノ重工業ヲ共榮圈産業ノ中核トシテ、先ヅ以テ其生産力ノ育成ニ力ヲ竭スベキハ論ヲ俟タヌ。殊ニ重工業ノモツ國防上ノ意義ハ新業經營ノ經濟的立地條件等ヨリ見テ、重工業ノ擴充ハ、内地ヲ中心ニ、滿支ヲ其補助的兩翼トスベク、南方地域ノ工業ハ主トシテ修理及資源加工處理ノ程度ニ止メ、本邦ヨリノ技術ノ移植ニヨリ輕工業ノ發展ヲ中心トスベキデアアル。而シテ南方資源特ニ其豊富ナル地下資源ハ、之ヲ本邦重工業ニ直接結合セシメテ充分其活用ヲ圖ルベキデアアル。而尤モ金屬工業中アルミウムの工業ノ如ク、原材料ハ電力關係ヨ

リ見テ、現地ニ一貫作業工場ヲモツテ適當トスル如キモノハ、之
ヲ例外的ニ内地ニ於ケル新業ノ補助トシテ現地ニ開設スルヲ妥當
トスルモノ、如クデアアル。其他南方現地ニ於テ、或程度規模ノ修
理加工工場ノ保有ヲ必要トスルモノハ、航空機、自動車、車輛、
重要機械等ノ重工業部門ニシテ、主トシテ重要ナル産業地帯、交
通ノ要衝、國防上ノ重要地點ニ於テ之ガ開設ヲ認ムベキデアアル。
尙本邦重工業ノ工場立地ハ、空爆等ノ戦禍ニ備ヘ本洲、九州、
北海道、臺灣、朝鮮等相當間隔ヲ設ケテ設置スルコトヲ考慮スベ
キデアアル。

裏面白紙



三、生産擴充ノ目標

(1) 本邦ノ國防及産業發展ノ要求ニ應ズル擴充

昭和十一年ノ内地工業生産額ハ一三〇億圓、三年後ノ十四年ニハ倍増シテ二四八億圓ニ達シタ。其中重工業生産額(金屬工業及機械工業)ハ工業總額ノ四四・九%即チ一一一億圓ヲ示シタ。其後ノ工業生産總額ヲ物價ト工業生産數量指數ヲ以ツテ推算スルニ、十五年ニハ前年ヨリ一〇・二%、十六年ニハ更ニ一〇・七%ヲ増加シ、十六年ノ總額ハ三〇五億圓ニ達シタ。假リニ工業生産額ノ五〇%ヲ重工業生産(實際ハ五〇%以上ト考ヘラル)トスレバ、十六年ノ重工業生産ハ一五二億圓ト推定セラレル、之ヲ基礎トシテ、今後工業生産總額ガ毎年一〇%、重工業生産額ガ毎年一五%ハ重工業生産數量指數ハ十六年ニ一三・三%、十五年ハ異常ニテ一四%ノ増加、ソノ以前ハ一〇%以上二八%余ノ増加率ヲ示ス。ヲ以ツテ發展スルトシテ三年後ノ十九年ニハ工業生産總額四〇二億圓、重工業生産額二二

九億圓ニ對スル勘定トナル。即チ重工業生産額ハ十四年實績ニ比シ、五年間ニ倍增ノ計算トナル。

右ハ南方開發ヲ特殊ノ需要ヲ見込マザル發展の趨勢ノ推定デアリ、即チ常態トシテコノ程度ノ發展ハ一應ノ目標トシテ考慮シテラカネバナラナイ。

(2) 戦前ニ於ケル南方各域經濟狀態ト社會秩序ヲ回復維持スルニ必要ナル農工鑛業用機械器具、交通通信機關用機械器具及裝備、其他生活必需品用トシテノ金屬及金屬製品ヲ供給スルコト

東亞共榮圈内主要國タル滿洲國、中華民國、濠洲、新西蘭、泰國、佛印、比律賓、馬來、蘭印、ビルマ、印度ノ十ヶ國ガ、昭和十三年ニ外國ヨリ輸入シタ金屬及金屬製品、機械器具、自動車其他乘物類等ノ重工業品ハ、當時ノ爲替換算ニテ總額二十四億二千萬圓ニ上ル、此ノ中本邦ヨリノ輸出ヲ三億四千五百萬圓ヲ算スルガ故ニ、若シ右東亞諸地域ノ經濟狀態ヲ戰爭前ノ狀態ニ維持スルコトヲ目標トスルナラバ本

邦トシテハ約二十億圓ノ重工業品ヲ一手ニ引受ケテ供給スル目標ヲ
以テ對處セネバナラヌ。
尤モ右ノ中滿支ノ輸入ハ五億七千萬圓ノ中大半ガ日本カラノ供給一
約三億圓ニテアリ。印度、濠洲、新西蘭ヘノ輸入十二億三千万圓一
其中日本ヨリノ供給一千四百万圓ニ就テハ、目下之等ノ地域ガ末
々我ガ勢力下ニ制壓セラレテキナイカラ除クトスレバ差當リ考慮ス
ベキハ泰、佛印、比律賓、馬來、蘭印、ヒルマ等既ニ略奪的ニ占
領ヲ了シタル地域及平和裡ニ協定ヲ帝國ヲ中核トスル共榮圈ノ建
設ニ協力セル地域ニ就テアル。之等地域ノ重工業品輸入ハ昭和十
三年ニ於テ六億二千万圓一爲替ヲパートスレバ三億六千万圓ニテ
本邦ヨリノ供給ハ三千万圓ニ過ギヌ。
即チ今後年額約二十億圓ノ重工業品ヲ供給スルコトヲ一應ノ目標
トシテ產當ツテハ約三億圓程度一右述六億貳千万圓ヲ爲替パートシ
タ金額一ノモノヲ供給スル建前トスベキデアル。尤モ右ノ中順序トシ

テハ最モ緊切ナルモノヲ第一トスベキハ論ヲ俟タヌ。尙戰前ノ状態ニ回復維持スル爲メニハ從前ノ輸入ノ外、戰爭ニヨル破損ノ修理用ヲ附加セネバナラナイ。本邦ヨリノ供給ノ緊急ノ順序ハ次ノ方針ニヨルベキデアル。

(イ) 地下資源ノ開發ニツイテハ日滿支ノ恒久的開發ハ當分支障アルベキモ、南方開發ハ速カニ施策シテ將來ノ基礎確立ヲ急務トスル

(ロ) 南方處理方針トシテハ本邦、必需資源ノ獲得就中軍需資材ノ開發獲得ヲ緊急ナル要求トスルガ故ニ、之ニ關聯スル産業所要ノ重工業品ヲ供給スルコト、特ニ農業、鑛業、交通、發電關係ノモノニ重點ヲ置クコト

(ハ) 右基本方針ニ付ツテ
平和的進駐ノ國ニ對シテハ、既存設備ノ運轉維持ニ必要ナルモノヲ供給スルコト

戰爭ニヨリ進駐セル國ニ對シテハ、既存權益接收ト共ニ破壞セラ

レタル設備ノ復舊ヲ第一トシ、之ニ必要ナルモノヲ供給スルコト
 (特ニ緊急資源ノ中ノ馬來ノ錫、鐵、東印度ノ錫、
 石油、比律賓ノ銅、マシ、ク、
 當破壞セラレ、更ニ、
 毛織物ノ擴大ト共ニ、破壞方豫想セラレルガ故ニ、破壞多カルベ
 キ嶺山施設、製油施設等ノ速カナル復舊再開ヲ肝要トスル)
 尙新規生産ノ重工業品ヲ供給セズトモ今日ノ資材難ニ鑑ミ、内地ノ
 不急施設或ハ遊休設備ノ轉用、現地ノ置換活用、乃至代用品ノ利用
 等ヲ考慮スルコト肝要デアル、

裏面白紙

| | | |
|---------|--------|--------------|
| スマトラ島 | トバ湖 | 六五萬KW |
| セレベス島 | トウチ湖 | 二七萬KW |
| セレベス島 | ボソ湖 | 一六萬KW |
| 蘭領三島等ニア | マンベラノ河 | 二〇〇萬乃至三〇〇萬KW |

之等ノ水力ハ今後漸ヲ追フテ南方地域ノ産業交通ノ發展ノ爲メ開
發ヲ考慮スベク、ソノ開發計畫ニ副フテ所要機械ノ生産計畫ヲ樹
立スベキデアル。

(4) 前掲諸項ニ掲ゲタル如キ經濟關係資材ヲ始メ、生活必需品等ノ國
内交流並之ニ關聯スル人的移動ニ必要ナル船舶、飛行機、自動車、
車輛等ノ交通通信機ヲ本邦内ニ擴充スルコト
前述ノ如キ諸要求ヲ考慮ニ入レテ、其所要額ヲ定メ、而シテ國防上
ノ要求ト經濟的立地ノ調和、基礎工業ト加工及原始産業トノ有機的
連絡ヲ勘案シテ、遠大ナル計畫ト一元的統制ヲ以ツテ所定ノ目標ヲ
達成スルコトガ肝要デアル。



東亞各域ノ重工業製品輸入額ト本邦ノ供給量(單位千圓=換算 1938年=昭和13年)

| | 鐵鋼其他金屬及製品 | | 機 械 類 | | 自動車其他乗物 | | 合 計 | |
|-----------------------|-------------------|---------------------|------------------|-----------------|---------------------|--------------|---------------------|------------------|
| | 輸入總額 (對日輸入) | | 輸入總額 (對日輸入) | | 輸入總額 (對日輸入) | | 輸入總額 (對日輸入) | |
| 泰 佛 印 比 律 賓 馬 來 蘭 小 計 | 16,420 (622) | 19,462 (98) | 17,292 (15,286) | 22,980 (171) | 3,677 (機械類 ニ含マル) | 17,091 | 37,389 (15,908) | 59,533 (269) |
| 小 計 | 46,005 (879) | 45,447 (545) | 47,761 (2,206) | 62,465 (1,126) | 25,461 | 25,226 | 119,227 (3,085) | 133,138 (1,671) |
| 小 計 | 8,196 (3,674) | 26,211 (381) | 11,084 (4,645) | 21,066 (226) | 22,285 | 7,946 | 215,096 (8,319) | 55,223 (607) |
| 小 計 | 235,514 (6,199) | 282,406 (23,660) | 101,686 | | | | 619,606 (29,859) | |
| 對日爲替率(1398日圓) | | (164.1 百萬圓) | | (63.4 百萬圓) | | (367.3 百萬圓) | | |
| 印 度 | 152,555 (3,856) | 329,806 (8,795) | 55,406 | | | | 537,767 (12,651) | |
| 中 國 | 130,624 (863) | 157,105 (613) | 169,000 | | | | 456,772 (1476) | |
| 新 西 蘭 | 62,331 (188) | 100,350 (148) | 72,860 | | | | 235,561 (336) | |
| 小 計 | 345,510 (4,907) | 587,261 (9,556) | 297,310 | | | | 1,230,100 (14,463) | |
| 香 港 | 51,794 (183) | 18,435 (154) | | | | | 70,229 (337) | |
| 南 洲 | 214,189 (77,664) | 278,713 (22,970) | 9,580 | | | | 502,082 (30,634) | |
| 中 國 小 計 | 205,983 (77,847) | 297,148 (22,124) | 9,580 | | | | 572,311 (30,971) | |
| 東 亞 全 域 | 847,014 (38,953) | 1,166,815 (25,634) | 406,995 | | | | 2,412,427 (34,529) | |

裏面白紙

三 企業經營形態及建設方式

- (1) 南方現地工業設備ノ運用ニツイテハ、現在ノ處軍政下ニ於テ民間ノ能率ヲ利用スルコトニ務メラレアルモ、企業形態トシテハ凡テ民間ノ創意活用ヲ主眼トスベキデアル。
- (2) 可及的速カニ地域的統制カラ業種別統制ニ移ルコトノ必要ハ輕工業部門モ重工業部門モ全様タルベキデアル。
- (3) 政策ノ一貫ヲ維持スル爲メ、現地工業ノ統制機關ニ常ニ内地工業ノ統制機關ノ方針ヲ反映セシメル工夫ガ肝要デアル。
- (4) 南方地下資源ヲ直接本邦重工業ニ結合セシメル爲ニ一元的統制機關ヲ必要トスルモ、差當リ南方地域ヲ單位トスル鑛業統制機關ヲ設置シ、重工業用資源ノ確保ニ於テ是下計畫性ヲ保持セシメルコトヲ考慮スベキデアル。